



WHITE CHOCOLATE

— 2017 —

尾道市立大学 日本文学科 第14期生 卒業制作集



目次 CONTENTS

恋すれば歌詠み

岡本明香里

OKAMOTO AKARI

005

どんなに恋の歌を贈っても、先生にはこの気持ちが伝わらなくて。

行きつく先にあるものは

土井利美

DOI TOSHIMI

105

それぞれの感情を胸に、全ては動き出す。それが行きつく先は、まだ誰にも分からない。

サナギの旅

田端敏之

TABATA TOSHIYUKI

189

「……そうだ、旅に出よう」閃いたのは、なぜかコンビニのバイトでレジに立っていたときだった。

総評

光原百合

291

恋すれば歌詠み



岡本明香里

装丁・・長谷川 さや

まだ少し朝晩の肌寒さはあるけれど、昼間の風は暖かで、始まりの季節を感じさせる、そんな春のことだった。

キャンパス内の植木は青々と茂り、さわさわと音を立てながら揺れる。昼休みの青空の下のレンガの建物群は、大学案内に載っている写真そのままだ。つい先日入学したばかりで、このキャンパスの広さにはまだ慣れることができない。似たような赤茶色の建物がいくつも並んでいて、自分の目的の建物はここで合っているのかな、とよく不安になる。

その中でもひとときわ目立って、美しいレンガ造りの建物の前を通りかかった。屋根がとがっていて、ガラス窓がいくつも取り付けられている。これまでに見慣れてきた日本家屋の建築様式とは違う、伝統的な西洋建築の建物の美しさに、つい見とれてしまう。この建物は、校舎案内には「礼拝堂」って書いてあった。キリスト教に関連する行事をしばしばやっているらしい。

入学前から興味はあった。けれど自分はキリスト教徒ではないし、気軽に入っているものか、なんとなく入りづらさを感じていた。

礼拝堂を眺めながら、ゆっくりと歩く。入り口の前を通り過ぎて行こうとしたとき、前から男の人が歩いてくるのが見えた。背は高めで、体つきの細い、眼鏡の男性。物憂げな表情で、やや猫背ぎみ

に歩いている。アーチ状に作られた入り口をくぐり、礼拝堂の中へと入っていった。

その顔や背格好には見覚えがあった。

この大学を受験する前の日、大学近くのビジネスホテルで一泊した。京都の中心部にある大学なので、地元の福井から当日に移動するのは大変だからだ。

お母さんと一緒に電車に乗って、福井から京都に向かった。予約していたホテルのチェックインはまだ時間があったので、近くで時間をつぶすことになった。御所を囲む京都御苑の中を、景色を見ながら通り抜ける。その先に小さな神社を見つけた。地図を見ると梨木神社なしのきじんじゃ、と書いてある。お参りはさつき北野天満宮でもしたって、とお母さんに言うと、お参りはやってやりすぎるもんやないんやで、と言われた。

石畳の参道を歩いていくと、おみくじなどの置かれた社務所があつて、その向こう側に手水舎がある。柱の説明書きには、「当社境内は、藤原良房の娘明子あきこ御所跡で……」とかつて書いてあるので、へえ、由緒正しいんだ、と思った。この水は染井の水と呼ばれているらしく、京都三名水のひとつというだけあって、とても澄んでいた。手袋を外して柄杓の水を手を受ける。冬の水はやっぱり冷たい。ハンカチで手を拭いて本殿に向かう。

参拝者を迎えるように構えている立派な門が立ち、のれんみたいに、丸い花のような模様が三つ並んだ白い布が冬の風にはためいていた。門をくぐると何かの舞台のような小さなお堂があつて、その周りをぐるりと取り囲むようにして参道が続いていた。

私たち以外に参拝者はいないのかと思っていたら、ちょうど男性が一人、参拝しているところだっ

た。拝殿に正対して手を合わせている。その時間がやけに長い。お母さんと二人で黙ってその人の参拝が終わるまで待った。

振り返ってようやく私たちに気づいたんだろう。眼鏡をかけたその人の顔に、驚きと気まずさが出ている。

「すみません」

慌てて私たちに一礼して、グレーのロングコートを着た細身の体をひるがえし、そそくさと立ち去った。礼儀正しい人なんだろうと思った。普通はすみません、て言うところを、すみません、なんと、「み」をきちんと発音したから。

参拝から帰るとき、それにしてもあの人は何をあんなに一生懸命祈ってたんやろね、と言いつつた。ずいぶん長いこと参つとったよね。神道に熱心な人なんやろか。そんな会話をしたことを覚えてる。

今、礼拝堂の中に入って行ったのは、多分その人だと思う。

この大学の人だったのかな。先生？ いや、大学の先生ならもうちょっと堂々と歩いてもいいよな……。なーんか先生っぽくない。学生かな？ にしては、年が上だよな。いやでも大学だから、社会人学生ってパターンもあるよね。それか、職員さんとかかなあ。けどこの大学って、ちよいちよ

い観光客っぽい人も交じってるし……。

気になって、少しどきどきしながら私も中を覗いてみた。立て看板があつて、「ご自由にお入りください。見学はお静かにお願ひします。飲食・喫煙はご遠慮ください」と書いてある。神聖な場所なのだと思い、足音を立てないようにそつと中へ進むと、確かにあの人はいた。というか、その人だけだった。自由に開放されているからといって、多くの人が訪れるわけではないのだ。

正面奥の講壇に向くように、木製の長椅子が一定の間隔をあけてたくさん並んでいた。当たり前といえは当たり前なだけで、ドラマなんかの結婚式のシーンでよく見る教会そっくりだった。

その人は前から二列目の長椅子の、一番左端に座っていた。白いカッターシャツの襟首と黒いセーターの背中が見える。

私は右側の通路をなるべく静かに歩きながら、礼拝堂内を見回した。赤、青、黄、緑の四色の長方形のガラスが規則的に配置された縦長のステンドグラス窓が、左右の壁に並んでいる。外に比べると少し薄暗くなった堂内に、窓のステンドグラスを通して光が差し込むのだ。焦げ茶色の長椅子も、よく磨かれてつやつやと光っている。美しい場所だ。

一番右側の列の、真ん中あたりの椅子に適当に座ってみた。背負っていたリュックサックを隣に置いて、深く腰掛ける。静かな空間。ゆっくり座っていたい場所だと感じた。

両腕を上げて、伸びをする。自然と天井が目に入る。屋根はアーチ状に高く作られていて、梁からはシックな黒っぽいシャンデリアがぶら下がっている。オレンジ色のやわらかい光が、神聖な場を守るようにともっていた。ここで賛美歌を歌ったりしたら、きっと素敵だろうと想像した。

あの男の人は、うつむき加減にじつと座っていた。男の人にしては少し長めの、大きくうねった髪が顔に半分くらいかかっていて、表情まではよく分らない。あの人はここへ何をしに来たんだろう。特にイベントもないみたいだし、神父とかそういう人もいない。休憩とか、考え事……。それとも誰かと待ち合わせ？ だいたいあの人が、初めて見たときは神社にいたのに、今日は礼拝堂にいる。妙な人だな。

特に急ぎの用事もない私は、そのまましばらくその人の様子をうかがっていた。

ふいにその人は天井を仰いだ。眼鏡を外して傍らに置く。口元や頬のあたりを歪めたように見えた。それからまたうな垂れる。額に右手を当てる。目頭のあたりを指で触ったと思ったら、顔の右側を手のひらで覆う。鼻をすする音が聞こえた。

あれ、泣いてる……。なんで急に？ 泣ける要素なんてあるかな。特に何が行われているということもない昼休みの礼拝堂に。午前中に辛いことでもあったのかな。

ハンカチで鼻と口を覆い、声を押し殺しているけれど、たびたび苦しそうな吐息がもれる。背中をかがめ、肩を上下させながら呼吸している。目元を拭う。鼻をこする。ついにはポケットティッシュを取り出して、鼻をかんだ。それから何分かしてやっと落ち着いたのか、深いため息をついた。眼鏡をかけ直し、荷物を抱えて立ち上がる。そこでその人は、ちらりと私を見た。

一瞬、驚いたように目を見開いて、一步退いた。ぱっと背けた顔をクリアファイルで隠しながら、通路を足早に去っていく。悲痛な思いを人に悟られるのを、必死に隠そうとしている感じだった。まったくの、絶望。どうにもならない辛さ。大切な人を亡くしたときのような、何かそういう不幸が

あの人の身に降りかかって、独りで耐え忍んでいるみたいだった。

なんだかドキドキしてしまって、私まであの人みたいにならないうつむきながら礼拝堂を後にした。

「あれ、志保ちゃんやん」

わっ。びっくりした。なんか今日は心臓に悪いことばかり起こる。

「梨子ちゃん」

「びっくりしすぎやろ。リアクションおかしいで。なんかあったん？」

「いや、別に」

秋本梨子ちゃんは、大学でできた、初めての友達。入学して初めて通学した日に、仲良くなった。バス停の時刻表や行き先表示の前でまごついていて私を見かねて、声をかけてくれたのだ。福井にいたときはほとんど路線バスに乗ったことがなくて困っていたから、すごく助かった。

「次、授業やる？ 一緒に行こ」

うん、と答えて、並んで歩き始めた。同じ文学部国文学科の一年だということが分かってから、履修登録について相談したので、たいいての授業は梨子ちゃんと同じのを受けることになっている。

「次の授業って、日本文学概論Ⅰ、とかいうやつだよ」

「そうそう。シラバス見たら、古文の授業みたいやったで。和歌文学成立の歴史を学ぶことを通して……とか何とか」

「うわ、私、古文は別に得意じゃなかったな」

「え、あたしけっこう得意やでー」

二人で話しながら歩くと、すぐ文学部棟にたどり着いた。講義室に入ると、梨子ちゃんは可動式の長机の上にトートバッグをどかっと置いて、トイレに行った。

さっきのあの人は結局、何者だったんだろう。頭の中にはまだ、あの人の苦しそうな顔がいつまでも残っている。

じっと動かないでその場にとどまっているのかと思ったら、唐突に帰っていった。人がいないところでゆつくりするのが好きなんだろうか。だとすると、私、邪魔しちゃったな。しかもあの人の邪魔したの、二回目だ。もしかして私のこと、記憶に残ってたりするかな。

絶対見ちゃいけないものを見ちゃった気がする。大人の男の人が泣いているのを生で見るのは、たぶん初めて。だからかな、妙に感動してしまった。普通、大人の男の人は涙を見せないものだと思っていたから。そういう人がかっこいい男の人だと思っていたから。でも、普通は泣かないものなのに泣くってことは、あの人にはそれくらいいいことがあったってことだよ。何があったんだろう。気になる。あんまりつらそうだったから、自分には関係ないのに心配になってしまう。年上の人にこんなこと思うのは変かもしれないけど、そばで話を聞いてあげたい感じがした。

梨子ちゃんがトイレから戻ってきて数分後、チャイムが鳴った。その直後、講義室の前の方のドアが開いた。白いシャツの上に黒い薄手のセーターを着た、痩せ型の男性。

あれは。礼拝堂にいた、あの人だ。ゆつくりと教壇に上り、机の上に資料か何かの束を置いた。室内を見渡しながらか声をかける。

「えー、この授業は『日本文学概論Ⅰ』となっております。お間違えの方はいらっしやいませんで

しょうか」

この人、先生だったんだ。しかも、国文学科の。

「はい、大丈夫なようですので、授業を始めます。これからこの授業を半年間担当いたします、老月です。よろしく願います。では、授業プリントを配りますので、一部ずつ取って後ろに回してください」

おいづき。聞いたことない名字だ。そして初めて会った時以来聞いた、老月先生、の声は、改めて聞くと優しく落ち着いた声だった。話し方も丁寧。あのときの「すみません」と同じ。

「えー、僕の専門の中古文学は、八世紀から十二世紀という広い時代をカバーしているのですが、小倉百人一首の詠まれた時代と覚えてください。ちなみに小倉百人一首で僕が一番好きなのは、『玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする』という歌です。ご存知でしょうか」

先生は黒縁の眼鏡の位置を直しながら、話を続けた。

「玉の緒とは命のことで、その私の命よ、絶えてしまうのなら絶えてしまえと言いきっています。このまま生き長らえていると、この恋を堪え忍ぶ心が弱ってしまうと困るから、という意味です。作者の式子内親王は、小倉百人一首の撰者である藤原定家と恋愛関係にあったとも言われていますが……」

先生はここで少し間をとった。資料に目を落としながら、ため息交じりに呟く。

「……いいですね。定家もこんな歌を贈ってもらえて。羨ましい限りです。……でも定家って、奥

さん二人もいて子どもも七人くらいいるんですよ。その裏で式子内親王と歌を交わすなんて、この時代の人間はどういう神経してるんでしょね」

急に不機嫌そうな顔になった。なんか語気が荒い。

「皆目分かりませぬね。生憎結婚したことがありませんので」

教室内にはフツツという笑いが起こっている。ていうか先生、独身なんだ。

「あの先生、私生活でなんかあったんかな」

隣の席に座っていた梨子ちゃんが、好奇心たつぷりの表情で話しかけてくる。

「確かに、そんな感じの言い方だったよね」

あんなとこ、見ちゃったしな。絶対なんかあったよね。

「……話が逸れましたね。えー、この歌は新古今和歌集の歌です。僕が今持っているのがその注釈書です。研究室から持ってきました」

分厚いハードカバーの本を机から持ち上げて、掲げて見せた。そんな手つきまでも、なんだか微笑ましく思えた。午後になって少し暑くなったのか、セーターとシャツの袖を肘まできちんとまくり上げていて、ほっそりした白い腕が見えている。それでも手首の関節の骨はしっかりと出っ張っていて、ああやっぱり男の人なんだと感じさせられる。

「新古今和歌集の注釈書は、大学図書館にも置いてありますので、是非探してみてください。ちなみに、注釈書というのは――」

すらすらと話しながら、授業を進めていく。本当に、大学の先生なんだなあ。最初に見たときは、

そんな感じが全然しなかったのに。ときおり微笑みながら、プリントに挙げた文献の箇所を紹介していく。このところがね、面白いんですよ、なんて。

でも先生、ついさっきまで泣いてませんでしたっけ。私、知ってるんですよ。

「ところで皆さんは、日本の古典文学の作品を、いくつ知っていますか。プリントの空いたスペースでいいので、思いつくだけ書き出してみてください。平安時代のものに限らなくていいですよ」

えっ、ちょっと待って。まず源氏物語と、枕草子でしょ。あと……中学高校時代に習った、竹取物語と、伊勢物語。それ以外、何かあったっけ。あつ、更科日記があった。それから日記といえば、紫式部日記っていうのもあったな。他は……ちょっと思い浮かばない。

ふと顔を上げると、ほかのみんなも静かに考えながら自分のプリントに書き出している最中だった。変なタイミングで顔を上げてしまったのがまずかったのか、老月先生がこっちに気づいた。

明らかに目が泳いでいる。あごに手を当てた。もう一度目が合う。先生はすぐに目をそらした。やっぱり顔を覚えられてたんだ。どうしよう。すごく気まずい。

「じゃあ、そろそろ、いいですか。十人ぐらい当てていきますよ」

あ、切り替えた。さすが先生。

「では……高山くん」

「はい。えっと……じゃあ、宇津保物語」

「お、そこからいきますか。なかなか渋いですね」

先生の顔がほころぶ。宇津保物語なんて思いつかなかった。あの人、詳しいな。さすが大学はレベ

ルの高い人が集まっている。

先生はそれから、学生に文学作品の名前を答えさせていた。私のことは見なかったみたい。入学早々、先生の裏の一面を見てしまった。あの苦しそうな様子が頭から離れない。たぶん先生は早く忘れてほしいんだろうけど、私はもう絶対忘れられない。

このことは誰にも言わないって決めた。もし先生が泣いてたことを知ったら、面白おかしく周りに言いふらしてバカにする人もいるかもしれない。でも私は、老月先生には笑いものになってほしくないし、それにあのとき見た光景は私だけのものにしたくなかった。

二

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ。穏やかな春の日だというのに、どうして桜は慌ただしく散ってしまうのだろうか。とはいえ慌ただしいのは桜ばかりではない。我が身もまた然り。

三月四月の年度替わりは何かと忙しく、ゆっくりと花見をしたり腰を据えて歌を詠んだりすることもままならない。

思い浮かぶのは有名な古歌ばかりだ。小倉百人一首で有名なこの紀友則の歌は、穏やかな春の情景

を詠んだもので、散りゆく哀愁を感じさせるものの深刻さがないところがいい。深刻な和歌を思い出そうものなら、たちまち感傷的になってしまう。仮にも教育者がそんな状態ではいけない。今週は年度初めのガイダンスに出席していて時間を取られた。今はひとまず溜まった業務を遂行しなければならぬ。今期の授業はシラバス通りに進めることができるだろうか。今年のゼミ生の顔合わせの日程はいつにしようか。考えることは尽きない。

今はただ思ひ絶えなむとばかりを……いかにかん。思ふともかれなむ人をいかがせむ……ああ、駄目だ。もはや職業病だ。和歌と己の精神との癒着が甚だしい。精神に業務を妨害される。

そうだ。こういうときはチャペルだ。チャペルはいい。本学はキリスト教系大学で、学内に礼拝堂を設けている。僕は別にキリスト教の信者というわけではないが、よくここに来る。資料の束が挟まったファイルの小脇に抱えつつ、煉瓦造りの礼拝堂に、一人で入った。僕を除いて誰もいない。

やはり学生などはいくつかの場にはなかなか来ないか。彼らは礼拝の場に足を運ぶ理由を特に持たないのだ。もともとキリスト教徒ではないだろうし、たいいていの日本人学生の実家は何らかの宗派に属する仏教徒であろう。かくいう僕もその例に漏れない。幼少期より、ことあるごとに様々な神社仏閣を参ってきたが、チャペルという場所に足を踏み入れたのは、この大学に奉職してからである。

けれど僕はチャペルという施設を、神社仏閣と同様に、自らの心を落ち着ける場として活用している。僕にとって宗教施設とはいわば精神の逃げ場なのだ。神や仏にならばどんな悩み事も隠すことなく打ち明けられる。

僕は椅子に座って両手の指を組んでいた。前列の椅子の背もたれに備え付けられた聖書をぼんやりと見つめる。色鮮やかなステンドグラスを通して入ってくる、柔らかな陽光を浴びていた。職場にいながらにして日常を忘れさせるようなひとときが訪れた。

ふいに、涙が流れる。何だろう、この気持ちは。

また新入生が入ってきた。僕から見れば、みな一様に楽しそうな表情を浮かべている。長い努力の結果、大学に合格し、新生活を始めたばかりなのだから当然だ。夢に向かって努力し、瞳を輝かせているような、充実した大学生活を送る学生らを見るにつけ、暗い気分が襲われる。気だるげに授業に出てくる学生を見るほうが、むしろ安心感すら覚える。

今の僕に、夢や希望はない。希望を胸に前進する、そういう向上心を失ってしまったようだ。こんな僕が教員でいいのだろうか。こんな人間でいいのだろうか。情けない。大の大人が、簡単に泣くなんて。

僕が全て悪い。学問を修める場でいらぬ考え事をする僕が悪い。悪かった。ご迷惑をおかけして申し訳なかった。本当は直接謝りたいくらいだが、今となっては面と向かって話せる気がしない。

どうしてこんなに簡単に涙が出てくるのか僕だって分からない。こんなことで、と思うかもしれない。男が簡単に泣くもんじゃない、と思うかもしれない。でも僕は「男らしく」なんて言葉は大嫌いだ。男らしく、なんて言った時点で、そいつは僕を男失格だと決めつけて批判しているんだ。大きなお世話だ。泣いたっていいじゃないか。僕だって人に迷惑を掛けまいとして、場所を選んでいるんだ。泣かずに済むならどれほど気が楽だろうか。

こういうときは山上憶良の万葉歌が心に刺さる。世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば。こんなにつらいなら、いっそ鳥にでもなってしまうたい。けれど飛んでいくことはできないのだ。

焦がれたものに裏切られては、また絶望の淵に叩きのめされる。そんなことの繰り返しで、日々は過ぎてゆくのだから。

僕に翼はないのだ。

三

教室の外は雨だ。机の下でちょっと足を動かすと、防水のブーツが床とこすれてキュッと音を立てた。ここ数日雨が続いていて、洗濯物が乾きにくいので困る。また部屋干しか。

「はい、じゃあ、白崎さん」

老月先生の顔がこちらを向く。隣の席に座っている梨子ちゃんも、ちらっとこっちを見る。

え、待って。やばいやばいやばい。聞いてなかった。でも聞いてないとは言えない。

「……すいません、分かりません」

先生は手元の受講者名簿に目を落とす。

「あ、そうですか。では杉浦さん」

先生、何聞いてたの。なんで急に当ててきたの、先生。

「本歌取り」

「そうです、本歌取りです」

あー。本歌取りは分かったのに。先生違うんです、ちょっとポーツとしてただけなんです。ごめんなさい。あーもう。悔しい。

「三つ目の項目の、右の歌が本歌で、左が本歌取りした方です。こうした手法は、平安末期、まあ今でいうところの盗作だとして批判されたこともあったんですが、御子左家の藤原俊成が評価したことで受け入れられていったようです。御子左家、というのはそのプリント左下をご覧ください。藤原北家の流れを汲んでいて、藤原道長の――」

先生は右手でプリントを押さえながら、左手で髪をちょっと触る。湿気で髪の毛の調子が悪いんだろうか。いつもよりもっさりした感じになっている。でもそういう先生もなんかいい。可愛い。

授業が終わって、先生は教室を出ていった。隣では梨子ちゃんが立ち上がって、ペンケースやファイルをカバンにしまっている。

「ねえ、先輩に聞いたんやけどさ、先輩らって、けっこう先生方の研究室行って、おしゃべりとかしてるみたいやで」

「え、そうなんだ」

「うん。志保ちゃん、もしこのあと予定無かったらさ、リーチ先生の研究室、行ってみたいひん？」

誰それ。聞いたことない。

「リーチ先生って？」

「ほら、今の。老月先生」

「え、老月先生、そんな呼ばれ方してんの」

「バド部の国文の先輩らがみんなそう呼んではるから」

ああ、梨子ちゃん、バドミントン部だったもんね。

「そうなんだ。面白いあだ名」

「なあ、行ってみよ、研究室」

「うん。いいよ」

「おーし！」

梨子ちゃんは勢いよく教室の扉を開けた。行けるんだ。そんな気軽に行くものなの、研究室って。でも興味ある。老月先生の研究室。どんな感じなんだろう。

コンコンコンッ。梨子ちゃんが扉をノックすると向こうから、はい、と声が返ってきた。

「失礼しまーす！」

梨子ちゃんと二人で老月先生の研究室に足を踏み入れる。天井まで届きそうな書棚が壁に沿って並

んでいて、本の多さに圧倒される。いいなあ、こんなにたくさん本の本に囲まれた生活。懂れる。

「おや、こんにちは」

研究室の奥のパーテーションの向こうから、先生がひよこつと顔を出した。

「今来ても、大丈夫でしたか」

私が尋ねると、ええ、と言いながら、入り口近くの事務机とパイプ椅子を手で示した。

「どうぞ、おかけください」

梨子ちゃんと私が入り口の扉を背にして座ると、先生もその向かい側の椅子に腰かけた。

「何か、質問でしょうか」

「あ、いや、質問ってわけじゃないんですけど……先生の研究室ってどんな感じなんかなーと思って先生は柔らかに微笑んだ。目尻に少ししわができる。

「構いませんよ。今日は特に忙しくはありませんしね。それに、積極的にコミュニケーションを取りに行こうという姿勢は、素晴らしいと思いますよ。……僕は苦手ですから」

確かに先生はあんまり積極的じゃなさそう。小さく笑いながら左隣を見ると、梨子ちゃんは思い出したように口を開いた。

「そーいや先生、老月先生って、なんでリーチ先生って呼ばれてはるんですかー？」

「と、唐突ですね」

先生が苦笑いしている。すごいな。梨子ちゃん、直接聞くんだ。けど、ナイス。それ実は私も気になってた。

「先輩の一人に聞いてみたら、なんでやったっけ、忘れた、みたいになってうやむやにされたんで」

「うーん。僕の口から言うのも変な話なんですけどね。僕の名前、利一としかずっていうんですが、何年か前の国文科の学生が、横光利一と同じだ、と言い出したのが発端らしいんですよ」

りいち。うん。呼びやすい。呼びやすい名前のほうが楽だしね。

「気が付いたらいつの間にか定着したようで、『リーチ先生』という単語を学内でしばしば耳にするようになって。しかもそういうときはたいして僕の言動を揶揄しています」

「揶揄って……。先生ってそんなにかかわれてるの？ いや、からかわれてそうだけど。それにしただってちょっと先生の被害妄想も交じってるような」

「でも、それやったら先生って、結構人気あるんですね」

「いやー、なめられているといった方が近いのでは」

「嫌われるよりよっぽどええやないですかー」

それは、私もそう思う。先生の場合は、好かれてるから話題にされやすいんだ。

「そういうふうにかきたいものですね。まあ、たとえ直接あだ名で呼ばれても僕はわざわざ注意しませんしね。……ああ、そういうところか。揶揄される原因は」

黒縁の眼鏡を両手でちよつと持ち上げて、かけ直す。先生がちらつとこちらに視線を投げかける。

「僕の話なんかは、まあどうでもいいんです。それより、秋本さんも白崎さんも、大学生活にはもう慣れましたか」

「んー、まあまあです。授業の時間が長くなったのがちよつと大変やな、と思ったくらいですね」

「九十分ありますからね。僕も授業をしていると、疲れたな、と思うこともありますよ。立ちっぱなしで話してますから。……僕ももう若くはないということですね」

え、まだ若く見えるけどな。先生、いくつなの。あ、先生、そんな遠くを見るような顔しないで。

「あ、いえ、そんなことより白崎さんはどうですか」

「そうですね、私は……。空き時間が多いので、授業と授業の間、何しようかなっていつも迷っちゃいますね」

「時間の使い方が難しいですよ。友人と話すのもよし、課題を進めるのもよし、図書館で読書に勤しむのもよしです。今日のお二人みたいに、先生方の研究室を訪ねてみるのもいいと思いますよ。何か新しい発見があるかもしれません」

そっか。先生の研究室に来るっていうのは、いいな。授業を聞いているだけでは分からなかったことが分かる場所、なのかもしれない。

帰り道、コンクリートのへこみに溜まった雨水をばしゃつ、と踏みつける。黄色いドット柄のビニール傘に、ばらばらと雨粒が当たる音。

リーチ先生、か。やつぱり呼びやすいな。私もこれからそう呼んでみようかな。先生には聞こえないところで。

また行こう。今度は一人で。

四

ある冬の日のことだった。僕は芳学館の一階の飲食スペースの椅子に腰かけていた。芳学館とは、学生の飲食や勉強などに自由に使える施設である。試験前になると仲間同士で試験対策に励む学生も多く見られるのだが、その日はひとけもまばらだった。

僕は教員であるので、休憩は研究室でとればよく、学生が多い場合には遠慮してここは使わないことにしている。ただ、単に時間的なものではなく、空間的な息抜きも必要だ。研究職は職業柄室内に籠りがちになる。

研究が思うように捗らない。研究室に居たくなくなるほど、そのときの僕は行き詰まっていた。乱雑に棚刺しになっている研究資料の数々を今だけでも見たくないがために、一時避難してきたのだ。僕は何をしてもなく芳学館の隅の椅子でうなだれていた。

「お疲れ様です、老月先生。休憩中ですか」

感じのいい女性の声が聞こえた。そのときの僕には、まるで女神が降臨したかのように見えた。高級そうな白いコートに身を包み、つやつやとした黒のハイヒールが自信に満ちていた。

彼女は今年度からこの大学でフランス文学の教員を務めている、椎野千代子先生だ。色白で鼻筋の通った顔に、うるんだような黒い瞳と真紅の口紅が映える、華のある女性だ。その外見と専門分野から、着任してすぐ、「マダム千代子」と呼ばれ出したとゼミ生らが話しているのを聞いたことがある。椎野先生の研究室の前を通ると、学生らの明るい笑い声がしばしば聞こえてくる。会議の後などはよ

く話しかけられているところを目にするので、先生方からも人気があるようだ。彼女はいつも人に囲まれていた。僕のような者が「彼女」などという呼称を用いることすらおこがましく感じる。僕は椎野先生を遠巻きに眺めるばかりで、自分から話しかけたことはなかった。

その椎野先生のほうから話しかけられたのだ。僕はひどく狼狽した。

「ええ……まあ、そんなところですよ」

「よろしかったら、肉まん、召し上がりませんか」

「え、肉まん……ですか」

僕は少々面食らった。

「ええ。今、買ってきたところなんです。ちょうど良かった、と思って」

「では……あっ、どうぞ、座ってください」

僕が手で促すと、椎野先生は僕の向かいに腰かけた。襟元に白いファアのついたコートを、椅子の背もたれに掛ける。プラスチック板と金属のパイプでできている安っぽい椅子が、それだけはサロンの何かに置いてあるような高級感を放ち始めた。

住む世界が違う、という感じを受ける。年齢は僕より若いのが、優秀な先生だからきつとその道では今後のご活躍が期待されていることだろう。有名な女子大学を卒業して、フランスへも何年か留学しておられたという。その経歴や身なり、振る舞いから察するに、富山の田舎のサラリーマン家庭で育った僕とは育ちが違うのだろうと何となく感じていた。

そんな椎野先生が、学内のコンビニで購入したと思しき肉まんを僕に差し出している。とても意外

なことに思えた。

「肉まん、と、ピザまん、どちらがよろしいですか」

小さなレジ袋から、肉まん、とピザまんを一つずつ取り出す。

「え、いえ、僕は」

「そうおっしゃらず」

「あ……では、肉まんの方をいただきます」

「どうぞ」

こういうとき、僕はどういう態度を取ればいいのか分からない。遠慮すればいいのか、初めから素直に選べばいいのか。まどろっこしい押し問答は好きではないが遠慮のない人間だと思われるのも避けたい。コーヒーと紅茶のどちらがいいかと出先でよく聞かれるが、僕はあの手の質問をされるのが苦手だ。言われてしまったが最後、楽な気分での滞在はできなくなる。

「すみません」

熱い肉まんを両手で受け取る。熱が指先へと伝わってきた。こまめに持ち替え、熱さを逃がしながら椎野先生を見やる。

テーブルに肘をつき、両手でピザまんを支えるようにして持ちながら、美味しそうにほおばった。

紅い唇が動く。幸せそうに、笑顔を浮かべた。

「私コンビニの肉まん大好きなんです」

「あ、では僕はピザまんを選んだ方がよかったですね」

「いえ、そういう意味じゃないんです、ごめんなさい！ ピザまんも肉まんも、どっちも大好きですよ」

片手で口元を隠しながら笑う。ホッとした。選択を間違えたわけではなかったようだ。しかし椎野先生のような方と他愛無い話をし、肉まんまで頂いてしまっていることに少々戸惑っていた。何だか申し訳ない。人の目も気になる。しかしそんなことは言えない。

「コンビニの肉まんって、寒くなってくると無性に食べたくなりませんか？」

「ああ、分かります」

変な言い方だが、椎野先生がコンビニで肉まんを買うような人だとは思っていなかった。

「老月先生も、肉まん、好きですか」

「ええ、好きです」

それは本当に意外だった。椎野先生は肉まんが好きなのだ。こんなことを知っても何にもならないが、世間一般の人々もほとんど当てはまることだとは思うが、それでも共通点を発見した。それだけで、人は他人を見る目を変えていく。人間関係とはそういうことの連続でできているのかもしれないと思った。

それからしばらく話は続いた。

「老月先生は、今日はもうお仕事はよろしいんですか」

「あ……では、そろそろ僕は研究室に戻ります」

「そうですね。また一緒に肉まんでも食べましょう」

椎野先生の茶色い巻き髪が、立ち上がったときに揺れた。花のような芳しい香りがする。

「ええ、是非。それでは」

まるで以前から親しかったかのような雰囲気、別れの挨拶をした。そういう雰囲気を作ってくれていたのだ。白いコートを羽織って歩いてゆく後ろ姿は、もういつものマダム千代子に戻っていた。それでも何か、いつもと違う気持ちでその姿を眺めた。椎野先生は陰気な僕にも気軽に話しかけてくれる方なのだとということを知った。

この日を境に、椎野先生に対する印象は、明らかに変わっていった。

椎野先生に惹かれていくのに時間はかからなかった。学内で椎野先生を見かけると、僕も他の先生方や学生らのように自ら話しかけに行った。楽しかったフランスの思い出、生まれたばかりの甥のちょっとした事件、お気に入りのワイン。いろいろな話を聞かせていただいた。他の人が椎野先生に話しかけに来たときは、ご迷惑にならないようすぐに退散していたが、決まって「あら、もう行かれるんですか」と言ってくれた。

春は花壇のパンジーを写真に収め、夏はノースリーブのワンピースで学内を闊歩し、秋は紅葉した落葉樹のそばのベンチで読書を楽しみ、冬は肉まんを頬張る。そんな椎野先生の姿を見るたび、僕の心は喜びで満たされた。マダム然とした気高さと少女のような朗らかな親しみやすさが並び立って

いるのだ。

あれやこれやと尽きることなく湧いてくる悩みのほとんど全てが恋愛がらみになり、そのほかは頭の隅へと打ちやられた。いつだって、悩み事が全く無くなるようなことはない。しかし恋に煩う間は悩みの種がたった一つに集約できる。従って相対的に幸せになった。

椎野先生の方から話しかけてくださることもあった。なかなかうまくいかないことが多くて、などといった愚痴を言って甘えてしまう僕に、椎野先生はフランスの諺を優しく囁いてくれた。

「Impossible n'est pas français. フランス語に『不可能』はありません」

「Après la pluie, le beau temps. 雨の後には、きっと良い日が訪れますよ」

疲れている僕のために教えてくれた、美しい言葉。あのときの声を幾度も反芻しては熱いため息をつく。

チャペルにも何度も足を運んだ。煌びやかなステンドグラス。ぼんやりと光を湛えたシャンデリア。僕はここで、祈りをささげる。努めて静かに。密やかに。たとえそれが煩惱に極めて近いものとしても、神はお許しくださいさるはずだ。僕の心が、清いものならば。僕が彼女に向ける感情の百分の一でいい、僕にも少しばかりその心に向けてほしい。神よ、どうか僕にご加護を奉りたまえ。そうして、信者でもないのに神頼みに明け暮れる日々が続いた。

一年が経つころには、自作の短歌を五首も六首も書き綴ったメモ書きが、机の引き出しからたびたび見つかるようになっていた。自分でもその無意識的行動に驚いているくらいだったが、どうにもできない。それらの恋歌をまた眺めては、ここは語順を変えた方が全体の流れがすっきりするのではな

いか、この助詞はやめた方がいいかもしれない、などと推敲を重ねた。筆ペンを取り出して字の練習もやった。学生時代に何年か書道教室に通っていたことを思い出す。ここは行書だと書き順が違う、この字は点画が省略されてこうなる、といった筆運びを何度も繰り返し返す。

そうやって手を動かしているとフラストレーションが解消できる気がした。なぜかそうしなければ気が済まないような夜がたびたびあり、遅くまで研究室に残っていてなかなか帰らないことが増えていた。

これでは仕事にならない。限りもなく悶々として苦しみを味わい続けるべきかは。

三寒四温の時候であった。春休み中の学内は学生が減り、また教員も授業がないため、ゆつくりと話せるはずだ。年度替わりで忙しくなる前が良かろう。そう思って連絡すると、椎野先生はいつものように快く研究室に呼んでくださった。

「……えっと。今日は、どうされたんですか」

入り口で突っ立ったまま黙りこくっている僕を見て、椎野先生は困ったように首を傾げた。

椎野先生の研究室は、飾り気のない僕の研究室とは大違いなのだ。書棚の一段一段には統一感のある暖色系の布が敷かれてあり、その上にハードカバーの洋書がずらりと並ぶ。ティーセットが収められた戸棚の上には洋風の人形や小物などが飾られている。

何度訪れても、自分だけがその空間に溶け込めず、落ち着かない。椎野先生がいつも焚いているアロマの芳香は、リラックス効果をもたらすがかえって僕を緊張させた。言うはずだった台詞は頭のどこにも残っていない。短冊状に切った和紙を取り出し、これを、と言って差し出すことしかできなかった。

筆文字で書かれたそれを、椎野先生は不思議そうにしばらく見つめた。

「ごめんなさい、私、専門ではないのでよく分からないのですが……。これはもしかして、恋の歌ですか？」

「はい」

少し微笑み、口ごもつてから、椎野先生はこう言った。

「噂が広まるのって、すごく早いなあと思って思うんです。ひと月もしたら、他の学部の先生方までご存じでいらしたくらい」

突然、何の話だ。何が言いたいのかわからない。

「老月先生は、噂話などはあまりされない方だから、ご存じなかったかもしれないんですが、実は私、少し前から時任先生とお付き合いしているんです」

「え……学部長と」

「ええ。ですから、こういうのはちょっと」

曖昧に笑うその表情には、明らかに迷惑そうな感じが漂っていた。諦めろと言わんばかりの強力な微笑みに気圧される。

「ほんの、半年ほど前からなんですけれどね。とても熱心なご様子だったので、私も何だか惹かれてしまつて。時任先生、素敵なお店をたくさんご存知だし、ああ見えて、とっても男らしいところ、あるんですよ」

そんな話は聞きたくなかった。耐えきれなくなつて、僕は椎野先生の研究室を出た。なんと行ってそこを退散したのかは、覚えていない。

その日は自宅に逃げ帰り、それから一步も外に出なかった。食事も摂らずに布団にくるまって過ごし、泣き疲れていつの間にか眠り、重たい闇に閉ざされた夜が白々と明ける頃、ぐったりと横たわつたまま目を覚ました。

浅はかだった。僕が彼女に好かれるはずなどなかった。至極当然である。彼女のような美しい人に惚れる男など世の中のどこにでもいよう。彼女にとっては僕など、どこにでもいる人間のひとりに過ぎない。所詮、僕ごときが、彼女に選ばれるはずがなかったのだ。

憂鬱な気分で新年度を迎えた。僕にとって椎野先生は今もつとも会いたくない人物となつていた。もう椎野先生の美しいお顔を直接拝見することはできない。気まずさと申し訳なさかどうしても拭えない。そんなに簡単に割り切れるものではない。こんなことなら気持ちを告げるべきではなかった。恥と悔しさと自分への怒りがなймаぜになつて、後悔が訪れる。そして、僕を蝕んでいく。

研究室へ帰る途中で、廊下の向こうから、今二番目に会いたくない人物がやって来るのが見えた。学部長である。

「お疲れ様です」

「ああ、老月先生、お疲れ様です。……先生があんなことする人だとは思わなかったな。老月先生も隅に置けませんね」

擦れ違いざまに、わざと大きめの声で学部長が言った。会釈してすぐ立ち去ろうと思っていたのに。面倒なことになった。

「椎野先生から聞きましたよ。口説いたらしいじゃないですか」

この人の人を見下すようなへらへらとした笑い方は、いつも僕の神経を逆撫でする。

「……申し訳ありません。時任先生とそういう関係でいらしたとは存じ上げませんでした」

「なーんか、千代子困ってましたよ。そんなつもりじゃなかったのに、って」

「……すみませんでしたとお伝えください」

「分かりましたから、もう頭を上げてくださいよ。その腰の低さ、逆に尊敬しますけどね」

くるりと向きを変えて、学部長は立ち去っていく。縦縞のスーツの背中が起こした風は、花のような香りがした。椎野先生がいつも研究室で焚いているアロマの香り。ということはついさっきまで椎野先生の研究室に……。

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。古今和歌集の和歌を思い出して、得も言われぬ苦しさを覚えた。昔の人、など呼べる関係に至るにはまったく及ばなかったというのに。他の人に

は何でもない、むしろ心地良さすら感じるであろうこの香りに、おそらく僕一人だけが、こんなにも苦しんでいるのだろう。

整髪料で整えられた白髪交じりの頭が見えなくなっても、僕はその場に立ち尽くしていた。

椎野先生も椎野先生だ。僕のことを口の軽いあの人に喋るなんて。どこにどう噂が流れているか分かったものじゃない。とんだ恥さらしだ。これまで以上に僕は生きにくくなった。

だいいち、何故よりによって学部長なのだ。どこが良くて付き合ってるんだ。僕にはいつも嫌味な言い方をするくせに。若い女性ばかり鼻屑する差別主義者め。それにあの人はもう五十代だぞ。椎野先生とは二回り近く近く離れているじゃないか。

昼間はやけ酒をするわけにもいかない。それで今日も僕は、チャペルへと向かう。

五

授業開始十分前に、私と梨子ちゃんは教室に着いた。私が机に荷物を置くと、梨子ちゃんが笑いがら言った。

「なんか志保ちゃんて、ホンマにリーチ先生好きやんな」

「えっ」

ちょっと、大きい声で言わないで。そういうの困る。ていうか私って、そんなに分かりやすいの？ 顔に出てるの？

「いやだってリーチ先生の授業だけいつも前の方に座るやん」

「いや、まあ……ちゃんと聞きたいし」

「リーチ先生、面白いもんな。説明も分かりやすいし」

良かった。からかわれるかと思った。恋愛のことだからかわれるの、苦手なんだよね。

「けどそんだけ熱心なんやったら、三年から始まるゼミ、リーチ先生のとこ入るん？」

「え、まだあんまり考えてなかったな。でもそれ、いいかも」

「うん。リーチ先生ええよな。あたしもリーチ先生にしよっかなー」

ゼミか。ゼミに入れば、もっと先生と話せる。いいなあ。

リーチ先生が静かに教室に入ってきて、授業が始まる。いつもと同じ、もじやつとした髪に、黒縁の眼鏡。水色のチェックシャツが涼し気だ。冷房のよく効いた教室で、今日もリーチ先生の授業を受ける。

「皆さんは、『伊勢物語』がどうして『伊勢物語』と呼ばれるようになったのか、考えたことはありますか。『伊勢物語』は皆さんもご存じのように、在原業平の歌や逸話をもとに作られた歌物語ですよ。だとしたら、在原物語、とかでも良かったと思いませんか」

先生は教壇から学生たちに目を配りながら問いかけた。

「例えば『源氏物語』や『平中物語』がそうです。主人公の名前がタイトルになっています。業平

は、在五とか、在五中将、在中将といった呼び名があるので、実際、『源氏物語』の総角には『伊勢物語』のことを在五が物語、と呼んでいる箇所があります。なのになぜ、『伊勢物語』という名前决定着し、現在にまで伝わっているのか。様々な議論が展開されてはいますが、まず間違いなく取り上げなければならぬのが、狩の使の段です。一ページの真ん中あたり、六十九、と書いてあるところをご覧ください。むかし、男ありけり。その男、伊勢の国に狩の使に行きけるに、かの伊勢の齋宮なりける人の――」

リーチ先生はすらすらと本文を読み上げていく。先生ってやつばすごいな。読み慣れてるって感じ。自然な抑揚がすごく聞きやすく、本文を目で追うのをつい忘れてしまえそう。

「齋宮に選ばれた女性は、男性と関係を持つことはご法度。そんな身の上の女性と恋に落ちたこの男は、一度は部屋へ連れて入るもの、まだ打ち解けて深い話もできないうちに女が帰ってしまうんですね。翌朝、女から、君や来しわれや行きけむおもほえず夢かうつつか寝てかさめてか、あなたが来たのか私が行ったのか分からない、夢なのかそれとも目覚めていたのか、と歌を送ってきます。男も感じ入って、かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは今宵さだめよ、悲しみて真っ暗になった私の心も、乱れてしまつて分別もつきません、夢かうつつかは今晚来て決めてください、と返歌を送ります」

先生の口から恋の歌を聞くのは、なんかドキドキする。先生も、恋愛感情を持つことはあるんですか。

「この話は、結局会うことは叶わないままになってしまふんですが、歌物語はこういう話、多いです」

先生は伏し目がちになって、独り言のように話を続ける。先生の声は小さかったけれど、教室内在

静かだったから教室の前の方に座っている私にはよく聞こえた。

「思い通りにいかない、切ない関係はあるんですが、多くを語ることなく、歌でお互いの気持ちを確かめ合うような感じが……いいですよ」

先生の「いいですよ」っていう感嘆の言葉、好きです。思わずうなずいてしまいます。

「今だったらメールでもなんでも使って連絡が取れますが、昔は手紙を書くしかありませんから、そんなスピード感はありません。その手紙だって人に渡して届けてもらうとなると、本当に相手に届いているのか確認も難しく、不確かで、じれったいものだったでしょう。しかし、だからこそ心が通じ合った時の喜びはひとしおだったのではないのでしょうか。こういう歌のやり取りの詳細を想像するの、平安文学を読むときの醍醐味だと僕は思いますね」

口調は優しい。けれど熱く語っている。やっぱり先生は、自分の専門分野の話をするときが一番輝いて見える。授業の内容からは外れてしまっても、面白い。先生は本当に和歌が好きなんだなと思う。「さて、この段は『伊勢物語』の中でも重要視される段で、この段が本来の『伊勢物語』の冒頭だったのではないか、という説も——」

正直言って私は高校時代、古文はあんまり得意じゃなかったし、先生の話すこともあんまりよく分かってない。最近は先生のことばかり考えている。授業の内容よりもリーチ先生のことを観察するの躍起になっている。他の先生の授業でも、リーチ先生ならこういう文章はこう読むだろうな、リーチ先生は今研究室にいるのかな、とかそういうことをつい考えてしまう。ダメだな、真面目にやらないと。

別に成績は単位が取ればいいんだけど、リーチ先生に出来の悪い学生と思われたくない。

……もつと言えば褒められたい。やっぱりちゃんと勉強しなきゃ。

私はリーチ先生の研究室をしばしば訪れるようになった。授業の内容を個別に質問するという名目で訪れることが多かった。

「先生って、クリスチャンなんですか。ときどき、チャペルに行かれてるみたいですけど」

「いえ、別に特定の宗教を信仰しているわけではないんですよ。ああいう、静かで神聖な場所が好きだけです」

二人でそんな会話をしたこともある。

「この近くの、梨木神社という小さい神社があるんですが、あそこは結婚式なんかやっているとき以外は人も少ないので、過ごしやすいですよ」

「梨木神社。一回行ったことがあります」

「そうですか。今度行く機会があれば、その隣の盧山寺ろざんじにも足を延ばすことをお勧めします。紫式部が源氏物語を執筆していたときの邸宅の場所が、今の盧山寺の境内にあたるそうですから」

もちろん、すぐに行ってみた。盧山寺の源氏庭は、紫色の桔梗があちこちに植えられていてとても美しかった。確かに、リーチ先生の好きそうな場所だ。

神も仏もまるごと敬っている感じが、リーチ先生らしいと思った。

チャペルに行く先生を見かけることがたびたびあって、そのときは、先生今何を考えているんですか、って思いながら遠くから見つめる。追いかけてたりはしないで、その場を通り過ぎるだけ。もう先生の邪魔はしたくないから。先生がひとりになりたいときは、ひとりにしてあげたい。またあのときの苦しそうな先生の姿を思い出してしまって、あちこちから聞こえてきているはずの蝉の声は遠くなくていい。

何度会いに行っても、直接聞くことはできない。先生はどうして泣くのか。まだ苦しんでいるのか。もう泣かないでほしい。でももし、また先生が涙を流すようなことがあれば、そのときは私が隣にいてあげたい。私に何ができるというわけではないのだけれども。こんな気持ちになるのは本当に変だと思うけど、私まで胸が苦しくなる。この気持ちを伝えたい。

もちろん誰にも言えない。変な噂が広まったりしたら、先生にも迷惑がかかる。たとえ私が良くて、先生には迷惑をかけたくない。大学の先生と学生っていう立場は、絶対にわきまえなくちゃいけない。

その上で、もう少しだけ距離を縮めることが出来たら。報われなくていい。ただ伝えたい。私のことを少しでも意識してもらおうための、他の学生と同じだと思われないうような、何かを。

六

大学時代の友人、守山が結婚した。大阪で高校教師をしている彼は、同じ学校に勤める年下の先生と出会い、二年の交際を経て結婚に至った。結婚式で見た守山は、新婦と顔を見合わせて幸せそうに笑っていた。昔に比べるとふっくらとした体型になっている。おめでとう、と声をかけると、いやあ、俺もついに結婚したよ、と尻尾を下げた。老月は准教授になったんだって？ すごいなあ。立派だなあ。昔から研究熱心だったもんなあ。朗らかな表情でそんなことを言ってくれた。

立派なのは肩書きだけだ。中身は何も変わっていない。学生時代、課題の提出期限に間に合わないと思えばかりこぼしていた君が、高校教員になる夢を叶え、教育現場の激務に耐え、素敵な奥さんをお願い、教え子や同僚の笑顔に囲まれて盛大な結婚式を開くまでになったんだ。君の方が余程立派だよ、守山。

出席者の多くは守山の学校関係者で、僕の知り合いはそれほど多くないので、土曜の早い時間帯の式だったが予め二次会は断っていた。人の多い賑やかな場所は性に合わない。

帰りはどこにも立ち寄ることなく駅の改札を通り、京都方面へ向かう阪急電車に乗り込んだ。横長のシートに座り、両脚の間に荷物を置く。久々に着た黒のスーツは少しばかり窮屈に感じた。もしかすると僕も太ったのかもしれない。

この年になると、知り合いの結婚報告を聞いても他人事として聞き流せるようになった。久々の再会で、ここぞとばかりに「いい相手はいないのか」と聞いてくる者もあるが、正直なところなるべく

回答を差し控えたいと思っている。「いやあ、僕は」などと、いつも曖昧に濁すばかりだ。

自宅と大学の往復をこのまま何十年も続けるのだろうか。ああ、いっそ出家できれば。この時代に出家という制度があれば、すぐにでも出家するのだが。やはり平安時代に生まれていればよかった。何もかもこの時代のせいだ。憲法までが勤労の義務を唱えている。職場で生きづらさを抱えた人間に、救いはないのだろうか。

現世に救いがなければ来世でということになるのか。平安時代の貴族たちの多くも、現世は辛くともせめて来世はと願ったからこそ、俗世間への未練を絶って出家したのだ。

しかしそもそも人間が死んだらどうなるのかなど、誰にも分かるまい。もし生まれ変わりとというものがあるとしても、生まれ変わった後の魂には今の僕の記憶を引き継げない。今の僕が前世の記憶を引き継いでいないのだから。死んで記憶が消去されるとその時点で僕ではなくなってしまう。それ以降、僕は完全に存在しなくなるのだ。

だとするとやはり現世での救いを願わねばならない。

そんなふうにして、烏丸に到着するまでの間、考えても仕方のないようなことばかり考え続けた。地下鉄に乗り換え、大学近くの駅で降りる。

荷物も多く、慣れない場にいたことによる気疲れもあったが、直接家には帰らず一度研究室に寄ることにした。メールチェックなど諸々の事務作業を片付けるためだ。

ベンチと植木の並ぶ学内を通り抜け、チャペルの前を過ぎて、文学部棟に辿り着いた。いつもなら何ということもない道も、重い荷物を持ちながらだと妙に長く感じる。今日はエレベーターを使っ

三階に上がった。研究室前の廊下に設置してあるポストを確認する。

おや。何だこれは。一筆箋が一枚、入っている。桃色の花の絵が左下にあしらわれた一筆箋。流麗な筆文字で書いてある。

―のぶれど色に出にけり我が恋は物や思ふと人の問ふまで

白崎志保

はて。これはどういうことであろう。

右側の空白部分には、「研究室にいらつしやらないようだったのでポストに入れました」と縦に一行、鉛筆書きで小さく書かれている。僕は昨日早めに帰宅してしまったので、そのあとに訪ねてきたのか。しまった。研究室に残っていればよかった。そうすれば真意を本人の口から聞けたのに。

一筆箋と荷物を手に、研究室に入る。テーブルの上にごさりと荷物だけ置いて、奥の作業机に向かった。肘掛けのついた事務椅子にもたれ、ゆっくりと息を吐く。

それにしても突然の手紙とは、いささか心躍るものがある。まるで重苦しい雲が漂う空に、ふっと光が差し込むような。そんな温かな心持ちになる。光栄なことではないか。和歌なんて贈られたのは、初めてだ。

しかも、字がいい。「し」や「り」といった文字はすつと細く、「恋」や「思」の部首「こころ」はダイナミックに動きながら繋がっている。今時、筆を使って文字を書く人は珍しいから、なおさら目を奪われる。手紙というより、作品だ。これは良いものを頂いた。

ふむ。とはいえ、だ。問題はこの文の意味するところである。平兼盛の和歌。確か拾遺和歌集の恋歌だったはずだ。恋煩いかと尋ねられるほどに、忍ぶ恋心が顔色に出ってしまった、という、時代を超えて共感性の高い歌である。

裏も表も確認したがこの一筆箋には宛名がない。とすると、僕宛てではない可能性もある。本当は別の先生に渡したかったが、間違えて僕のポストに入れてしまった。焦っていた場合そういうこともあるかもしれない。

だが、僕宛てだった場合、どうすべきか。

空調の音だけが聞こえている静かな研究室の中、天井を見つめたり、書棚に並んだ本を眺めたりした。肘掛けに両腕を置いたり、腕を組んだりした。貧乏ゆすりをしてみたり、脚を組んだり、組み替えたりしてみた。いつの間にか外は夕闇に包まれ始めていた。

白崎さんが授業内容の質問に来ることがこれまでに何度もあったこと。忍ぶ恋の歌を頂いたということ。僕が和歌の研究者であること。研究者であると同時に、白崎さんにとって僕は先生であるということ。

これらを踏まえ、ひとまず結論を出した。

白崎さんは、恋に悩んでいる。しかし、友人に話すと瞬く間に噂が広まってしまう恐れがある。

「ものやおもふ」と問うてくるような友人がいるならなおさらだ。そこで、普段から授業について質問しに行っている教員に目を付けた。そういう教員ならば相談もしやすく、簡単に秘密を口外することはないであろう。そしてその条件にあてはまる教員が、たまたま僕だったのだ。しかし唐突に恋愛相談をすることは恥じらいが勝ってしまって難しい。相手にそれとなく察してもらえれば楽だ。話をどう切り出そうか迷った挙句、文字に書き起こして読んでもらおうと考えた。こうすれば教員と学生の立場であっても、教員の側から恋愛事情を尋ねてもらいやすい。しかも僕は和歌の専門家だ。和歌を見るやその真意をうまくみ取ってくれるはずだと期待した。故に、兼盛の和歌を選んだのだ。

僕はそう考えて、「先生」として真摯な対応をとることを決意した。

七

正直すごく気まずくて、研究室のドアをノックするのを三回くらいためらった。

課題のレポートは、明日の夜六時まで先生に直接手渡しするか、研究室のポストへ入れるか、メールに添付して送るかの三つの提出方法がある。別にリーチ先生に会わなかったって提出はできるでも、ここで怖気づいたらダメだ。せめてあれを読んでくれたかだけでも確認しておきたい。

和歌を贈れば先生はきつと喜んでくれるはず。あんなに楽しそうに和歌のことを語る人だから。

そう思っで一筆箋と筆ペンを買いに走り、恋を詠んだ和歌をいろいろと調べた。そして、今の自分にぴったりの歌を選んで、清書した。先生、あれ読んでくれたかな。

「課題のレポート出しに来ました」

やっとの思いで研究室の中に入り、用件を伝えると、奥で机に向かっていた先生がゆっくりと立ち上がった。

「期限は明日までですが、もう終わりましたか」

「はい」

「素晴らしいですね。余裕を持った提出で」

やった。褒められた。

先生は私からレポートを受け取り、表紙に目を通した。「確かに受け取りました。どうも、お疲れさまでした」と軽く会釈し、レポートをパーテーションの奥へと持って行ってしまおう。

「あの」

はい、と言いながら先生は、何やらガサガサと紙束を整理している。

「えっと……その」

「言いくければ、ゆっくりで構いませんよ。……そこにどうぞ」

先生はパーテーションの向こうから顔を出し、にっこりと笑いながら、椅子を手で示した。私と先生はいつものように、研究室手前のテーブルに向かい合って座る。

「……ポストに入れておいたんですけど」

「ああ、兼盛の和歌、ですか」

私は勢いよくうなずいた。さすが先生、察しがいい。あれは僕宛てということ間違いないですが、と言うのも一度うなずく。そんなの、分かりきったことじゃないですか。

「それなら、良かった。いや、正直少し驚いたんですがね。……僕も教員として、学生の皆さんの相談にはできるだけ乗ってあげたいと思っていますし、個人的にも恋の悩みには共感できる部分が少なからずありますから、時間の許す限り付き合いますよ」

え、待って。今ちょっと混乱してて、先生の言うことがよく分かんない。どういうこと？

「秘密は決して口外いたしませんから、安心して話してください。ちなみにその……お相手はどのような方でしょうか。どういったご関係で」

ゴカンケイっていうか……うん、あの、前言撤回。先生は察しが良くなかった。根本的に勘違いをされていてらっしゃる。

「すいません、なんか……もういいです」

「えっ」

私はぱっと立ち上がって、逃げるように研究室の外に出た。失敗した。あんなことするんじゃないかった。

「ちょっと待ってください！」

少し薄暗い廊下に、リーチ先生の声がわん、と響いた。

「……思いのほか、大きな声を出してしまいました」

ドアを左手で開けたまま、研究室の前で深々と頭を下げた。

「何か、失礼な発言があったのなら、申し訳ありません。ですがその……僕からも、受け取ってもらいたいものがあって」

そう言うのと脇目も振らずに引き返し、二十秒もしないうちにまた慌ててドアを開けた。いつもゆつたりと動く先生が、そんなに素早い動きをするなんて。

「貰ったらお返しするのが礼儀だと思うので、一応用意しておいたんです。形ばかりですが。小倉百人一首には小倉百人一首だろうと思って」

先生は縦長の和紙を一枚、私に差し出した。細くて角ばった筆文字で、歌が書いてある。

由良の門を渡る舟人かぢをたえゆくへも知らぬ恋の道かな

和歌だ。先生の書いた、和歌だ。先生はこんな字を書くんだ。繊細で、神経質そうな字。黒板にチョークで書くときはまた違う、平安時代の書物のような一続きの文字。

「嬉しかったんですよ。まさか誰かから歌を頂けるとは思いませんでしたから。それに、和歌に興味を持っていただけたようで、教員としても喜ばしく思います」

先生、喜んでくれたんだ。

「それにしても、白崎さんは、手が美しいですね」

え、手？ 思わず自分の右の手のひらを見る。

「あ、いえ、そういう意味ではなくて、筆跡の方です。古語の『手』には色々な意味があるって、高校でやりませんでしたか」

「……ああ！ やったような気がします」

「すみません、紛らわしい言い方をして」

「こちらこそ、勉強不足で」

恥ずかしい。急に「手が美しい」なんて、びっくりしちゃった。

「いえ。まあですからその、僕としては、白崎さんの作品を、また拝見したくなかったです」

ちらちらと私の顔をうかがいながら話す先生は、可愛らしい。先生なのに。

「できれば……白崎さんのオリジナルのもので」

「オリジナル……？」

「ご自身で歌を詠まれてはいかがですか。勉強になりますよ。作品の登場人物に感情移入しやすくなったたり、自分で書いてみるとまた読み方が変わったりするものですよ。あ、無理に文語体にしようとしなくて結構ですから。難しかったら、いつでも聞いてください。僕も精一杯協力します」

口をつぐんだまま、うなづく。先生は口元にホッとしたりした笑みを浮かべた。素敵な人。誠実で、熱心で、面白くて。もっと、この人のことを知りたい。気持ちは伝わらなかったけど、むしろ伝わらなく

て良かったような気もする。ちゃんと気持ちを伝えるのは、もう少し後にとっておきたい。時間はまだ、たっぷりある。卒業するまでに、もっと先生といろんな言葉を交わしたい。

八

季節は過ぎ去ってゆく。夏の暑さが和らぎ、日が短くなり出すと、後期の授業も始まる。白崎さんと文学部棟の廊下ですれ違った。二か月ぶりに会った白崎さんは、少し髪が伸びたように見えた。お久しぶりです、と照れたようにはにかむ。夏休みには、『伊勢物語』や『古今和歌集』、『源氏物語』の若紫までを読んだという。勉強熱心だ。

授業があると言って、白崎さんは茶色のリュックサックから取り出した小さな封筒を僕に渡して去っていった。中には熊のキャラクターがデザインされた、黄色い縁取りのメモ用紙が入っている。女子中学生が授業中に回していそうな少女趣味的な雰囲気、少しノスタルジーを感じる。水色のペンで書かれた文字は、筆のときとはまた違う、どこかあたたかみのある丸い字だった。

ふるさとの海へも行かず部屋にいて
逢えないせいで伊勢物語

夏休みはご実家に帰られていたようだ。地元には美しい海岸があるけれど遊びに行く気分にはなれない、恋しい人に逢えないせいで。部屋で黙々と「伊勢物語」を読むばかりだ——といったところだろうか。

散文的に繋がっていて、特別上手いというわけではない。けれど、「伊勢物語」が効いていて、男の訪れをひたすら待つことしかできない姫君のような、切ない恋心を思わせる。それにこの「逢えないせい」と「伊勢」という音韻の重なりは、白崎さん自身、知ってか知らずか。

研究室に戻って少し考える。「伊勢物語」の雰囲気を投影した返歌にしたい。「齋の宮」なんて、いいな。だが部屋に閉じこもる姿はなんだか白崎さんに似合わない。行動的な姫君にはこのくらいの勢いで自由な世界へ羽ばたいて欲しい。言葉遊びが好きな僕は、少々強引なまでに「い」の音を重ねた。

磯隠り見えぬ異性の腹いせに齋の宮よいづちへも行け

例によって筆ペンで和紙に書きつける。今度研究室に来たとき渡してあげよう。今までに感じたことのない充足感を抱きつつ、それを作業機の引き出しに丁寧にしまい込んだ。

歌の贈答をするのが、予てからの密かな夢だった。あのときは、「精一杯協力する」なんて、教師面でつい上から言ってしまったが、本当は僕自身が、歌を贈る相手を求めていただけなのだ。贈答の相手はもちろん、自分が想いを寄せる女性であることが望ましい。けれどこの際そこには目を瞑ろう。これも何かの縁だ。白崎さんには手間を取らせて申し訳ないが、幸い僕の趣味に付き合ってくれそうなので、できればしばらく続けさせて欲しい。

年明け、富山の実家から京都市内の自宅に戻る。午前中に降ったらしい雪が、屋根や道路にまだうつつすらと積もっている。マンシヨンの一階のポストを見に行くと、セールのチラシ類とともに、輪ゴムで束にされた年賀状が例年のごとく入っていた。

一枚一枚確認すると、その中に白崎さんからのものがあった。年末に白崎さんが来たとき、年賀状を書きたいから住所を教えて欲しいと言われて教えたのだ。

左端の方に、「後期は先生の授業がなくて寂しかったです。二年生になったら履修しようと思います。」というコメントがある。龍のキャラクターの横に、歌が書いてあった。

初蜜柑 今年は今年の恋心ビタミンCとともに蓄う

なんとも可愛らしい。「初蜜柑」という語が俳句的な感じを与え、季節感がよく出ている。「ビタミンC」という澁刺とした健康的な語感が現代短歌らしい。一方、恋心を蓄えるという表現が慎ましい女性を想起させる。淑やかさと活発さの両立した歌といえるのではないか。

誰ゆるゑに蜜柑買ひたる正月や恋も体も平らかになむ

「新年早々素敵な歌をありがとうございます。今年も健康に気を付けて学業に励んでください。」と葉書きの隅に書き添えておく。買ってきた蜜柑を一つ食べ終えると、さっそく投函しに行った。それにしても白崎さんはいったい誰をそんなに想っているのだろう。

午前中は研究室の掃除をしていた。窓を開けると五月の清々しい風が入ってくる。その香りや肌触りに初夏を感じた。

白崎さんが『落窪物語』の資料を借りに来ると言っていたので、三冊の本を書棚から取り出して、予め机に置いておく。そのうちの一冊、『落窪物語注釈』の見開きに、歌を書いた紙を挟んだ。歌の右側に「白崎さんはいつも恋の歌ばかり詠んでおられますが、進展がないようですので、右近の少将に」と詞書めいたものを添える。白崎さんの想い人を「落窪物語」に登場する右近の少将道頼に例えるなら、道頼が屋敷から落窪の君を連れ出すべきだ。道頼は何をしているのだ。

願はくは涼しき五月の風に乗り姫もろともに渡らせたまへ

後日、白崎さんは資料を返しに来た。上目遣いでこちらをじろじろと見てくるので、『落窪物語注釈』を試しに開いてみる。

そこには「どういうことかよく分かりませんが、私には渡るべきところなんてどこにもありませんから。」と詞書風に書き添えられた歌があった。やはり少し伝わりにくかったか。

落窪の君の夫の道頼に君がとくこそなりたまふべけれ

なんとという切り返した。いよいよ平安らしくなってきた。

「僕が道頼になれって言うんですか？ ははっ。白崎さん、随分歌を詠むのに慣れてきたみたいですね。いやー、気に入った。会心の返歌でした」

むくれて口を尖らせる白崎さんが、とても可笑しかった。褒めているのだがな。

リーチ先生はいつまで勘違いし続けるんだろう。私が好きなのは先生だけなのに。

先生が私のことをどう思ってるのか、いまいち分からない。でも歌は贈り続けたい。だって私が歌を持っていくと、「楽しみに拝読させていただきます」とか言って、いつも本当に嬉しそうな顔を見せてくれるから。そんな顔を見たくて、夜の一時まで古語辞典と格闘することもある。先生のそういうときの顔は、私にだけ見せてくれる、特別な表情のような気がして、このちょっと変わった関係をやめることができない。

リーチ先生の研究室に来るのは、もう数えきれないくらいになった。あまりにも暑いので先生のところで涼ませてもらおう、と思って訪ねた夏のある日のこと。研究室手前の大きな事務机の下で、黒々とした小さな蜘蛛が蠢いているのを見つけてしまった。

「ひっ！せ、先生、蜘蛛……！」

とっさに一、二歩退いた私を尻目に、先生は優雅にささやいた。

「おや、アダンソンハエトリ」

「なんですか、それ」

私のそばまで歩いてきて、穏やかな口調で言う。

「そういう名前の蜘蛛なんです」

「先生、蜘蛛なんて好きなんですか」

「まあその、僕、基本的に虫は苦手なんですけど、蜘蛛はなんというか、好ましい生物のような気がして……」

先生がしゃがみ込んで机の下を見ようとするので、私もつられてしゃがんだ。

「だ、だって、気持ち悪いじゃないですか」

「いえね、平安時代は、蜘蛛のことを『ささがに』といって、夕暮れ時に蜘蛛が天井から降りてきて自分の着物にとまるのを見て、恋しい人の訪れる前兆だといって喜ばれていたんですよ」

「そんなんですか？」

「なんだか信じられない。『ささがに』とか言われても、蜘蛛よりむしろ沢蟹をイメージしてしまう。良さがいまいちよく分からない。足が八本もある虫が目の前で蠢くのを先生は正視できるの。」

「実際、蜘蛛は害虫を捕食してくれる益虫でもありますから。殺生は無用ですよ」

私、ときどき先生が分からない。

「君を見ていると、なぜだか衣通姫えとろひめの歌が浮かんでくるよ、アダンソン。君は糸を垂らしているわけでもないのにな」

先生は床を少しずつ移動するそいつに向かって、一首、歌を口ずさんだ。

「我が背子が来べき宵なりささがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」

「………どういう意味なんですか？」

「恋しい人が来そうな夜、蜘蛛の動きが、それをはつきり知らせてくれる、ということですね」
うっとりとした表情で言葉を紡ぐ。蜘蛛が少しずつ移動して本棚の後ろへ回り込もうとするのを、

先生は慈しむような目でしばらく見送っていた。

先生が言っているとんだか雅なものに思えてくるけど、正直言ってやっぱり蜘蛛の動きとかあんまり見たくはない。なのでアダンソンさんはもう来ないで。邪魔しないで。

ささがにのふるまひしるき日なりでまいととく来むと我は思ふに

後日、先生にこの歌を持って行ったら、一読して少し驚いたような表情を見せ、それからふわりと笑った。

「いい歌ですね。よく勉強されているのが分かります。僕個人としても、教員としても、大変嬉しく思いますよ」

この前と同じ慈しむような目で、私を見る。眼鏡のレンズ越しの、笑いじわのある優しい目元。ああ、幸せ。先生といると、幸せ。

「あの、ひとまずここのお菓子、全部持って行って構いませんから。今日は気分がいいのでサービスします。どうせほとんど貰い物ですから、ほら」

先生はきびきびと戸棚の上の方から黒い箱を取り出してきて、机に置いた。きらきらした金粉が散

りばめられた、黒く光る重箱。三段重なっている。先生がそれをぱかっと開けていくと、中にはお菓子がたくさん。クッキー、どら焼き、おせんべい、ラスク、甘納豆……。リーチ先生の研究室にあるお菓子の重箱は、国文科の間では結構有名だ。

「ああ、幸せだなあ」

先生の言葉に、思わず目を見開いた。遮光カーテンを少し開け、窓の外を見ながら独り言をつぶやいている。あのいつも幸薄そうな雰囲気をもたらわりつかせているリーチ先生が。レアなところを見ってしまった。いいなあ。ずっと幸せでいてほしい。

「また、来ました」

「おや、どうも」

そんな短い挨拶を交わし、いつものように椅子に座る。先生も立ち上がってこちらに歩いてくる。

「先生、私、先生のお邪魔はしたくないので、お仕事は続けてください」

「いや、しかし」

「私はここで勉強します」

「そうですか。それはそれで構いませんが」

この前梨子ちゃんに、「なんか志保ちゃんって、いつつもリーチ先生のとこ行くよな」って言われ

てしまった。「あんま先生の邪魔したらあかんで」。確かに、先生だってお仕事があるのだ。たいてい一時間か二時間くらいで帰るようにしてるけど、こう毎週のように行ったら、流石に迷惑だよ。そう思って私は、先生のお時間を取らせないように気を付けることにしたのだ。先生の近くで過ごすことができれば、話ができなくてもいい。

「ところで、寒くありませんか」

先生がエアコンとリモコンを交互に見ながら言う。

「いえ、大丈夫です」

「では、このくらいに設定しときますか。いやー、十一月ともなると、めっきり冷え込みますね。

僕、冬は苦手なんですよ」

先生はやせてるから寒いだろうな。

その後、先生と私は同じ部屋の中で、黙ったまま別々のことをして過ごした。一時間ちよつと過ぎたところに、ゼミのことを思い出して、パーティーションの奥に向かって声をかける。

「あの、先生。ゼミの面談って、来週でしたよね」

来年の四月から私もいよいよ三年生になって、ゼミが始まる。所属するゼミは、希望のゼミの先生との面談や、希望者の数によって決まる。思わず、背筋が伸びる。

「私、老月先生のゼミに入りたいんですけど」

先生が立ち上がる音。少し微笑みながらパーティーションの奥から出てくる。

「白崎さんはそうおっしゃるだろうと思っていました。あの、そう硬くならなくとも大丈夫ですよ。

僕のところは毎年多くても四、五人つてところですから。面談といっても、簡単な意思確認ですよ」
なんだ。良かった。

「白崎さんなら僕も安心です。演習の授業でも積極的でしたしね。白崎さんのことは改めていろいろと聞かなくても大丈夫だと思いますし、なんなら来週の面談は免除しますよ」

「えっ、それは困ります」

「なぜ困るんです」

「いや、ちゃんと正規の手続きを踏んでいただかないと」

「僕の裁量次第なんですがね、正規とみなすかどうかは。まあ、白崎さんがそこまで言うんだったらやりますよ」

良かった。先生と話せる日を一日分損するところだった。

面談の日、先生はこんな歌をくれた。

ぬばたまの夜ごとに鳴けるきりぎりすまめなる様の好ましきかな

人を虫に例えないでください。でも褒められてるんだよね。「好まし」って。慌てて意味を調べる。「好色らしい。浮気っぽい」。これは絶対違う。「好きだ。心が惹かれる。好感が持てる。感じがいい。すてきだ」。……どれ？ どれなの、先生。ニュアンスによって私の喜び方も変わってくるんですが。

十

春がまたやってきて、ゼミのメンバーもまた入れ替わってゆく。今年の三年のゼミ生は白崎さん、秋本さん、杉浦さん、高山くんの四名。ちょうど進めやすそうな人数で良かった。

近頃は僕が研究室にいると白崎さんが来て、静かに自習をしていることが多くなった。僕もなんだか安心感を覚えてしまっていて、ちょっとした用事ならば留守番を頼んでおけるくらいに信用している。研究室へ戻ると学生の提出物を預かったり、他の先生からの伝言をメモに残してくれていたたりするので、とても助かっている。

僕が研究室にいないときは研究室前のポストの中に歌が入っていることがあるので、必要以上に確認する癖があった。いつの間にか歌を心待ちにしまっている。

春立ちて梅にとまれるうぐひすの心を梅は知ることもし

先日そんな春の恋歌が入っていた。恋歌のやり取りをすることで、平安文学の貴族により深く感情移入できる気がする。平安と言わず、昭和でも手紙を送り合うことはよくあったはずなのに、最近ではもう形式的なものしか送らなくなった。ポストを開けるときの高揚感と、その後を訪れるしばしの落胆を、現代人のほとんどはもう忘れてしまっただろうか。僕がまだ今ひとつ時代の流れに乗りきれないことを、喜ぶべきか、悲しむべきか。

「お疲れ様です」

学食で休憩を摂っていると、僕に挨拶をする人がある。椎野先生だ。紫色のフレアスカート。相変わらず高貴そうなご様子でいらっしやる。……大丈夫。僕はもうこの人に心を乱されたりはしない。

「お疲れ様です」

「さっき、可愛い秘書さんお待ちでしたよ」

「え、白崎さんが」

それなら早く行ってやらねば。

「あの子、よく老月先生の部屋の前でそわそわしてるんですよ。あの手の子はちょっと危ないん

じゃないですか。私も昔、男子学生に付きまとわれて迷惑したことあるんです」

「いえ、僕は別に迷惑だなんて思ってません」

「それならなおさら良くないですよ。気があると勘違いされますから」

勘違い。そんなことにはならないと思うがな。

「そういえば老月先生、前より雰囲気明るくなりましたね。歩き方も変わりました」

「そ、そうですか？」

フランス文学専門のくせして心理学者のような観察眼だ。

「ええ、前はそんなウサギ柄のネクタイなんてしてませんでしたよね」

「これは昔、母から貰ったものです。関係ありません」

昔、僕の誕生日に、僕が卯年生まれだからと言って母がくれたのだ。一度大学に締めて行ったら白崎さんがとても気に入っていたようなので、よく使うようになったのであって、別に僕の好みではない。

「そうですか。まあ、くれぐれもトラブルのないようにしてくださいね」

念を押すように言って、椎野先生が去っていく。高々と響くヒールの音が耳についた。まあ関係のないことだ。先を急ごう。

僕の研究室の前でリュックサックを背負いながら白崎さんが佇んでいる。

「あ、先生」

「お待たせしてしまったようで、すみません」

「いえ、そんな。まだゼミの時間まで四十分もあるのに、早く来ちゃったんで」

「構いませんよ、どうぞ」

研究室の鍵を開ける。白崎さんは慣れた動きで荷物を置いて席に着いた。俯くときにはらりと流れる黒髪が、美しい。荷物の中から一冊の本を取り出し、静かに読書を始めた。僕のことを根掘り葉掘り聞いてこなくなったのが、そこはかとなく寂しい。

「葉にでも使ってください」

本の横に差し出すように、縦長の紙を置いた。

梓弓春立てば来るうぐひすの声やゆかしき早な帰りそ

あくまでも平安を模したごっこ遊びだ。そのことをお互いに認識したうえで、最近は歌の内容もかなり恋愛感情の深いものを詠んでいる。信頼関係があるのだから、椎野先生の言うようなトラブルは決して起こり得ない。これは僕たちの共通の趣味のようなものであり、研究の一環でもあるのだから。

夜も更けるころ。築地の崩れを這いつくばってぐり抜け、透垣の影を移動する。

今宵いらしてくださるなら、あなたのお心は本物であると思うことにしましょう、とのお言葉をいただいた。本来ならば気軽に歌を交わすことすら難しい身分の方だ。参らぬわけにはいかない。

透渡殿をなるべく静かに通り抜け、あの方の部屋まで辿り着いた。

「もし。歌をいただいで、参りました」

そう声をかけると、衣擦れの音が御簾越しに聞こえて、あの方の声でした。

「小夜更けの君ですね。お待ちしておりました」

すぐ近くに高貴の姫君がいる。この御簾を一枚隔てた向こう側に、おわすのだ。自然と胸は高鳴る。

「冷えますでしょう。……今宵ばかりは、お入りくださいませ」

御簾の下からそっと単衣の袖を差し出してきた。揃えた指先が、僅かにのぞいている。

「み、宮様。なりません」

「いいのです。誰に咎められようとも。小夜更けの君様に、わたくしへのお気持ちがあるのでしたら」

そう言うのと、宮様はお手を戻される。

「困りましたね」

御簾に手をかけると、今度は御簾から離れていこうとなさる宮様の衣擦れが聞こえた。御簾を上げて一息にくぐり、中へと踏み入る。こちらに背を向けて座っておられる宮様のお姿に、はっとする。

川の流れのように豊かな黒髪が、紅い着物の上に広がっている。それを少し持ち上げながら、着物の裾の上に乗る、近くへとじり寄って袖をとる。

「自ら招いておきながら、なぜお逃げに」

「この顔をお見せするのが恥ずかしくて。貴方を想って流す涙で、すっかり曇ってしまいましたから」

「雨に濡れる花も美しきもの。雲のかかる月もまた、あわれなり。そう、存じます。さあ、宮様」

宮様の肩を抱き、引き寄せる。宮様の頭を胸元にもたれかからせ、その長い黒髪をかきやり、白い頬に触れる。おずおずとこちらを見上げるそのお顔は――

「先生……？」

――白崎さんではないか。

「先生――！」

「は、はいっ！」

白崎さんの声に、慌てて肘掛け椅子から上体を起こす。

「私、そろそろ帰るので、あの、失礼します」

パーテーションの向こうの白崎さんに、僕はほとんど何も言えないでいた。

「……分かりました」

「起こしちゃって、すいませんでした。ゆっくりお休みになってください。それじゃ」

ぱたぱたと遠ざかってゆく足音を聞いて思った。急いでいたのに、わざわざ僕に一声掛けてから帰ったのかと。

眼鏡を掛け時間を確認する。いかん、どうやら三十分ばかり居眠りしていたようだ。……それにしても、忘れたい夢だった。起こさなくても良かったのに。もう少し、平安貴族をやっていた

かった。小夜更けの君でも何でもいいから、もうしばらく、あんなふうに想われていたかった。思ひつつ寝ればや人の見えつらむ、夢と知りせば覚めざらましを。いやいや。そんな、小町じゃあるまいし。ロマンチックな妄想に耽っている場合か。

研究室を出るとき、白崎さんがさっきまで使っていた机の上に、メモ用紙がひらりと乗っているのを見つけた。僕が寝ている間に用意したとみえる。

たちつてとなにぬ寝姿かいまみて

だけど髪には触りなかつた

白崎さん、僕のスペースに入ってきているじゃないか。やめたまえ。人が寝ているときに覗き見なんて趣味が悪いぞ。ああ、しかし寝ていた僕も悪い。白崎さんだって一声かけてから覗いたはずだ。黙ってパーテーションを越えてきたことなんて決してなかった。なぜ眠ってしまったのだろう。白崎さんの前で安心しすぎた。

しかし斬新な書き出しだ。「たちつてとなにぬ」が「ね」を導く序詞のように用いられている。面白い手法だ。それと、この下の句はどういうことであろう。強がりな思春期の子供みたいな書きぶり。否定は意識的になっている証拠だ。要するに、僕の髪に触りたかった……？　こんな癖毛の何が

いいんだか分かりかねるが、触りたければ触ればよい。僕は別に構わない。

いやそんなことよりも。これは恋歌として解釈すべきなのだろうか。だとすると……。だとしたら。もう一度作業机に戻る。引き出しを開け、小ぶりの紙箱を取り出した。白崎さんからの歌が溜まってきたところから、ここに入れるようになったのだ。一筆箋、メモ用紙、葉書きに折り紙。様々な工夫を凝らした歌を、改めてひとつひとつ読んでみる。やはりすべて恋の歌だった。僕の平安静味に付き合ってくれていたのは、優しくて真面目な、その性格ゆえだとばかり思っていた。

とくとくと高鳴る鼓動。近づいてみると手は届きそうで、けれど月のように遠い。悩み、考え抜いた末に、嘆きつつその寝姿を後にする。「たちつてとなにぬ」は、そんな迷いにも見えた。……椎野先生のおっしゃることも間違っていないかもしれない。

十一

リーチ先生の研究室の机を、ゼミのメンバーで囲んでいる。私の隣に梨子ちゃん、向かい側が琴波ちゃん、その隣が高山くんだ。

今日は高山くんの研究内容について意見交換をした。高山くんは普段はゲームの話ばかりだけど、ゼミのときは真面目な男子だ。

「えー、なので僕は、『堤中納言物語』の末尾断章は、書きかけの物語の切れ端のように見せて書いた、散文詩的な作品として見る事ができるんじゃないかと今のところ考えてます」

「なるほど。確かに、ある程度の文章量があれば未完の物語という考えが妥当でしょうが、原稿用紙一枚にも満たないのではねえ。普通は、これくらいのメモ書きの段階で執筆途中の物語を人に見せたりはしないように思いますし」

「じゃあこれはもう、この状態で完成ってこと？」

資料をじっくり読んでいた琴波ちゃんが、高山くんに向かって問いかけた。

「一応、俺はそう考えとる」

「うーん。でも物語っぽく見えるんだけどな」

アイラインの入った大きな眼をちよつと細めながら、琴波ちゃんはもう一度読み返し始めた。梨子ちゃんが、はきはきした高めの声で尋ねる。

「さっき、散文詩的な作品って言うてたけど、これ、日記とか随筆っていう可能性はないん？」

「あー。言われてみれば確かにそうかもしれんな」

『枕草子』にもこれくらいの分量の物語的な描写があるのですが、それに倣って挿入したという指摘もあります。ひとまず、『枕草子』との類似点を比較検討してみてもは」

「分かりました」

「まあ、『堤中納言』は作者も成立年代もばらばらの作品が一挙にまとめられているものなので、未だに謎が多いんですよね」

先生が困ったように笑った。

「僕がこれの編者だったら、作品の前か後に編集意図を必ず明記するんですけどね。僕がこの成立時期に生きていればなあ」

「あー、また言うてはる」

梨子ちゃんが笑みを浮かべながら私に言う。先生の妄想が始まった、ってみんな思ってる。

「いや、しかし鎌倉時代だったらやはり定家ですね。どうしてそこまで精力的に写本を作り続けようとしたのか、直接聞いてみたいものです」

「それはタイムスリップしてますよね。今の先生のままで」

「絶対、会話通じひんやん」

高山くんが冷静にツッコミを入れると、梨子ちゃんも乗っかる。琴波ちゃんは静かに笑っている。

「あー。でも定家と仲良くなれば、いろいろ聞けそうじゃないですか。式子内親王のこととか」

「定家と親しげに話せる身分やったらいいですけどね。確率低いですよ」

「高山くん、そういうこと言ったらおしまいですよー」

「あははっ」

面白い。先生いっつも集中砲火浴びるんだもん。私を見て先生がわざと裏声で言った。

「声が高いっ」

「あははははっ」

「公家っぽい。公家っぽかった！」

「声が大きいことを『高い』っていうやつや！」

「急に大河ドラマみたいになったね」

室内は活気に満ちた。

「白崎さん笑いすぎです」

えー。みんなだって笑ってますけど。先生だって口元が笑ってるし。先生もたまにこういうふざけ方するから面白い。ゼミが楽しいのは、結局先生のおかげなんだなって思う。

ゼミが終わると、高山くんはすぐ帰る。ネットゲームがしたいからだ。で、私と梨子ちゃんと琴波ちゃんは研究室でしばらく話したり、学食でおやつ食べたり、課題の相談をしたりして過ごすことが多い。

琴波ちゃんは三年になってからゼミで仲良くなったけど、大人っぽくてしっかりしてて、ゆっくり話しやすい。お父さんが大きな会社の役員だって聞いた。

今日は梨子ちゃんが部活の子に呼び出されて帰ったから、琴波ちゃんとふたりで学食に行った。お昼時と違って席は空いている。しばらく他愛もない話をしてしていると、琴波ちゃんはためらいがちに言った。

「ねえ、いきなり変なこと聞くけど、志保ちゃんて、老月先生のこと好きなの？」

「へ、へ、」

「あ、違ったらごめん。でもなんか、そうかなって思ってる」

「なんでそう思ったの？」

「老月先生と話すときの志保ちゃん、ちょっと声が高くなるから」

ああ、そういうのやっぱり分かるんだ。

「そっか。……うん。好き、だね」

「ちょっと前の私と似てるなと思って。私も年上の人、好きだったから」

琴波ちゃんはココアを飲みながら、少し悲しそうな顔になった。お父さんの会社の社員さんが、ときどき家に遊びに来ることがあって、そのときに好きになったらいい。かっこよくて業績も優秀な人だったらしく、海外転勤が決まって、もう全然逢えなくなってしまった。

「せめて最後に気持ちだけでも伝えられたら良かった」

切ないその表情に、私まで泣きそうになる。やっぱり行動しないと、後悔するよね。

「志保ちゃんも、後悔はしないようにね。私も、心の中で応援してる」

「ありがとう」

そっか。みんな、つらい恋してるんだ。凛として見える琴波ちゃんにも、そんな過去が。人の気持ちって、分かんないな。先生の気持ちだって、何十回、何百回考えても、分からないことがどんどん増えていくばかり。先生、思わせぶりだし。

冬が始まるうとしていた。「寒いですね」なんて言いながら、今日も白崎さんは研究室に入ってくる。よし。

僕は立ち上がる。窓側に立てかけて置いておいた、折り畳み式の和風の衝立を持ち上げた。白崎さんに顔を見られないようにして、衝立を運ぶ。

「それ、どうしたんですか」

「先日インターネットで購入しました。いやあ、便利な世の中になったものです」

いつも白崎さんが座っている大きな机の上に、衝立を置く。こうしてから座れば、入り口側の席に座る白崎さんの姿は、見えなくなる。障子が張ってあるので、向こうの影はちらちらと微かに見える。

「便利な世の中と言いつつ、我々はあえて逆を行きましょう。白崎さんならこういうことにも付き合ってくださいるのではないかと思います」

「え、どういことですか」

白崎さんは困惑している。無理もない。しかし視覚的な距離をとるのが一番楽だと思ったのだ。

「煩わしいですかね。これだと確かに、少し声が届きづらいと僕も今思いました。しかし、むしろ平安時代を考える上では一歩近づいたと思いませんか。平安時代の状況を最も簡易的に再現してみたいのですが」

「ああ、平安時代は物越しの対面ですもんね」

「ええ。ただ文献を読んでいるだけで終わるより、実際にやってみた方が勉強になることが多いのではないかと……」

白崎さんは、少し黙りこくってから、寂しそうに言った。

「じゃあ、もう先生の顔は見ちゃダメってことですか」

「いや、そうは言ってもせんよ。ずっと顔を隠すのは不自然すぎます。他の人たちに見られないときだけ。白崎さんとここで、二人でお話する時だけです」

「二人きりのときだけ……」

「はい」

僕は一旦、パーテーションの奥に引込む。引き出しの中から、用意しておいた歌と、冬季限定と書かれたチョコレート菓子をとり出した。白崎さんが使っているような小さなメモ用紙を、最近買ってみたのだ。これに歌を書いて折り畳んだものを、紙のパッケージの隙間に差し込む。それを持って、手近にあったプリントの束で顔を隠しつつ、衝立の前まで歩いて行った。

「なんですか」

衝立の向こう側に、どうぞ、とチョコレートの箱を差し出す。白崎さんには僕の手しか見えない。

「あ、これ、前言ってたやつですか」

「そうです。買っておきました」

「先生そういうことする……」

ぼそっと拗ねるように言う。どんな顔でその箱を開けたのかは、想像で補うのみ。

みるままに冬は来にけり召す君をみられぬことの惜しくもあるかな

「見たいなら見ればいいじゃないですか。なんでわざわざこんなもので遮ったんですか」
ぶつくさ言う声は、次の瞬間にはもう幸せそうな声に変わっていた。

「あゝ美味しい。先生もどうですか」

衝立の横に個包装のチョコレートがひとつ置かれた。

「ああ、頂きます」

「先生が買ったのに、頂きます、なんて」

「あはは」

こんなことをしていいのかと思う。何がしたいんだ、僕は。

十三

「弊社を希望する理由をお聞かせください」。そんな質問に、何度遭遇しただろう。そのたびに私は、きれいごとやありきたりな話を並べ立てて、不採用通知を受け取るばかりだった。

つらい。先生に逢いたい。でも先生に逢うと愚痴ばかり言ってしまうようで、足が重くなる。

最近、リーチ先生の姿を見るのがつらい。ゼミのときとか学校の中を歩いているときとか。二人きりだと顔を見られない分だけ、先生の顔をちゃんと見られるのは貴重な瞬間になってしまった。先生の方から、こっちを見てくるときもある。でも目が合いそうになると、つい逸らしてしまう。先生の前でどんな顔したらいいか分からなくなってしまった。

どうせこの恋は報われない。そんなことは分かっていた。だからちよつとずつ先生と距離をとって、先生に逢えなくなるときのための心の準備をしようと思ってるのに。なにに最近、先生が積極的だ。衝立の間から、すつと紙を差し出しては、「また逢いに来てほしい」なんて意味の歌をくれるようになった。「平安らしいでしょう」と楽しげにして。

また好きになってしまう。これじゃ先生と離れるのがつらくなる。私もう四年生ですよ。あと一年しかないんですよ、先生。優しくしないでください。勘違いするから。

卒業したくない。卒論も書きたくない。でも先生に心配されたくないから、研究は進めてますよって言わないといけない。つらい。

ベッドから起き出して、ティッシュペーパーで思い切り鼻をかんだ。涙も拭っておく。そしてまた

布団にくるまっては、先生の顔を思い浮かべる。

十四

歳月人を待たず。お構いなしに春は来る。僕も少々忙しかったのと、就職活動で忙しい四年生の都合を考慮し、四月はほとんどゼミの日を設けなかった。

白崎さんも忙しくしているのだろう。しばらく会っていない。様子が分からないが、先日会った秋本さんが言うには、就職活動の過密スケジュールがたたって体調を崩したと聞いた。無理はしないでほしい。歌を詠む時間はなくても、研究室に少し顔を出してくれるだけでいい。元気な様子が見たい。

ああ、また白崎さんのことを。学生の一人を特別視してはいけないと何度も己に言い聞かせているのに。流石に教え子に特別な感情を抱くのは倫理的に問題があるだろう。いや、頭の中で考えるだけなら罰せられることはないからいいのか。しかしそうやって感情がエスカレートした結果、大きな問題に発展してしまう例は枚挙に暇がないのではないか。先日も「女子高生にわいせつ 男性教諭を懲戒免職」などという新聞の見出しを見たばかりだ。懲戒免職。恐ろしい響きだ。もしそうなったら僕の人生は終わりだ。いよいよ出家するしかない。あ、でもあの手の事件は相手が未成年だから問題視されているのか。だとしたら白崎さんは成人しているからその点は問題ないと言える。いやいやしか

し。問題視するような部類の人間に知れたら、結局同じことだ。

それに、いわゆるわいせつと呼ばれる行為に及んだ場合、争点になるのは相手の同意があったか否かだ。相手の年齢以前にまず同意がなければならぬ。では同意さえあればよいのか。しかしそもそも同意とは何だ。何を以て同意とするのか。

白崎さんはどんな気持ちで僕に歌を詠んでいたのか。どんな気持ちでいつも研究室に来てくれたのか。恋歌を詠む、というのはどのくらいの恋愛感情なのか。彼女の気持ちが分からないことにはどうにもならない。

偏見かもしれないが、若い女性というものは、知性がありそうに見えたり、相談に乗ってくれたりする身近な年上の男に憧れを抱きがちな。そのような話をどこかで聞いたし、そういうものだろうと僕も思う。

しかし、そういう男から、「教員」という武装を解除した場合、どうだろうか。教員の肩書きを捨てて生身の男となったとき、それでもなお男の魅力を残しているだろうか。外では先生と呼ばれていようとも、決して先生的ではない生活者としての一面をいくつも抱えていて、自分の得意分野を一方的に語り、人並みに性欲も持っている。そういう一人の男として見たとき、それでもその先生、もとい彼を想い続けられる女子生徒・女子学生はいったい何人いるだろうか。心ない陰口に傷ついたり、卒業後新たな環境で刺激的な出会いがあったりしても、一途に彼に会いに行く情熱が、彼女らにあるだろうか。

教員との恋愛など、所詮そんなものだ。

僕はそう結論付けてみたものの、作業机の引き出しを開けてみて、はたと気が付く。彼女宛てに書いた歌が入っている。いつの間に入れたのだったか。確か先週書いたままになっていたのだ。

年ごとに咲くべきものと待つままに桜花なき春を見しかな

白崎さんがここに来てくださらないと、この歌は渡せず仕舞いになってしまふ。もう春も終わっていく。あまりこういうことはしたくなかったが、大学やゼミの連絡用のメールに、歌を打ち込んで送信した。

十五

夏が始まるころ、なんとか私は京都府内の印刷会社から内定を頂くことができた。福井に帰らないの、とはよく聞かれたけど、別にこだわってません、と答えていた。実家とそこまで距離があるわけでもないし、京都の方が、企業が多くて就職活動がしやすかったし。

バカだな。結局リーチ先生のいる京都から離れようとしないうちで。就職、決まりましたって先生に報告したら、先生も喜んでくれたけど。「それなら、卒業してもまたここに遊びに来られますね」なんて言うんだもん。どうせ社交辞令に決まってるって思うのに、おんなじことを他の学生にも言うてるはずだっと思うのに、やっぱり期待してしまう。

私が卒業したら、先生はまた別の誰かに歌を贈るんじゃないの？「桜花なき春を見しかな」？いくら私が先生のとこによく通ってるからって、流石に大げさすぎるでしょ。私がいないとダメみたいに聞こえる。卒業したくなる。

今まで先生の研究室に行きすぎたんだ。先生まで私と話すのが当たり前前みたいになっちゃってる。一週間に一回だったのを、二週間に一回にして、一か月に一回にして、そうやって二人きりになるのをちよつとずつ減らしていけば、私だっていつか諦められると思ってるのに。逢えない時間がますます苦しくなる。特に夜がづらい。先生を想って、もう何度泣きながら夜を過ごしたんだろう。

教育機関は教育機関以外の何物でもない。そもそも大学とは学問を修める場であって、心の楽しみや人との出会いを求めるのは動機が不純だ。反省しなければならぬ。教育者が学問の場においてむやみに心を惑わすことは慎まねばならない。

それなのに。ああ、志保さん。近頃の僕はどうかしてしまっています。

もはや心の中では、白崎さんのことを志保さんと呼ぶようになっていた。これくらいは許されてしかるべきだ。いや、許すも何も、人の心は決して覗き見ることができないのだから、心の中でどう呼ぼうが、僕の勝手だ。僕はまだ、何らのそしりも受けることのない安全地帯の中にいる。まだ大丈夫なはずだ。

志保さんが来た。ノックの仕方でなんとなく分かるようになってしまった。

「先生」

研究室に入ってきた志保さんの声が、暗い。

「ああ、こんにちは」

何かと忙しいのかもしれないが、四年になってからここへ来る頻度も下がったし、歌も詠んでくれない。何か悩みがあるのだろうか。

「どうされましたか」

志保さんは黙っている。僕はいつものように衝立を持って行き、机の上に置いた。衝立の向こう側

の白崎さんは、どのような顔をしているのだろうか。じれったいが、僕から提案したことだ。仕方がない。

「近頃元気がないように見えますが、僕の気のせいでしょうか」

やはり返事がない。明るく笑う志保さんをよく知っているだけに、心配だ。

「白崎さん」

「はご」

「何でもいいので、話してみてくださいませんか。悩みを抱えるのは、恥ずかしいことではないですから。それに、物越しの方がかえってものが言いやすいということもあります」

衝立の障子紙の、ぼんやりした影が少し動いた。

「……卒論、出さなくてもいいかなって思ってた。どうせ全然進んでないし」

志保さんに限ってそんな。

「卒業できませんよ」

「はご」

「……就職に支障をきたしますよ」

「……私が今から言うことをちゃんと聞いて、考えてくださったら、卒論書こうと思ってます」
なんだ、書くんじゃないか。脅かさなくてくれ。真面目で研究熱心な志保さんがなんてことを言うのかと思った。

「先生がちゃんと考えてくださったら、これからは私、ゼミのとき以外はもうここに来ません」

「は？ どうしてそんな……」

少年のような上ずった声が、室内に間抜けに響いた。

「聞いてください」

「はい、聞いています」

「ちゃんと、考えてください。じゃないと卒論書きませんから」

「もちろん、考えます」

そういう他にはない。なんだ、「考える」って。何を考えろと言うのだ。しかも、「考え」たら、もうゼミ以外で逢えなくなるらしい。が、「考え」なければ卒論を書かないという。教員を脅すな。

「私……」

衝立のぎりぎりまで頭を近づけ、耳をそばだてる。苦しげな息遣いが聞こえた。

「好きです。先生のことが、ずっと、好きでした」

はっとした。志保さんに貰った恋歌が、いくつも頭の中を駆け巡る。衝立の向こうからは、安堵するようなため息。

「やっと、やっと言えました。ずっとつらかったんです。どんなに恋の歌を贈っても、先生にはこの気持ちが届わらなくて。でも先生が優しいから、やっぱ好きって思ってしまった。ここに来るのがやめられなくて。先生に喜んでほしくて難しい本いっぱい読んで、歌考えて……つらかった……」

涙声で吐き出される感情が、僕の心を痛めつける。志保さん。そんなふうに思ってた。

「すみません。……でも伝わってましたよ、白崎さんのお気持ち。本当はもう少し前から、気づいていました」

「分かってて、どうして私と距離をとろうとしなかったんですか」

鼻水をすすりながら、責めるように言う。

「しましたよ。これ」

僕は衝立の縁を掴んだ。

「これ、ただの平安時代ごっこじゃなかったんですね。でもこれ、逆効果でしたよ。顔が見れない分、今どんな顔してるんだらうって想像しちゃうし、ゼミのときとか、学校の中で見かけたときに、ああ、堂々と先生の顔見れる、って嬉しくなっちゃうし」

確かにそうだ。自由に顔を見ることの出来ない状況では、抑圧されている分、やっと顔を見られた時の喜びが増幅される。その格別な喜びに、恋心は募る一方だ。

「そうですね。申し訳ないことをしました。じゃあもうこれ、どかしましようか」

「あ……やめてください」

立ち上がって衝立を持ち上げようとすると、志保さんの両手が衝立を掴んで離さない。

「今、ひどい顔してるんで」

「……分かりました」

見たかった。泣き顔でもいいから。再び座ると、志保さんの呼吸が浅くなった。

「先生、私のこと振ってください」

なんてことを言うんだ。そんな悲しい台詞、聞きたくなかった。

「気持ち、伝えられたからもういいんです。諦めます。ちゃんと卒論書いて、先生からも卒業したい

んです。だからほら、早く振ってください。こう言えば、断りやすいですか？ 先生、私と付き合ってください」

「白崎さん、一旦落ち着きましょう。焦らないで、ゆっくり考えましょう。ひとまず卒論を書いてからもう一度きちんとお話ししましょう。それまでに僕も心の整理を……」

「嫌です。それじゃダメなんです。まだ望みがあるかもって期待してしまうと、卒業したくなくなるんです。今、振ってください」

困った。なんと言えばいい。なんと言えば、この場を切り抜けられる。

「……どうして？ 先生でしょ？ 学生の告白断るくらい簡単じゃないですか。ちゃんと先生らしくしてください。……老月先生って、先生なのに、先生っぽくないですよ。そういうところですよ。そういうところがダメなんです」

俯いたまま立ち上がる。

「意気地なし」

吐き捨てるように言い残し、たつと駆け出した。ドアが乱暴に閉まる。

「し、志保さんっ！」

思わず口にしてしまったその名前を、今度は静かに呟いてみる。志保さん。僕は何を間違えたんでしょうか。どうして、もう逢いに来ないなんて言うんですか、志保さん。あんなに楽しい時間を、素敵な歌を僕にくれたというのに。ああ、志保さん。声に出して、志保さんと呼んでみたい。胸が熱くなる。涙がこぼれる。この気持ちを、何と呼べばいいのだろう。

お互いの立場に愕然とした。先生らしくしろと言われたが、確かにその通りだ。僕には志保さんを追いかけるれない。せめて志保さんが卒業していれば。せめて誰の目も気にならないところなら。

いやいや、そういう問題か。もし志保さんを追いかけて行って、無理やり迫ったところを通報されでもしたら一巻の終わりだ。僕には行けない。

午後の予定が入ってなくて幸いだった。誰も来ないところへ行こう。ここにいるのはつらい。志保さんに貸した本。志保さんがよく食べていたお菓子。志保さんに頂いた歌の数々。思い出すものが多すぎる。

もう恋はしたくない。志保さんと出会ったばかりのころはそう思っていたのに。僕は一体、どれくらい苦しめば、恋に心を惑わすことがなくなるのだろうか。

志保さんは僕が思っているよりもずっと大人だった。恋心を抱えながら、深く悩み、真剣に考えて、必死に想いを断ち切ろうとしていた。それなのに僕は上手い断り文句も言うことができないなんて。なんて弱い人間なんだろう。いい年をして。まるで舵を失い、沖合を彷徨う小舟だ。自分でもどこへ行けばいいのかわからない。なすすべもなくふらふらと大海を漂うばかり。ああ、どつしりとした山のように、簡単に心を揺れ動かすことのない人間になりたい。ゆくへも知らぬ恋の道かな。そんな歌を贈ったこともあった。あれから始まったのだ、この関係は。まさか自分に返ってくるとは。

梨木神社の境内の門に、十月の冷たい雨が叩きつける。あちこちに水たまりのある道を歩いてきたせいで、ズボンの裾に泥が跳ねている。皺の多いシャツは、いつになくズボンからはみ出したままで、髪は強風にあおられて成すすべもなく、眼鏡には雨の滴が散らばっている。

なんとという格好。流石に無様というほかあるまい。十七歳も年下の女の子に翻弄されて。平安時代の、例えば頭中将に任ぜられるような容姿端麗な色男であれば、こうした風体であっても、宮中の才媛を籠絡することができたのかもしれない。流麗な文字で「思い乱れて」などと詠んで贈るのだろう、おそらく。今世の我が身には不可能な所業。時代も文化も身分も違う。しかしそれ以前に、自尊心が違うのだろう。自分自身、自尊心の低さは自覚している。

だんだんと雨は激しさを増してきていた。傘を持ってきていない僕の体に、雨風は容赦なく吹き付ける。

「先生、探しましたよ」

雨音交じりに、明らかに僕に向けられた声が、背後から聞こえた。門の下で、志保さんの方は見ないまましゃがみ込んだ。居たたまれない。惨めだ。こんなところを見られるなんて。教員としても、大人としても、男としても格好がつかない。いや、むしろそのほうがいいのかもしれない。無様な姿を見せるだけで僕への関心が薄れるのなら。志保さんがなるべく苦しまずに僕を忘れられるなら。良からぬ噂を立てられる心配もなくなるからだ。僕も失職の危機から脱することができると。

「あのっ、さっきはすみませんでした。冷静になって考えてみたら、先生に向かって私、なんてこと言ったんだらうって」

「いいんです。白崎さんの言う通りなんです。もともとこういう人間です。先生なんて、そんなに格好いい職業じゃありませんからね」

志保さんからは顔を背け続けたまま答える。門の屋根から滴り落ちる水を見つめている。

「情緒不安定ですから。白崎さんの好きな先生なんて、ここには存在しません」

ざあざあと降りしきる雨が、時折眼鏡のレンズにはねる。

「これで、僕のことを忘れられそうですか」

志保さんは黙っている。見なさい、今の僕を。恋に煩うような価値なんてない男です。そうだ、それでいい。そのまま踵を返してもう戻って来るな。そして二度と僕に、恋の歌なんか寄越さないでくれ。

「ダメです」

背中にそっと、彼女の指先が触れていた。思わずのけ反りそうになる。

「先生がちょっとかつこ悪いくらいじゃ、好きな気持ちは変わりません」

「え、」

彼女の手が、僕の背中に優しく置かれていた。シャツ越しに伝わってくる手は、温かかった。

「一年生のとき、先生チャペルで泣いてましたよね」

いったい何を言い出すのか、この子は。思わず後ろを振り返った。驚いて僕を見る彼女の顔は、すぐさまほころんだ。

「やっそこつちを向いてくれましたね」

「白崎さん、まだそんなこと、覚えていたんですか」

「たまたまチャペルに行ったら、先生を見かけたんです。よく見たら先生が泣いてて、それで私……それ以来、先生から、目が離せなくなっただけです」

この子はそんなに前から、僕のことを。僕は立ち上がる。志保さんも、ずっと立ち上がって、僕を見ている。

「ではあなたは、こんな僕を見ても驚かないと」

「はい。それどころか」

僕は拝殿を背にして志保さんと向かい合っている。彼女は僕の右腕を両手で包み込むようにして掴んだ。限りなく優しい力に捻じ伏せられて、右腕はおろか、体全体が金縛りにあつたように動かさなかつた。

「好きですよ。先生の、情緒不安定なところ」

なんだって。そんな人がいるのか。この世に。そんな女性も、存在しているというのか。

「情緒不安定ってことは、情緒豊かかってことでもあるじゃないですか。そこがいいんです、先生は。」

そういうところが、私の心を、揺さぶるんです。だから先生は、そのまんまの先生でいてください」

なんて女性だ、あなたは。意気地なしと言ったかと思えば、不安定さが好きだなんて。僕は彼女を何も分かつていなかった。

「変わった女性ですね、白崎さんは。そんな方は、初めて見ました」

「初めて」

「ええ、初めてです」

志保さんは悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「じゃあ私、先生の初めてを奪ったんですね」

「誤解を招く言い方はよしてください」

軽やかに彼女が笑う。時雨の打ち付ける薄暗い境内に、明るい笑い声が響いた。

これは光か。僕の光なのだろうか。この柔らかな光を僕が浴びても、罰は当たらないだろうか。僕の心に無条件に差し込んでくるこの光を、もう少しだけ、浴びていたいと思った。ここから先は安全地帯の外だとも構わない。僕の人生の重大事だ。

「そろそろ帰りましょうか。こんな天気ですし、のんびりしているとお互いに風邪をひいてしまいます。お詫びと言っただけなんです、車でお送りしますよ」

「え、先生の車」

彼女は何故か急に俯いて身じろぐ。

「ええ。無理には言いませんが」

こくり。彼女が頷いた。

「無理には言いませんよ」

「いえ、是非。お言葉に甘えて」

そう言っただけで心持ち微笑んだ。年上の男をからかって楽しそうにする。突然表情を変える。何を考えているのかは皆自分からしない。しかし、可憐だ。女性というのは、ああも可憐に微笑むことができるものなのか。ふっくらとした頬の輪郭の中に、口角が少し上がり潤った唇があつて。

「先生、どうぞ」

軒下で彼女は自分の持ってきた傘を開くと、僕の頭上へともたげた。傘を受け取った僕の右手の指先が、傘の柄から離れようとする彼女の華奢な手に、一瞬触れた。

水玉模様のあしらわれた透明の傘を差しながら、彼女の歩調に合わせて歩く。彼女が雨に濡れてしまわないように。誰かのために傘を差して歩くということが、こんなにも献身的で、かつ喜ばしいことだとはつゆ知らなかった。

足繁く通ってきては、「先生、」と朗らかに話しかけてくる、彼女と共にありたい。素敵な歌を詠んでくれる、彼女の言葉と共に生きてみたい。彼女こそ僕の救いかもしれない。だとしたら彼女が卒業して僕の前から去ってしまうのを、黙って見ているわけにはいかない。

十七

濡れそぼって頬や首筋に張り付いた髪をそのままに、リーチ先生は運転席でハンドルを握る。何だか物思いに耽るように、ふう、と息を吐いた。そういえば今まであまりイメーজしてこなかったけれど、先生は車に乗るんだ。こんなふうには、いつも物憂げに車を運転しながら大学に通っているんだらうか。

「白崎さん」

そんなふうには想像を膨らませながら、目を閉じて、息を吸い込んでみる。これが先生の車の匂い。くるっとこちらを見た先生と目が合ってしまう。

「はいっ」

「シートベルトを締めていただけますか」

「あっ、ごめんなさい」

慌ててシートベルトを着ける。先生に気を取られて、つい。

「それでは出発しますよ」

先生がエンジンをかけた。車はゆっくりと動き出す。先生の角ばった手に握られたハンドルが、右へ左へと滑らかに動いている。

いつもは少し物足りないように見える細い腕が、車を運転しているからだろうか、頼りがいのある腕に見えた。助手席から見る先生は、やっぱり大人の男性だ。

「あ、ここに停めますよ」

「はい」

先生の白い車が、私のアパートの駐車場に停まった。わあ、本当に送ってもらっちゃった。

「それじゃ、ありがとうございます」

「あの」

ドアを開けようとした私を、先生が制した。

「志保さんも、そのままの志保さんでいてください。志保さんのいいところは、素直で、真つすぐなところですよ。だから……」

「先生。今、私のこと、志保さん、て」

「え、あっ……」

先生ははつとした顔で、横を向いた。可愛い。

「すみません」

「いえ、もっかい、呼んでください」

「えっ……し、志保さん」

「はい」

え、これって、先生、私のこと好き……だよな？

「……お気に召して頂けたようなので、これからは親しみを込めて『志保さん』と呼ばせていただきますね。二人きりのとき、だけ」

「はい」

「志保さん」

「はい」

「諦めなくていいですから。これからは、僕も逢いに来ます。卒業しても、また逢えますから。だから……卒業出してくれますね」

「うっ……。はい」

なんだ、結局卒論の話か。うまいことやられた。でも私決めた。卒論書く。自分のためにも、先生のためにも。だって先生、卒業しても逢ってくれるんでしょ？ それってつまり……そういうことでしょ？

十八

京都市内にも雪のちらつく寒い日だった。僕は研究室で一通のメールを受け取った。志保さんは、卒業論文を無事提出できたんだそうだ。そうか。終わったか。『とりかへばや物語』の和歌研究。男が入れ替わった状況を読み慣れてきたところで再び元の役割に戻る、という非現実的な話ゆえに、他の古典作品の読解以上の想像力を必要とする。だが彼女は、この研究室で僕と歌を詠み交わしたことを想像力の糧としたのだろう。少しでも、彼女の研究の助けになれたと信じたい。

僕も待つのではなく通う側になりたい。そう思った勢いで電話をかけてしまったが、少し照れながらも志保さんは僕を家に招いてくれた。

実際に行ってみると、志保さんの部屋は、意外にも洋楽のCDや少年向けコミックがたくさん置かれていた。

「志保さんの新しい一面を見ました」

「ちょっと、あんまりいろいろ見ないでください」

何も隔てるものがないと、志保さんの恥ずかしそうな顔もよく見える。やはり行動を起こして良かった。

手土産のドーナツを食べながら二時間ほど話して、「明日も来ます」と言い残してその日は帰った。

「先生急にどうしたんですか。二日連続で遊びに来たりして」

「え、ご迷惑でしたか」

「いえ、そうじゃなくて。いつの間にか先生がどんどん積極的になるなあ、と思って。なんか、ちょっと戸惑っちゃいます。先生は、私がしょっちゅう研究室に通ってたとき、戸惑いませんでしたか」

「確かに、少し驚いたかもしれませんが。行動力あるなあ、と。でも、白崎さんのことを迷惑だと思っただことはないんです。不思議と」

もしかしたら僕は、思ったよりも前から志保さんに好意を寄せていたのかも知れない。いつからか僕は、自分の中に志保さんの像を思い描いて、空想上の恋人のようにはしていたのではなかったか。その空想に向かって、歌を詠んで。けれど志保さんと話すうち、志保さんをもっときちんと知りたいと思うようになった。空想ではなくて、実像の志保さんに歌を贈りたいと思った。

「筑波嶺の峰より落つるみなな川恋ぞつもりて淵となりぬる」

ローテーブルの向こうから回り込み、目を丸くして固まっている志保さんの隣に座る。

「先生……」

髪を、撫でてみた。柔らかい髪が指を通り抜けていく。肩に手を置きながら耳元で言った。

「明日も、来てもいいですか」

「明日も……?」

「はい。明日はお餅を食べたいです。用意しておいてください。これ、一生のお願いです」

十九

今日も先生が来てくれた。先生の様子がちょっと変だけど、可愛いからまあいいんだ。

「お餅がありますよね」

私の部屋に入るなり、先生はそう言った。

「はい。昨日先生が用意しておけて、おっしゃってたので」

私は冷蔵庫から角餅の入った紙箱を取り出した。実家から送られてきたものだ。二つ、レンジで加熱する。

「先生、砂糖醤油にしますか、それとも、お醤油だけ?」

「ああ……では僕は、醤油だけで結構です」

先生はいつも以上にかしこまった様子でピンクのカーペットの上に正座していた。

「ふむ……美味しいです」

「良かった。でも、先生がお餅好きだったなんて、初めて知りました」
うん。新しい発見。

「いえ、別にお餅が好きというわけではありませんよ」
なんですと。

「かといって、どうしても食べたくて仕方がない状態に昨日突然陥ったというわけでもありません」

「じゃ、じゃあ一体どういうわけなんですか」

わけが分からない。先生は心なしか微笑んでいる。

「そもそも、わざわざ志保さんのところに来ずとも、餅が食べたければ自分で買って食べればいい話ですしね」

ますます分からない。先生が小さくため息をつく。伏し目がちになって、呟くように言った。

「三日夜の餅……ですよ」

はっとして、私は目の前で固まっているリーチ先生を見た。頭の中が混乱している。まさか、そんなはずは。だけど、それって。先生が、言おうとしているのは。

「志保さん、僕は今まで、生きていてもつらいことばかりだと思っていました。今までの自分の恋がうまくいかないのも宿世の因縁と思って、一度諦めたくらいなんです。だから、僕は志保さんで最後

にしようと思っています。志保さんとうまくいかなければそのときは、今度こそ僕は金輪際、恋をするのを諦めます。だから、そのくらいの覚悟で——」

私がお餅の最後の一口を麦茶で喉に流し込んだ。おもむろに立ち上がって、そっと先生の背後に回り込む。そして、先生の真後ろに腰を下ろした。ちよつとだけ、思いきつてみることにする。正座のままの先生の背中に、右頬をぴったりとくっつけた。そのまま少し、体重を預ける。

「志保さん。改めてお尋ねしますが、本当に、教員である僕と、恋仲になる覚悟はおありですか」

恋仲。素敵な響き。頬には先生の白いセーターの肌触り。柔軟剤みたいな匂い。

「はい、もちろん」

びくりと動いた。ふうつと息を吐く音が聞こえた。先生の背中が、もうすつかり熱い。先生はゆくりと振り返り、私の横に座り直して、それから——私の肩を、抱き寄せた。耳元に、息がかかる。

「結婚して、ください。志保さんが、卒業したら」

三日夜の餅。平安時代の婚礼の儀。男性が女性のもとへ毎晩通い、三日目の夜に女性側の家が男性に餅を供する儀式だ。やっぱりそういう意味だったんだ。

「あ、いや、もちろん、親御さんにもご挨拶に行かないといけませんし、すぐについてわけじゃありませんよ。しばらく結婚を前提に、お付き合いさせていたきたい、という意味です」

先生は、今度はべらべらと早口になった。夢を見ているみたいで、でもこれがもし夢でも、きつといつまでも忘れないだろうと思った。そんな夜だった。

「僕、ずっとやってみたかったですよ。密かな夢、というか」

「あははっ。三日夜の餅がやりたいなんて、先生らしい」
「でしよう？」

先生は少し邪魔になったのか、眼鏡を外した。テーブルの上に無造作に置くと、私の肩のところを顔をうずめてきた。

「良かった。そう言ってもらえて。普通、こんなことが夢だったなんて言ったら、馬鹿にされて、変人扱いですよ」

「馬鹿になんて、しませんよ」

「そうでしようか」

「そうですよ」

私は左手で、先生のもじりもじりの髪を、くしゃっと撫でた。「愛しい」って、こういう気持ちを言うのかな。

「志保さんで良かった」

「え？」

「チャペルで泣いてる僕を見つけたのが、志保さんで良かった。僕を理解しようとしてくれる、志保さんで良かった。僕にはもう、志保さんだけが救いです」

先生が泣いている。私の左肩にあごを乗せて。私、今、先生の泣き顔を独り占めしてる。私まで泣きたい。それくらい幸せだと思った。苦しいくらいに、幸せ。こんな時間が、もっとずっと続けばいいと思った。先生の声。先生の匂い。先生の体温。——先生、好き。

私の肩に乗っていた先生の右手が、私の頬を包むように触れる。先生の親指が、私のおとがいへと滑らかに移動して、先生の方へと自然に顔が引き寄せられる——

「いやっ」

間一髪のところだとつさに顔を背けた。

「すみません」

「やっぱり、その、そういうのは、まだ、やめませんか」

「分かっていますよ。教員である以上、教え子のあなたに、在学中から、その、手を出す、ような真似はしませんよ」

先生は慌てた様子で居ずまいを直し、テーブルの上に置いていた眼鏡をかけた。

「そ、そろそろお暇します」

「え、はい」

先生は急に立ち上がって帰り支度を始めた。

「もう九時でしたか。こんなに長居するつもりはなかったのですが」

「あ、まあ、それは別にいいんですけど、あの、近所の学生とかに見られないように、その、お気を付けて」

「ええ、そうですね」

お互いに話しながら、目を合わせることなく、玄関まで来た。靴を履き終えた先生の背中に、声をかける。

「じゃあ、おやすみなさい」

「ええ。……あの」

先生がこちらに向き直った。私は先生の顔を見られない。

「すみません。やっぱり、一回だけ」

先生がまた眼鏡を外す。突然肩をつかまれたと思ったら、先生の胸元がもう目の前にあった。そんなふうに抱きすぐめられたら、とっさに動けるはずがない。感情を押し付けるような、有無を言わせない強い力。先生に、こんなに強い力があるなんて。あごの下に指先が触れて、少し顔を持ち上げられる。私は反射的に目を閉じた。

数秒間、その柔らかい感触を私の唇は感じていた。抱きしめるとき強い力とは裏腹に、優しい触れ方だった。体中を駆け巡る血潮を感じる。私は全身を、震え出しそうなほどの歓喜に耐えながら先生の薄い唇に捧げていた。

先生はふっと私から離れると背を向け、もうこちらを振り向くことはなかった。

「おやすみなさい」

無感情にも聞こえる普段通りの落ち着き払った声が、玄関の薄暗がりには淡々と響いた。先生がドアを開け、一歩、二歩と歩み出す。冬の夜の冷気が入り込んできた。先生は静かにドアを閉める。ドアの向こうでゆっくりとした歩調の足音が遠ざかっていくのが、風の音と交じりながらかすかに聞こえた。先生のいなくなった空間が、先生のいないこれからの時間が、余計に寂しくなる。

「せん、せい……っ」

耳元の低い声。唇の感触。頭の中で何度も反芻する。甘い興奮のあとに押し寄せる強烈な寂しさが、胸を締め付けるように苦しい。

私は玄関の冷たい床に座り込んだまま、しばらく涙も拭えないでいた。

春。とうとう卒業を迎えた。先生と出会った大学ともお別れ。何度も通った研究室。先生が祈っていたチャペル。先生の授業を受けていた教室。ひとつひとつ思い出しては、ちよっぴり寂しくなった。卒業式の二日後。うちのアパートの前に、先生の車が停まる。今日は先生と広隆寺に行くのだ。なんでも、有名な半跏思惟像を私に見せたいらしい。先生はほんとに宗教施設が好きですね、と言ったら、最近はあまり行ってないんです、と言う。

「志保さんがいるから、でしょうね。信仰の対象は、もう志保さん一人で十分です」

「またおかしなこと言ってる。普通に好きって言ってください」

「そういう言葉を連発するのめどうかと思えますよ、僕は。……ああ、でも僕ね、志保さんのことを好きになって初めて、現代に生まれて良かったって、心から思えたんですよ。現代を生きていたおかげで、志保さんと出会えたんですから」

「利一さんは、素敵」

「……照れくさいですね、その呼び方」

「慣れてください」

シートにもたれて目を閉じる。私は利一さんの助手席で、いつまでも優しく揺られていた。



行きつく先にあるものは



土井利美

〈始まりの春〉

「浅葱、どうかしたのか。なんか元気ないけど」

三年二組の教室。冴えない表情を浮かべる親友に、月島青葉は尋ねた。薄茶色の大きな瞳が青葉を見上げる。しばらく浅葱は黙っていたが、一息をつくると教室の外をちらりと見た。行きかう生徒や立ち話をする生徒たちで、廊下は少し騒がしい。

「結局あの子とは話せずじまいで終わるのかなって思ってた」

「ああ、そういうこと……」

青葉の親友である日生浅葱は、二年越しの片想いをしている。正確には拗らせているに近い。相手は、浅葱が入学してすぐに一度だけ会った女の子。一目惚れというものだ。制服のリボンの色が同じだから、一緒の学年だということは分かっている。特徴を聞いたら肩まで髪を伸ばしている明るい雰囲気の子だと言われた。一年生の頃はそれ以上会うこともなかったらしく、誰なんだろうね、ということしか話していなかった。

だが二年生の頃には教室が同じ階だったらしく、授業の合間に少しではあるが見かけることが増えたとかで、話しかけたいけど無理、なんて一人焦っている浅葱の姿をしょっちゅう目にしていた。青葉はそれが誰かは知らないものだから、相談に乗ったり適当に茶化したり、凹む浅葱に寄り添って、

といったように友達としてできることを重ねてきた。それは三年生になった今でも変わることはない。

「ちゃんと話したいか思うわけ」

「そりゃそうだよ。けどできないからこうなってる」

「ああ……」

「何、そのいかにも察しましたみたいな反応」

ふてくされたような表情でそう言うと、浅葱は机に顔を伏せる。

「あれ、月島くん？」

そのとき、声が降ってきた。青葉が声のするほうを見ると同時に、浅葱も頭を上げる。セミロングの女子生徒と、ショートヘアの女子生徒が二人の側に立っていた。

「あ。師星さん、だよね？ 同じクラスなんだ」

青葉はセミロングの女子生徒に声をかける。師星水穂は明るい笑顔で言葉を返した。

「そうそう、まさか一緒になれると思ってなくてさ、よろしくね」

その声は心なしか上ずっているようにも聞こえた。青葉もそっと微笑み返すと、もう一人の女子生徒にも声をかける。

「よろしく。つか東雲も一緒なんだ」

「あれ、千草と月島くん知り合いなの」

「違う。中学の同級生ってだけ」

「それ、違うっていうか……？」

そうやって、青葉はふと浅葱に視線を向ける。だが目の前の浅葱はというと水穂を前に硬直していた。その様子を見て、そういうことか、と青葉は自分の中で答えを導き出す。動かない浅葱の頭に、青葉は手を伸ばした。

「どした、固まってんぞ」

言いながら、頭を少しだけ撫でる。すると浅葱は我に返ったが、どこか浮ついたような様子なのは変わらない。

「……二人とも仲いいんだね」

それとは対照的に、水穂の表情は困惑気味だった。千草は変わらず冷静な顔をしている。青葉は何事もなかったかのように言葉を返した。

「高校入って初めてできた友達だから。仲いいやつは何人もいるけど、三年まで同じクラスなのはこいつだけだし。一緒にいるのが当たり前になってるっていうか」

「そうなんだ」

「師星さんは浅葱と会うの初めて？」

その言葉に浅葱が緊張の面持ちになったのを、青葉は見逃さなかった。水穂は少し考え込む様子を見せると、浅葱の顔をじっと見つめる。

「なんとなくだけどどこかで会ったような気がするんだよね……」

「学年同じなんだし、選択の授業が重なってたりとかしたんじゃないの」

千草の発言に、水穂はそうじゃないと首を振った。

「なんかそういうのとは別だと思う、あたしの勘違いかもしれないけど……。だめだ、分からない」

「まあ、そのうち思い出すんじゃない」

一人頭を抱える水穂に、千草はやりわりと言葉を返す。そうだよね、と水穂は改めて浅葱に向き直った。

「師星水穂です、よろしく」

「……日生浅葱です、よろしく」

「浅葱って名字じゃなくて名前だったんだ。珍しい名前だね、どんな字書くの」

「浅瀬の浅に葱。名字じゃないんだっていうのは……よく言われる」

そんなやり取りをしていたら、始業式を行うので生徒は体育館に集まるようにとのアナウンスがかかった。

クラス替えと始業式、そして入学式が終わってしまえば、咲いていた桜も散りはじめ、いつもの日常が動き出す。

「今日英語の時間に担当の先生がいきなり熱くなって大変だったよ。受験乗り越えるために一緒に頑張らましようって」

「まじか。そっちが熱くなってどうすんだよって話だな」

「一応俺ら受験生だし、仕方ないよ」

三年生になったこともあって、勉強や受験の話も少しずつするようになった。とはいっても数学が分からない、文法が難しい、横文字の名前が覚えられないといったような、これまで試験前にしていた話の延長のようなものである。まだ春先ということもあって、正直なところ受験というもののへの実感がわいていなかった。

「勉強のこと考えると気力削られるな……。なんか楽しいことないかな」

「楽しいこと……。そういえばもうすぐ遠足の時期だっけ」

この学校では四月末に遠足が行われる。それが近づいているせいか、教室全体の雰囲気はどことなく浮かれていた。

「親睦を深めるためって言うけど、三年にもなるとつるむメンツも固定になってくるよな」

「そんなもんだよ。俺もあんまり冒険しようとは思わないし」

「けどそんなこと言っていると、いつまで経っても師星さんと近づけないんじゃないの」

「う……」

浅葱はうなだれた。あれから水穂とはほぼ言葉を交わしていない。昼休みになると、水穂と千草が自分たちの近くで昼食をとっており、時々青葉もその二人の話に混ざることがあった。だが浅葱はというと元来の小心さが邪魔をしてきて、何か話そうとしてもそれにかき消されてしまうらしい。

「よく話してるところ見るけど、青葉は師星さんとは仲いいの」

「二年のときに学園祭で実行委員やったただだよ。つか俺のことは今どうでもいいんだよ、お前の話

なんだから。俺もいるんだし、何か話そうと思ったら頑張れば話せるだろう」

「割り込みは印象悪いかどうかいろいろ思っちゃうんだよね。それに俺が話振って場がシケたら立ち直れる自信がない」

「考えすぎじゃね……」

青葉は黙り込んだ。この状況をどうにかしないと、浅葱は水穂と仲を育むための一歩すら踏み出せない。告白なんてもつてのほか。なんとかしてやれないかなあと思っていたとき、近くを通りかかった水穂が青葉に声をかけた。

「あ、月島くん、この間言ってたCD持ってきたよ」

「まじ？」

「うん、お昼に渡す。ねえ、さっき二人で何話してたの」

思いがけぬ水穂の発言に、青葉は浅葱を見ると答えを促す。だが当の本人は無理とでも言うように首を振っていた。しばらくお互いが無言の攻防戦を行っていたが、折れたのは浅葱の方だった。

「えっと……。遠足の話だよ。楽しみだねって」

不安そうに返事をする、浅葱はすぐに青葉に視線を向ける。話している間、目は泳いでいたものの、伝えられたからよし。笑ってオツケーサインを出すと、浅葱は安堵の表情を浮かべた。それを聞いて、水穂は青葉に話を振る。

「そういえばもうそんな時期だったね。あたしは千草と一緒に動こうと思ってるんだけど、月島くんたちもどうかかな？」

水穂の誘いに、青葉は思わず浅葱と顔を見合わせた。きよんとした浅葱に、青葉は少し微笑む。なんとかしてやれるチャンスが巡ってきたのだから。

「うん、いいよ。浅葱も一緒だけどそれでもいい？」

「うん、大丈夫」

黙ったままの浅葱に対し、水穂は変わらず笑顔を向けていた。

遠足当日。目的地に向かうバスの中、おやつ交換をしたり音楽を聴いたり、生徒たちは思い思いに過ごしていた。

「月島くん、これ食べる？」

通路を挟んで向かいの席にいる水穂が、ミニサイズのクッキーを青葉のほうに手渡す。

「え、俺お菓子とか何も持ってきてないよ。いいの？」

「うん、いいよ」

「まじかありがと。これ後で何かで返さない」と

「え！ほんとに？」

「月島そういうことするタイプなんだ」

「ほっとけ」

水穂の隣に座っている干草の言葉をはぐらかしつつ、青葉はクッキーを口に入れる。隣に座る浅葱に視線を移すと、彼は窓ガラスに頭をくっつけたままぼんやりとしていた。少々顔色がよくない。

「お前顔が死んでるぞ。もしかして酔った？」

その問いに浅葱が言葉を返すが、声にも表情にも覇気がなかった。

「酔ってはない。昨日あんまり寝てないからちょっとしんどいだけ。寝たら治る」

「大丈夫かよ。緊張してんのか」

「するに決まってんじゃない。一応青葉にも責任はある」

「どうしてそうなる」

そうは言ったものの、水穂と一緒に回る約束を取り付けたのは青葉だ。浅葱にとってはそのせいで不本意な緊張に襲われているのかもしれない。

浅葱は気だるげな表情を浮かべたまま、もう一度窓ガラスに頭をくっつけると瞳を閉じた。その様子を見た青葉は、浅葱に声をかける。

「寝るなら俺の肩使う？」

「それだと青葉が動けなくなるでしょ」

「俺は別にいいよ。それに、高さ的にも丁度いいんじゃない」

「遠回しにデイスってない？」

「なんでだよ」

文句まがいのことを言いつつも、浅葱は青葉の肩に頭を預ける。癖がかった薄茶色の猫毛が、青葉

の首元を掠めた。しばらくして、規則正しい息遣いが聞こえてくる。

「……寝たか」

独り言のように呟くと、隣から水穂が言葉を投げかけてきた。

「今日行く場所、自然が綺麗らしいね」

「展望台から海が見えるんだっけ」

青葉は顔だけ水穂の方に向き直ると、話をする姿勢を取った。

「確かそうだったはず。あと恋人の聖地があるって聞いたけど」

「最近そういうの多すぎない？ いろんな所で聞いている気がするんだけど」

「そう？ けどそこで告白したりされたりしたらロマン溢れるよね。成功すれば尚更」

「師星さんそういうの好きなの？」

青葉が尋ねると、水穂は一瞬黙り込んだ。少し視線を逸らし、また言葉を紡ぎ直す。

「好きな人にやってもらえたら嬉しいって思うかな」

「そっか。叶うといいね」

「……うん」

そう言った水穂の頬は、少しだけ赤く染まっていた。

広がる自然の中、アイスを片手に、水穂と青葉は話し込んでいた。

「アイス奢ってもらっちゃってごめんね」

「さっきのお返しだと思って」

「まさか安物のお菓子がこれに化けるとは。ね、向こうの海見える場所にベンチあるからそっちで食べようよ」

「いいけど、浅葱と東雲は」

青葉が尋ねると、その会話を聞いていた千草が横から言葉を挟んだ。

「先に行つてなよ。あたしは後から行く」

「俺もそうする」

「二人ともそう言ってるし、行こうよ」

はしゃぐ水穂と呼ばれ、青葉は彼女の方に向かう。その場には、浅葱と千草が残された。

（……楽しそうだなあ）

もしも青葉のいる場所に自分の姿があったら、幸せなことこのうえないだろう。そう思うと頬が緩みかけるが、同時に自分には高嶺の花だと溜息をつきたくもなる。そして穏やかに談笑する二人を、羨望の眼差して見てしまう。それぞれ違った感情が、浅葱の中を駆け回っている。情緒不安定か、と浅葱は一人苦笑いを浮かべた。

「なんつー顔してんのよ」

だが、隣に千草がいることを忘れていた。浅葱の肩が跳ねる。自分の方を見る千草の表情は、冷たい。

「……俺、どんな顔してた」

「さあね。それより日生はアイス買わないの」

「……なんか食べる気にならないからいいや。東雲さんは」

「あたしは飲み物買ったから。それなら動くか、ちよっと聞きたいこともあるし」

千草は売店の外にあるテラス席の方に動き始める。浅葱も慌てて彼女を追った。

テラス席やその近くのベンチは埋まっっていて、座れそうにない。千草と浅葱は、テラス席と売店を繋ぐ大きな窓の横にもたれかかった。売店の白壁が太陽の光を反射している。

「日生って水穂のこと好きでしょ」

「えっ、なんで分かったの」

なんの脈絡もなしにそう尋ねられ、浅葱は視線を泳がせる。冷静な表情を崩すことなく、千草は続けた。

「普段の水穂に対する態度からして怪しいなって思ってたんだよね。けどやっぱりビンゴだったか。なんというか、分かりやすい」

浅葱は何も言わず足元に視線を移した。変に意識してしまっ、話すことも視線を合わせることもままならないから、分かりやすいと言われてしまっても無理はない。

「けど、そのわりには自分から動こうとしないよね」

思わず浅葱は顔を上げる。全てを見透かしたような千草の視線が痛かった。

千草の言うことは当たっている。一目惚れをきっかけに今まで片想いし続けてきたが、想っている

だけでは何も始まらない。自分を好きになってもらうには行動で示すのが大事だということは重々分かっている。誰かに取られてしまっってからでは遅い。だが彼女を目の前にすると、何もできなくなっってしまう。

「根性無しなのは俺が一番分かってるんだけどね」

そう言っ浅葱は自嘲気味に笑う。千草はそれ以上何も言おうとしなかった。浅葱もこれ以上は何も聞かれなくなかった。

(違う……。開き直ってる場合じゃない)

根性無しだから、ヘタレだから。それを盾に逃げ続けているのが、惨めに思えた。

そのとき、頭の奥に痛みとも重みとも取れる何かと、立ちくらみを感じて浅葱は思わずしゃがみこむ。それに気づいた千草もその場に座り、浅葱に声をかけた。

「どうかした」

「いや……」

浅葱は返事をする、きつく目を閉じる。それが落ち着くのを待っていると、足音が近づいてきた。同時に聞き慣れた青葉の声が響く。

「お前からここで何してんの」

「何もしてないよ。そっちこそなんかあったの」

「いや二人しておっせーなと思っただけ……っ、浅葱なんかあったのか」

そう言うと、青葉は千草の隣に目を向ける。座り込んだままの浅葱の肩に触れると、虚ろな瞳をし

た浅葱と目が合った。

「お前大丈夫かよ、顔色悪いぞ。水飲んだか」

「多分大丈夫……」

浅葱はそう言うが、どう考えても大丈夫には見えない。青葉は浅葱の頬にそっと右手を触れさせる。「あれ、月島くんここにいたの」

そこに、青葉の後を追ってきたであろう水穂が合流した。状況がうまく把握できていない水穂は、千草に尋ねる。

「何かあったの？」

「体調悪いんじゃないかって。月島、どうなの。先生呼んでこようか」

「その方がいいかも。東雲行ってくれんの？」

「あたしも行こうか？」

「いい。一人でどうにかなる」

水穂の答えを待つことなく、千草は走り出す。残された水穂は、浅葱の横に座り込んだ。浅葱を挟んだ隣では青葉が浅葱の鞆を探っている。

「何してるの」

「飲むもの探してる。あと冷やすものあればいいんだけど」

「あ、あたし持っているよ。ちょっと待って」

水穂はそう言って、鞆から凍らせたペットボトルを取り出す。

「日生くん、これ首にあてておいて」

浅葱はそれを水穂から受け取る。痛いほどの冷たさが、熱を持った首筋に触れた。同時に鞆から飲み物を探り当てた青葉が、ボトルの蓋を開ける。青葉はそれを浅葱に手渡した。

「飲んどけ」

浅葱の乾いた喉をスポーツドリンクのほどよい甘みが走り抜けていく。飲み終わったボトルを青葉に返すと、浅葱は溜息をついた。

「ベンチ空けてもらうか？」

「ううん、大丈夫」

浅葱はぼんやりと空を見つめる。青葉も特に何か言うわけでもなく、水穂も何か考えているようで、話そうとしない。微妙な空気になりそうだったが、浅葱も今の状態で話題を振るのは億劫だった。だがそれは要らない心配だったらしい。

「……思い出したかも」

突然水穂が声を上げる。浅葱に視線を向けた水穂の目は、真剣なものだった。浅葱も水穂に視線を向けると、彼女に尋ねる。

「何を？」

「あたしの記憶が間違ってたならなんだけど。日生くん、前にもこんなことあったの覚えてる？ 確か、通学の電車で」

「……覚えてるよ」

忘れるわけなんてない。口に出しては言わないが、浅葱は心の中でそう思っていた。

まだ高校に入学したばかりの頃。満員電車の中で人に潰されかけ、気分が悪くなった自分を助けてくれたのが水穂だった。途中の駅で彼女が強引に降ろしてくれなかったら、大事になっていたかもしれない。去り際に駅の救護室で、無理はしないでねと言った水穂の笑顔が、今でも胸に焼き付いている。

「あの時はありがと。ずっと言えてなかった」

「どういたしまして。もうだいぶ前の話だけどね」

「今もなんだかそのときみたいになってるね……。迷惑かけてばっかだね、俺」

「こういうときはお互い様だよ。気にしないで」

あの日と変わらない顔で、水穂が微笑む。あの日と同じ、優しくてあたたかくなるような感覚が、浅葱の胸に広がっていった。

(ああ、やっぱり俺、師星さんのこと好きなんだな……)

怠さと急に襲ってきた眠気で頭がうまく働かない中、浅葱は改めてそう思っていた。それと同時に、無意識に何かを口走る。

「そのときから俺……」

「何？」

「……ごめん、なんでもないや……」

浅葱は目元を軽くこする。そのまま視線を横に向けると、担任と共に戻って来た千草の姿が目に入った。

「あとは自分らに任せてあたしらは楽しんでって、先生が言った」

浅葱の姿を見送った後、千草は淡々と言った。その言葉に甘え、三人は海と街を一望できる展望台へと向かうことにした。

春の陽射しを浴び、水面が眩しく輝いている。ほんの少し暑さを含んだ風が、頬を掠めた。千草は手をぱたぱたと動かしながら、溜息をつく。

「あっつ。あたし中にいるから、出るときに呼んで」

千草が行ってしまい、展望台には水穂と青葉の二人が残された。遠くを眺める青葉の横顔を、水穂は見つめる。その表情は、物思いにふけっているようにも、後悔しているようにも見えた。

「月島くん、雰囲気が悪くなってるよ」

「あ、悪い……。ちょっといろいろ考えてた」

「いろいろ？」

「まあ、浅葱のことなんだけど。ここ来る前からしんどそうにしてたし、気づいてやればよかったなって。昨日あんま寝てないって言ってたし、予兆はあったっつーか」

「……そっか」

そのまましばらく二人とも黙り込んでいたが、それを打ち破ったのは水穂だった。

「ずっと思ってたんだけど、月島くんと日生くんっていつもそんな感じなの」

「え、そんな感じって」

水穂の質問の意図が分からず、青葉は思わず質問で答えを返してしまった。彼女は少し考える素振りを見せたが、しばらくして青葉の方に向き直る。

「あたしの勝手なイメージかもしれないんだけどね。月島くと日生くんって友達同士だから仲がいいのは分かるんだけど、それにしてお互いの距離がすごく近いなって思ってる。男の子ってそういうの、あっさりしてると思ってたから」

「ああ……。それ、他の友達にもよく言われてた。お前は浅葱に甘すぎる、とかね。そう言われるけど、浅葱のことになるとなにかほっとけないんだよね。仲いいからっていうのもあるとは思ってるけど、俺の中ではそれが普通になっちゃってるからさ……。たまたま危なっかしいし。傍から見たらやっぱ変なのかな」

「変かどうかはあたしには分からないけど……。それだけ仲がいいってことでもあるよね」

「そういうこと。仲のよさなら誰にも負けない自信はある」

「何それ」

水穂は小さく笑うと、手すりに背中を預けた。その姿勢のまましばらく何か考え込んでいたが、やがて一人呟くように言った。

「あたしは日生くんみたいになれるのかな」

その言葉に、青葉は水穂を見つめる。脈絡のない発言に、驚いてしまった。

「え、浅葱みたいになりたいの？」

「ううん、そういうことじゃないけど……。そうなのかな。あたしも頑張らなきゃいけないなって

思った」

「……そう。俺にはよく分からないけど、頑張れ」

決意を固める水穂に対し、状況が呑み込めない青葉は、ただ彼女を励ますことしかできなかった。それぞれの感情を胸に、全ては動き出す。それが行きつく先は、まだ誰にも分からない。

〈動き出す夏〉

「あたし思うんだけどさ」

放課後の図書室は適度な涼しさが保たれていて快適だ。教科書に目を向けていた千草は、水穂の声に少しだけ視線を上げた。

「仲良くなる行程とかいろいろすっ飛ばして告ったほうがいいのかな。ちまちま攻めていってももらちが開かない気がしてきた」

「いや、知らないよ。それをあたしに聞くかね」

「まあそう言わず。脈はなきにしもあらず、だと思うの」

水穂もまた、青葉に恋心を抱いていた。きっかけは二年生の秋、学園祭実行委員で一緒になったこと。穏やかで、さりげなく見せる気遣いや優しさに心を奪われた。半年後、三年生になって同じクラ

スだと知ったとき、振り向かせてみせると己に誓ったが、今のところは不発に終わっている。何せ青葉が水穂の想いに気づいている様子がないからだ。

「ねえ千草、もう一つ聞きたいことあるんだけどさ。中学校のときの月島くんってどんな感じだった？ 主に恋愛模様」

「あたしそこまで月島のこと知らないんだけど」

「分かるところだけでいいからさ、お願い」

水穂に手を合わせられ、千草は頰杖をつくと中学時代の記憶を辿った。

「あんな感じだから人気あったとは思うよ、顔も性格も悪くないし。付き合ってる人がいるっていう話はこれといってなかったけど、男友達という方が落ち着くっていうのは聞いたことあるかな。だから今は日生という方が楽しいんじゃない。水穂とはそれなりに仲いいし、女子に対して無駄にガード固いとか、女子そのものが苦手とかいうわけではないと思う」

「男の子同士だし、そういうものなのかな」

二年間一緒にいる同性の友人と、知り合って半年ちょっとの異性の水穂では気心の知れ方もかなり違うのは予想できる。同じ土俵に上がるのがおこがましいくらいだ。だが友情と恋愛は別々の感情。

浅葱の存在を越え、新たな関係を築き上げるために走り続けるしかない。

「こんなこと言っても仕方ないか。頑張ろう」

「勝算はあるの」

「一応どうするかは決めてるよ。もうすぐ夏休みだし」

いろいろと考えているのは女子だけではない。男子もまたそうである。

「師星さんとは最近どうなの」

青葉に尋ねられ、浅葱はシャーペンを持つ左手を止めると正面を見据えた。

遠足の一件があったからか少しだけ浅葱も水穂との距離を縮めたようで、時折青葉と水穂が話しているところに混ざることが増えていた。とはいっても未だに緊張はするらしく、受け答えはまだまだ拙い。平然としている青葉が羨ましいと愚痴することもあり、最近浅葱がその手の話をしてきたらとにかく慣れろとしか言っていない。青葉は眼鏡を外しながら言葉を続けた。

「夏だしそういう時期かと思って」

「特に何もないかな」

「けど夏っていろいろあるし、なんかできそうだけどな」

「いや、俺ら受験生だよ。もうすぐ夏休み入るけど、遊んでる暇はないと思えって先生言ってたかった？」

「だからって休み中勉強ばっかしてられるか。たまには遊びたくもなる」

「だけどがつつりは無理でしょ」

高校生の夏は浮かれるものだが、三年生ともなるとそうも言っていられない。夏を制する者は受験を制す、という言葉がある。それだけ夏は受験生にとって大事ならしい。青葉たちもその局面を迎えていて、休日が模試で埋まることも増えてきていた。夏休みに入ってから補習や模試が控えている。

「例えば勉強会とか？ 図書館とかファミレスで集まって一緒にやるの」

「ほう、誘ってみればいいんじゃない」

「そこまで漕ぎつけるのが大変だよ……」

「それは腕の見せどころじゃね。なにに等しいけど」

「いや、確かに腕はないけどその言い草はひどくない？」

「前半自信持って言うことじゃないだろ」

勉強そっちのけで考え込んでいると、部活終了を告げる放送が校内中に流れる。そそくさと教材を鞆に片付け、二人は教室を出た。

「自転車取ってくる」

「分かった」

浅葱を見送ると、青葉は駐輪場へ向かった。鍵を出そうと制服のポケットを探っていると、後ろから声がかかる。

「あれ、月島くんいたんだ」

そこには水穂と千草の姿があった。声をかけようとする前に、千草は青葉の脇を通り過ぎていく。彼女もまた、自転車を取りに行ったのだろう。

「俺に何か用事？」

青葉が水穂に尋ねると、待つてましたと言わんばかりに答えを返した。

「ちょっと聞きたいなって思うことがあって」

「どうかしたの」

「今月末に、うちの近所で大きいお祭りがあるの。露店もたくさん出るし、花火も上がるらしくて。よかったら行かない？」

「花火か、いいな。勉強ばっかしてんのもあれだし」

「そうそう、少しは息抜きも必要だと思ってるんだよね。それでどうせならと思ってる」

「確かに……あ」

さっきまで浅葱と話していたことと今の話が噛み合ったような気がして、青葉は言葉を止める。それはまた巡ってきたチャンスとも言えた。

「それってさ、他に誰か誘ってもよかったですか？」

「あ……。あたしとしては二人がいいかな、なんて思ってたか」

困ったように笑う水穂に、青葉は何も言うことができなかつた。ただ単に自分が意識し過ぎているだけなのかもしれないが、彼女の「二人」という言葉が示す意味はなんとなく想像がついてしまう。しかも誘ってきたのは親友の片思い相手。浅葱の気持ちを知っているからこそ領けないし、二人でいたという話が浅葱の元に届いてしまったら気まずくなるのは目に見えている。夕陽の照らす駐輪場に、沈黙が流れた。

「あ、けど月島くんが誰か誘いたいならそれでもいいよ」

その突破口になったのは水穂だった。さっきと同じ、困ったような笑顔。歯切れの悪い青葉に気を遣っているのが見え透いていた。

「俺はできるならその方が嬉しいかな……。師屋さん本当にそれで大丈夫？」
「月島くんがそうしたいならあたしはそれに合わせるから。それに、人数多い方が楽しいかもしれないでしょ」

本音が建前かは分からないが、その気になってくれているならここは素直に乗った方がいい。青葉は眉根を下げる。

「なんかごめん、いろいろと。それじゃ、浅葱誘ってもいいかな」

「うん、いいよ。お祭り楽しむためにも模試と補習頑張ろうね」

「そうだな。悪いけど浅葱待たせてるから俺もう行くな、それじゃ」

「また明日ね」

水穂は青葉の後ろ姿を見送る。それと同時に、自転車を押して戻って来た千草と目が合った。水穂はさっきまであったことを千草に話す。

「ほんとにそれでよかったの」

「うーん、分かんない。でも月島くんがそう言うなら、無理はさせたくないし。まずは楽しんでもらいたいもん。けど月島くんの困った顔見れたからそれはそれでいいんだけど」

「どういことよ」

「だってこれまでそういう顔されたことないから……」

「ああ、そう……」

視線を逸らし口ごもる水穂に、千草はやれやれとでもいうような表情を浮かべる。遠くのスピ

カーから、完全下校五分前を知らせる放送が響いていた。行くよ、と水穂に告げ、二人は歩き出す。

「……ねえ千草、お祭り一緒に来てくれる？」

「そう言うと思った。いいよ、行ってあげる」

「ほんと？ よかった、ありがとう。この借りは必ずどつかで返すから」

「それは別に要らない」

ほっとした様子の水穂に、千草も笑顔がこぼれるのだった。

迎えた月末。午前中に補習が終わり、一度解散して夕方に再び集まることになった。そういったわけで青葉は今、浅葱と共に電車に揺られている。

「ねえ、ほんとに俺一緒に来てよかったわけ？」

混雑気味の電車の中、浅葱は扉の近くに寄りかかっている。遠足のときと違って体調は良好だと言っていたが、その表情は冴えないものだった。

「ちゃんと頼んだしどういかなるって」

「だといいけど……」

「そう深く考えるなって」

「けどいろいろ気にしちゃうよ。それに今日私服だし、服装変じゃないかなとか」

「別におかしかなくね。明るい色映えてるし、お前っぽくていいと思う」

「俺は青葉みたいな服が着こなせる男になりたいよ、なんでそんな黒似合うわけ？あと身長あるのほんと羨ましい。ちょっと分けて」

「いや、身長は今関係ないだろ……」

適当にやり過ごしていると、電車が待ち合わせ場所になっている駅のホームに滑り込む。

「着いたっぽいな、行くか」

到着したホームは、人々の喧騒に包まれている。隣で浅葱が独り言のように呟いた。

「どうしよ、なんか緊張してきた」

「まあどうにかなるって思え」

「ちょっと、頭触らないですよ！髪ぐしゃぐしゃになる！」

「……あんたら何してんの。人が多い所で」

後ろから冷めた声が聞こえて振り向くと、呆れた表情で二人を見る千草がいた。

「こいつの景気づけ」

「混んでるんだからさっさと行きなよ、全く」

「悪いって。あ、そうだ東雲。ちょっと話したいことがあるんだけど」

話す前に、青葉は浅葱を先に行くよう促す。浅葱は何が起きてるのともいうような表情を浮かべていたが、改札を出たところで待ってるからと言い残すとホームの階段を降りていった。残された千草と共に雑踏を歩きながら、青葉は言う。

「手伝ってほしいことがある。浅葱のことなんだけど、どうにかして師屋さんと二人きりにできないかなって思ってたさ」

「ああ……。確か日生は水穂のこと好きなんだっけか。二人にして告白させようって？」

「そういうこと、察しがよくて助かった。祭りの雰囲気流されてくれればいいんだけどさ、正直心配ではあるんだよ。個人的にだけ見届けたい気持ちもあるし……」

「過保護か」

「ほっとけ。けどそういうことだから、ちょっと協力頼めないか」

真剣な目で頼み込む青葉に、千草は、全く、と呆れた様子で呟く。

「分かった。その代わりなんか奢ってよね」

「それぐらいなら安い。交渉成立だな」

人で溢れる改札の出口には、既に到着していた水穂の姿があった。隣には浅葱もいる。

「お待たせ。水穂、浴衣にするんじゃないかったの」

「あただけ着るの嫌だったからやめた。そのかわり初めて着る服にしてみたよ」

パステルブルーのワンピースと、白いカチューシャ。毛先が緩く巻かれているセミロングは、普段のストレートとは少し違う可愛らしさを魅せるものだった。みんな揃ったし行こうよ、とはしゃぐ水穂の声はいつもよりも明るい。

「で、お前はなんだって下向いてんだ」

知らないうちに隣に来ていた浅葱に、青葉は尋ねる。顔を上げたその瞳は、水穂の後ろ姿を見つめ

ていた。

「師星さん、普段よりもだいぶ雰囲気が違うね」

「何。もしかして、可愛いなーとか思ってたりするん」

そう言う背中の中に一発拳が入る。恥ずかしいのか照れているのか、唇を噛む浅葱の様子がなんだかおかしくて、それ以上からかうのはやめておいた。

「お待たせ、月島くん」

連なる屋台の中、水穂と青葉は人混みを歩いてきた。スプーンでかき氷を崩す水穂に対し、青葉はフライドポテトをつまんでいる。

「なんでか分からないけど、かき氷ってどうしても買っちゃうんだよね」

「まあ、夏って感じするし。つか浅葱と東雲はどこ行ったんだ」

「千草は何があるか見てくるって言ってたけど、日生くんは分かんない」

「まじかよ。迷子になってなきやいいけど」

青葉は溜息をつく。そんな彼に水穂は何も言わず、かき氷を一口すくった。

夕暮れの空に夜の色が混じり始め、人々のざわめきと花火の号令音が響く。しばらくお互いゆつくりと歩を進めていたが、やがて水穂が青葉に声をかけた。

「月島くん、後で――」

「あれ、あそこいるのって浅葱と東雲？」

言いかけたそれは青葉によって遮られる。目線の先には風船釣りの屋台があり、脇には浅葱と千草が立っている。浅葱の左手の中指には、青い水風船がぶら下げられていた。

「合流できたな」

「そろそろ花火始まるし、場所取りに行かないとまずいんじゃない」

「そうだね、急ごうか」

「ああ……。浅葱それどうしたんだ」

「ちょっとやりたくなっただけだよ。釣れなかったけど」

「……そっか」

微笑んだ浅葱に、青葉も自然と頬が緩む。思わずその頭に手を伸ばしかけて、やめた。

少し歩いていると、千草の足が止まる。それに続くように全員が立ち止まった。

「ごめん、あたし飲み物買うの忘れたから先に行つて」

千草の目線は、青葉を捉えている。そういうことか、と青葉は思った。

「あー、俺もついていいか？ さっきポテト食ったから喉渇いた」

後半は事実だが、驚くほどの白々しさに思わず笑いそうになる。だが言い出したのは青葉本人なのだから、仕方がない。

「分かった。水穂と日生は場所取つといて」

「頼んだぞー」

青葉は千草と共に離れようとするが、何故か視線を感じる。その犯人は浅葱だった。不安そうにこちらを見つめる瞳に、後ろ髪を引かれそうになる。

だがこれも親友のため。青葉は彼に背を向けて歩き出した。

河川敷には、もう既に多くの人が集まっている。空いている場所に、水穂と浅葱は腰を下ろした。

空を見つめる水穂の横顔は、いつになく優しく輝いているように見える。それをまともに見ることができず、浅葱は持っている水風船を手ではじきながら水穂に声をかけた。

「花火、もうすぐ始まるかな」

「多分そろそろだと思うよ」

「楽しみだね」

「今年はどうなのかな。にしても月島さんと千草どこまで行ったんだろ、遅くない？」

「そのうち戻ってくると思うよ」

今の浅葱には、二つの感情が入り混じっていた。一つは緊張しすぎて気まづいから早く二人とも戻ってきてほしい。もう一つは反対に、この時間が続けばいい。自分の我儘さに、呆れなくなってしまう。

間が持たないから何か言おうと言葉を探すが、丁度いいものが見当たらない。ここは無難に今日あったことでも話しておこう、と浅葱は口を開く。

「今日もそうだったけど、模試と補習ばっかで大変だよ」

「あたしたち受験生だもんね。けどこういう日くらいは浮かれたいなって思うよ」

「青葉が似たようなこと言ってた。ずっと勉強ばっかしてられるかって」

「月島くんそういうこと言うんだ。真面目そうなのにな」

「ああ見えて、楽しいこととか好きだから」

水穂の反応は悪くない。話題としては間違っていないかな、と浅葱は息をつく。ぐるりと辺りを見回すと、所々で男女のペアが目に入った。

「これ、カップルで来てる人も多いのかな」

「お祭りだからそれもあるかもね。あたしもいつかそうなれたらなって思う」

その言葉に、浅葱の胸の奥が小さく痛む。夢見る少女のような笑顔が、空を見つめていた。

ここで聞かないでいつ聞くんか。心の声が、鼓動となって打ち付ける。ありったけの勇気を振り絞ると、浅葱は水穂の横顔をまっすぐ見つめた。

「……師星さんは、今好きな人いるの」

我ながらよく聞いたと思う。しかも一切嘯むことなく。自分で自分を褒めたいくらいだ。

水穂は驚いたような顔で浅葱を見つめていたが、やがて少し頬を染めると俯いて、言った。

「……いるよ」

喉の奥が大きく鳴る。胸の鼓動はさっきよりも速く、うるさい。そしてなにより、頬が熱い。気が気でない感情を押し殺し、浅葱は尋ねる。その中には興味と、一縷の希望が混ざっていた。

「そうなんだ……。どんな人？」

だがすぐに、浅葱はそれを後悔することになる。水穂は少し恥ずかしそうに答えた。

「……日生くんになら言ってもいいかな。日生くんが一番近くにいる人だよ」

「……それって、もしかして」

言葉が出てこない。可能性をかき消そうと思っても、できなかった。浅葱の一番近くにいる人。それはもう、いつも一緒にいる親友しか浮かばないわけで。

「……うん。月島くん」

遠くで大輪の花が、夜空を鮮明に彩っていた。

河川敷の外れに位置する小さな神社の石段に千草は座っていた。目の前に、ジュースの缶がさし出される。それを受け取ると、彼女は尋ねた。

「これでよかったわけ」

隣に座った青葉は、持っていたラムネを開けながら言葉を返す。

「なんつーか、これでちょっとは動く気になるかなって……。ほんと世話が焼ける」

やれやれといった表情の青葉だが、その表情は満更でもなさそうだ。

「これで何もなつてなかったらどうすんの」

「まあいつものお前だよなって言って終わりかと」

「それだからあんたは日生に甘いって言われんのよ」

「ほっとけ」

言いながら、青葉は思いを馳せる。今、親友はどうしているだろうか。うまくやれているだろうか。いい報告なら聞いてやりたいし、悪い報告なら慰めてやりたい。そう思うのは自然なことだと思うが、どこかに何か引っかけかかっているような気がした。

「なあ、ちょっといいか」

青葉は千草に声をかける。何、とそっけない言葉が返ってきた。

「もしもの話なんだけど、浅葱と師屋さんがくっついたら、俺と浅葱が一緒にいられる時間ってどう考えても減るだろうな」

「恋人ってそういうもんだからね。付き合い始めた最初の時期とか、すごい浮かれて無駄に一緒にいたりするし。のろけられるこっちの身にもなつてほしいわ」

「東雲、今はそういう話してないんだけど」

「ああ……。なんだったつけ。日生という時間が減るって話だっけ？ けど月島と日生は友達同士なんだし、大丈夫でしょ」

「そう……。だよな。友達だし」

友達、というよりも、親友。過ごしてきた時間は水穂よりも長い。だが周りの関係が変化することで、自分たちに影響が出ることも十分考えられる。これがきっかけで浅葱との関係に変化が起きてしまったら、自分はどうなるのだろうか。

「どうしたの、いきなり。何をそんなに傷心してんの」

煮え切らない青葉に、千草は尋ねる。青葉は黙っていたが、やがて胸の内を明かした。

「俺はあいつの恋のことは応援してる。だから二人がくっついたらそりゃ嬉しいよ。けど、そうなる俺と俺という時間って減るわけでしょ。友達と恋人で、向ける表情だって全然違うだろうし。俺は浅葱の親友っていう立場がある。二年ちよい一緒にいるから。急に浅葱が遠くなるんじゃないかなとか、俺の方があいつのことよく分かっているのになとか。そう思うと、少し複雑になってきたっていうか。なんなんだろうなこれ。嫉妬なのかな」

どこか危なっかしくてつい世話を焼きたくなってしまふ、少し気弱でヘタレな親友。誰よりも近くで彼を見てきた。一緒にいて、いろんな話をして、恋の相談に乗って、たまに愚痴られて、時々意味なく頭を撫で回しては怒られて。でも、それが自分にとっては当たり前のことだった。

考えを巡らせる青葉に、千草は変わらず淡々と答えを返す。

「月島って、仲のいい友達が他人と仲良さげにしてたら嫌なタイプだったりするの」

「いや、そんなことはないけど。そんなんでどうこう言ったらキリがないんじゃないかね」

「今のあんたがそれを言うかね、まあいいけど。何故かそう思うと」

「そういうこと。浅葱だから、なのかな」

千草はジュースのプルタブを開けると、青葉のことを横目でちらりと見た。

「……日生のこと、好きなんだね」

「……まあな。誰にも負けない自信はある」

「そうやって素直に言われるとこっちが恥ずかしいんだけど」

「ほっとけ。事実なんだから仕方ないだろ」

「そうかもね。けど、好きにもいろいろあるからさ」

千草のそれは意味深な色を含んでいた。その意味がよく分からず、青葉は黙り込む。少しだけ間が空いたが、不意に千草が青葉に尋ねた。

「じゃあさ。日生が誰かに取られるのは嫌だとか思う？」

「誰かに取られるのが嫌って……。もうちよい言い方なかったのか」

「あいにくだけど、オブラートに包むスキルは持ち合わせてないから」

面倒になってきたのか、千草の表情には呆れが見える。

「取られるのが嫌というか……、なんだろ。俺がただ単に一緒にいたいだけだよ」

青葉はそれだけ言うのを見上げた。それを尻目に、千草は続ける。

「思う分にはいいだろうけど、行き過ぎて深みに嵌らないようにしなよ。それが自分の首絞めることになってるんだし、誰も幸せにならないんだから」

「なんで俺説教されてんの？」

「これは忠告だから」

「俺はそんなに重い人間じゃねえよ。良心と常識はある」

「ならいいけど。全く、ややこしいんだから……」

それ以上、二人が言葉を交わすことはなかった。

いつしか夜空には、鮮やかな花が咲いている。青葉はラムネを一口呷った。瓶に水滴るそれはとうにぬるく、何故か悲しいほどに甘く感じた。

〈沈黙の秋〉

ファミレスの一角、青葉と浅葱は向かい合って勉強していた。合間合間に浅葱の様子を伺ってはいるがどこことなくおかしい。勉強に対する集中力はいつもと同じ、いやむしろそれ以上だ。だが夏祭りの日からどこか気の抜けたような感じになっている。浅葱が話してこないことを聞くのもどうかと思いい、結局聞けずじまいで現在に至っていた。

「んあー、疲れた……。飲み物取ってこよ」

浅葱は大きく伸びをすると、手元のグラスを持って立ち上がる。青葉はその様子をただ見ているだけしかできなかった。しばらくして、浅葱が席に戻ってくる。

「青葉、さっきから何」

ぶっつきらぼうに聞かれ、青葉は我に返る。浅葱はやや不機嫌そうな顔をしていた。

「いきなりどうした」

「それはこっちの台詞だよ。なんか聞きたそうにしてるでしょ。俺の勘違いならいいけど」

どうやら勘付かかれているらしい。ひた隠しにするのも限界がありそうだと青葉は悟った。シャーペンをノートの上に置くと、浅葱の顔を見据える。

「単刀直入に聞く。お前、祭りのときなんかあっただろ」

その言葉に、グラスの中身をかき混ぜていた浅葱の動きが止まる。浅葱は目線を下げると、声色を落とした。

「……失恋したんだよね」

「……今なんだった？」

なんでそんな大事なことを言わなかったんだと問い詰めそうになったが、それをぐっと飲み込む。浅葱は淡々とした様子を崩すことなく言った。

「あの日、青葉がいなくてそういう話になったの。俺そのときに聞いたんだよ、好きな人いるのかって。そしたらいるって言われた」

「だからって失恋って決めつけんののは早いだろ」

「相手が俺じゃないってことは確かだから。それも聞いた」

「そんな話までしてたのか」

浅葱のどこか気の抜けた様子が失恋の傷を引きずっていたからだと分かり、安心したような痛々し

いような、今までと同じようにいられることにほっとしているような。青葉の心には、少しだけ複雑な思いが宿っていた。浅葱は左手でシャーペンを回している。彼の頭に、青葉はそっと手を伸ばした。「けどさ、そういう話に漕ぎつけただけでも上等だと思うよ、俺は。成長したっつーかなんだ、頑張ったな」

言いながら、癖毛を優しく撫でる。いつもならお叱りの言葉が飛んでくるが、今日の浅葱は珍しく青葉のされるがままだった。ふにやっとした笑顔を見せると、彼は呟く。

「……青葉って優しいよね」

「そんなことはねえよ。けど……」

「けど、何」

「俺だったらお前のこと分かってやれんのにな、とは思う」

本心とはいえども、言ってしまうと青葉は少し後悔した。勢いというのは恐ろしい。

よくドラマなんかで、傷ついているときに優しくしてくれた異性と睦まじくなる、という展開を見かけることがある。だが自分がその当事者、しかも同性の親友相手にこうなるとは思ってもいなかった。

青葉の言葉に浅葱は一瞬硬直したが、すぐに穏やかな顔つきに戻った。

「十分わかっているよ。それに、俺は青葉と一緒にいるの好きだよ。居心地いいからね」

浅葱はノートに視線を落とす。先程よりも雰囲気は柔らかくなったが、それでもどこか傷が癒えきっていないように思えた。

その夜は眠れなかった。午前一時、無理に寝ようとするのを諦め、青葉は寝返りを打つと暗い天井を見つめる。

力なく微笑む浅葱の顔が頭に焼き付いて離れてくれない。二年間一緒にいるが、浅葱のあんな表情は初めて見た。というよりも傷ついた浅葱というのを見たことがなかった。凹むことがなかったわけではないが、その中にも軽口をたたく程度の元気というものがあつた。だが今日の彼はそれすらも消えてしまっている。頭を触っても怒ってこなかった、というのが何よりの証拠だろう。

どういったことにしろ、今は彼の傍で傷ついた心を癒してやりたい。なのに、言い様もない何かの心の奥底にある。親友相手に何故こんなことを思うのか、むしろ親友だからこう思ってしまうのか。

——好きにもいろいろ意味があるからね

ふと、千草の言葉が甦る。浅葱とは親友の間柄。そこにある「好き」は友情だと思っている。だが、それすらも分からなくなりはじめてきた。

(行き過ぎて深みに嵌るなって、こういうことなのか……?)

夏祭りの日の千草の忠告を、青葉は思い出していた。

水曜最後のコマは、クラス会の時間になっている。

「学園祭の実行委員を男女一人ずつ決めるが、立候補する人は」

毎年秋に行われる学園祭、それは受験を控える三年生の最後の思い出作りにも一役買っていた。今はその実行委員を決めている。誰も立候補しそうにないので、青葉は手を挙げた。

「お、月島やつてくれるか？ そうなると残りは女子だが」

「先生！ あたしやります」

担任が言おうとする側から水穂が立候補する。無事実行委員が決まり、そこからは二人が進行することになった。司会を進める水穂に対し、青葉は出た案を黒板に書いていく。その結果、三年二組では制服カフェなるものの出店が決まった。学校の制服のような恰好ならなんでもよいという規定の下、カフェを運営するというものである。

放課後、早速委員会があるとのことで二人は視聴覚室に来ていた。部屋にはまばらに生徒が集まっている。後ろの方に座ると、青葉は言った。

「去年もこんな感じだったな。今から忙しくなるな……。受験勉強もあるっつーのに」

「実行委員だもんね。あたしと月島くんが知り合ったのもこのときだったよね？ もう一年経つって考えたら早いよね。あのときはクラス別々だったけど」

「そういえばそうだったけ」

「うん。でも今回は同じクラスだし。一緒に頑張ろうね」

「師星さんノリノリだね」

「こういうのは楽しまないと損だよ、月島くん」

そして、本格的に学園祭の準備が始まる。水穂と青葉は実行委員を務めつつ、クラスの方にも顔を出し、と慌ただしい日々を送っていた。

そんな中、水穂はとある決意を胸にしていた。手洗い場で片付けを行っていたとき、隣にいる千草にその報告をする。

「千草、あたし学園祭終わったら月島くんに告る！」

「……はあ」

「待って、けっこう大事なことなのになんでそんなにあっさりしてるの」

高らかな宣言とは裏腹に千草の反応は薄く、水穂は思わず拗ねたような表情を浮かべた。

「今更驚かないよ。自信はあるわけ」

「それは分かんないけど、これ逃すと受験で忙しくなっちゃうでしょ。それに学園祭で告白って青春っぽくていいと思わない？ うちの学校でも、学園祭はそういうの多いって聞くし」

「まあベタだよなあ……って思う」

「……今のはあたしが悪かったわ。千草はそういう人だよ」

千草の冷めた返事に、水穂の昂ぶったテンションもすると落ちていく。気を取り直すと、水穂はもう一度千草に向き直った。

「千草、あたし頑張るから」

そう言って、水穂は廊下を駆けていく。その背中希望に満ち溢れているようだった。

「ほんと、ややこしい……」
心の声を漏らすと、千草は溜息をついた。

学園祭の日、校内はいつも以上の騒々しさがあった。

「けっこう人が多そうだね」

「確かに。うちのクラスはどうなってるんだろ……。やってるー？」

教室に入ると、準備態勢に入っているクラスメイトの視線が集まる。

「おー、それなりには？」

「あ、月島くんじゃん！ よかったら接客の方行ってよ！ お客さん絶対増えるから！」

「いや、俺すぐいなくなるから勘弁して！」

クラスメイトからのお言葉を適当に流していると、浅葱の姿が目に入った。他の生徒に、取って来た注文を伝達している。青葉は声をかけた。

「接客、お前にしちゃ珍しいな。率先して裏方やってそうなのに」

「ほんととほそうしたいって抗議したんだけどね……。言いくるめられた」

「他の女子が言うには、名物スタッフにしたいんだって」

浅葱と同じく、注文を取って来た千草がさらりと言う。心底嫌だ、とうなだれる浅葱に、青葉は思

わず笑ってしまった。

「客寄せパンダみたいなアレか、けどちょっと分かる。マスコットって感じる」

「青葉までそっち側につかないでくれる!？」

「大変だね……」

二人のやり取りに、水穂は苦笑いを浮かべる。浅葱はちらりと彼女を見るが、何か答えるでもなく再び視線を下に向けた。それがまだ痛々しそうだものだから、青葉は焦って浅葱に言う。

「ま、頑張れ。俺らは実行委員の仕事あるからもう行くな」

そして慌てるように教室を出た。その様子に驚いた水穂も、青葉と同じように教室を出て行く。廊下を歩く青葉について行きながら、水穂は尋ねた。

「月島くん、どうかしたの」

「……いや？ 別にどうもしてない」

少し上ずった声で青葉は答える。水穂は何も聞いてこなかった。助かった、と青葉は胸をなで下ろす。だが、浅葱のさっきまでの様子が引かかかってしばらく離れてくれなかった。あの様子だと、未だに傷は癒えていないらしい。この間と同じような複雑な気持ちがわき上がってきて、どうしたもんかなと思っていたとき、再び水穂から声がかかった。

「ねえ月島くん、学園祭終わってからって時間あるかな」

「終わってから？ 特には何もないと思うけど。どうかしたの」

「ちょっと、話したいことがあって」

「……それ、今じゃだめなのかな」
内容がどういったものかは知らないが、差し支えがなければ今でもいいような気がする。単純にそう思ってしまったものの、水穂からは、今じゃだめだとかかなり強めに言い返されてしまった。
「二人だけで話したいの。だから……。教室で待ってほしいなって思ってる」
少しじれったそうにする水穂の表情を、青葉は初めて見たような気がした。

「二人だけってまさか……な」

校内の見回り中、青葉是水穂と離れて学食横のスペースに来ていた。ベンチに座り、大きく伸びをする。近くの体育館からは、軽音部のステージ発表の音が聞こえていた。

青葉の頭には、さっきの水穂のことが思い起こされていた。二人だけで話したい、これが示す意味を考えてしまう。ぼんやりとした想像はついているが、それが自分の行き過ぎた思い込みの可能性もある。だとしたら痛すぎやしないかと、青葉は溜息をつく。

「……今はなんとも言えねーな」

そう言ってもう一度、身体をぐっと伸ばしていたときだった。

「疲れてんね」

聞き覚えのある声に視線を移すと、片手にプラカードを持った千草の姿があった。

「客捕まえてこいって駆り出されでもした？」

「まあそんなところ、あたしも休憩しよっかな。月島、何飲みたい」

「何、東雲妙に優しいけどどうかした……？」

「ちよつとは労わろうとしてんだからそういうこと言わないでよ。どうすんの」

「あ、じゃあミルクティー……」

千草は自販機で飲み物を買おうと、青葉の隣に腰を下ろす。受け取ったパックにストローを挿しながら、青葉は尋ねた。

「そっちの状況はどうなの」

「ぼちぼちな。外部の人もうちの生徒も来てはいるみたいだし」

「浅葱はどうしてる。つか、あいつ大丈夫そうか」

「出た、過保護」

「ほっとけ」

「クラスの女子たちにきやいきやいわれはしてるけど、どうにかやってたよ。心配するほどのことでもないと思うけど」

「……なら、いいけど」

「何、その感じ。またなんかあったわけ」

一瞬間だが、千草だから大丈夫だろう。青葉は浅葱の失恋について話す。ついでに自分のことも話した。一人で考えるより、誰かに聞いてもらった方が多少楽になるかもしれないと思ったからだっ

た。一通り話すと、千草は少し考え込んで言った。

「友達が凹んでるならどうにかしたいって思うのは普通のことだと思うけどね。それよりも分かってやれる発言はどうなのよ……。受け入れる日生も日生だけでも」

「それは正直反省してる、けど事実なんだよ。俺なら分かってやれる、だからこそ一緒にいたいって思う。けどそこまで思うかって考える自分もいる」

「なるほどね……。けど、この間あたしが言ったことも一つはあるんじゃないの」

「どれのことだよ。深みに嵌るなつてのよか」

「違う。好きにもいろいろあるつてこと。その意味は自分で考えなよ」

千草はそう言うと言語のバックを潰し、ゴミ箱に捨てる。それを横目に、青葉は彼女の言葉を頭の中で反芻していた。好きにも種類がある。自分のそれについて考えていたら、いくつかの感情や思いがあることに気づかされた。

親友としての友情と愛しさ、恋する彼を応援する中で芽生えた小さなもどかしさ。そして恋を失った彼に寄り添いたいと思うようになった、ほんの少しの自分の欲望。

自分なら、彼のことを分かかってやれる。だからこそ彼と一緒にいたい、彼にも頼ってほしい、そう思っている。それなら、親友という枠からはみ出してもよかった。むしろ、それ以上に――。

(待て、それはない。絶対ない)

迷宮入りしかけた考えを青葉は全力で否定する。それでも友情と呼べなくなっているんじゃないか、と思っているこの感情にどんな名前をつけていいのかは、そのときの自分には分からなかった。

灯りの消えた夕暮れの教室は、祭りの後の静けさを現している。窓際に見慣れた姿があって、思わずどきりとしてしまった。

「……浅葱？ 何してんだ？」

「あ、誰かと思ったら……。青葉、後夜祭行かないの？」

校庭では後夜祭が行われており、生徒のほとんどはそちらに集まっていた。浅葱のように教室に残っているほうがどちらかというと稀である。

「お前はどうすんの」

「なんというかそういう気分じゃないんですよ」

それなら仕方ない。青葉は何も言わず、浅葱の隣に移動した。クリーム色のカーディガンが、いつも以上に浅葱をふんわりとした雰囲気仕立てあげている。

「ブレザーじゃないとちょっと新鮮だな」

「女の子たちが絶対似合うからつて。これ、若干サイズ大きくて手が隠れちゃうんだよね」

「俺、クラスの方にはそこまで顔出せてないけどどうだったわけ」

「まあそれなりに。あと、四組のコッシーいるでしょ。二年までクラス一緒だった」

「ああ。なんかあったの」

「彼女で来たんだつて。今日一緒にうちに来てたの。女の子に質問攻めにされてた。けど楽しそうだったよ。ちよつと……。いいなつて思えた」

浅葱は寂しそうに笑う。恋に夢を抱いていたのだから、そう思うのも無理はない。失恋したとは

言っていたが、それですっぱり切り替えられるものなのか。なんとなくそんな疑問が浮かんできて、青葉は尋ねていた。

「お前は、このまま終わらせるつもりなのか」

浅葱は視線を逸らし何も言わなかったが、しばらくして、そうだよ、と吐き捨てるような答えが返ってきた。

「終わらせるも何も、好きな人がいるのに入り込む余地なんてないでしょ」

「けど、伝えるだけ伝えたらすすきりするんじゃないの」

「余計に傷が増えるだけだよ。見えてる地雷をわざわざ踏みになんて行きたくない」

声に不機嫌さが混ざる。青葉の知っている浅葱の姿は、そこにはない。

「……じゃあ、諦めるのか」

「……それしかないだろうね。未練がないって言ったら嘘になるけど」

「けど……」

「もういいでしょ。俺がそうしたいの」

浅葱はそう言い切ると青葉の傍から離れようとする。青葉は思わずそれを引き留めていた。交わる指先は少し冷たい。言葉をとす浅葱の声は、震えていた。

「……手に入らないのに想い続けるなんて、つらいから」

「……それは俺も同じだ」

漏れ出た心の声に、自分でも驚いた。どうということなの、と答えが返ってくる。青葉を見据える薄

茶の瞳は、驚きの色が滲んでいた。しばらくお互いが見つめ合う形になったが、やがて浅葱が確かめるように言った。

「青葉、好きな人がいるの」

「……まだ分からない。けど、そうなのかなって思ってる」

「それ、誰なの」

「そこまでは言えない。言ったら、お前と友達でいらなくなるかもしれないから」

大げさな物言いかもしれないが、これは事実だ。教室に沈黙が流れる。浅葱の瞳は揺れていた。引き留めていた指先が、ふっと離れる。

「何、それ。それで俺のこと、応援してるなんて言ってたの」

「浅葱？」

この様子は確実に何か勘違いしている。第一、まだ確定したことではない。手に入れられないのは確かだが、ただそうなのかもしれないと漠然と思っただけだ。弁解しようとした瞬間、浅葱の声がそれを遮る。

「……師屋さんの？」

その声は今までに聞いたことのないくらい低かった。息つく暇もなく、浅葱は言う。

「俺と友達でいらなくなるかもしれないなんて、それしか思い浮かばないよ。俺、馬鹿みたいじゃない。それならそうだって言っただけだった。隠してほしくなかった」

「浅葱、待て。俺は——」

「ごめん、今は何も聞きたくない。一人にさせて」

「浅葱！」

教室を飛び出していく浅葱を追おうと、青葉は駆け出そうとする。だが、これもまた聞き覚えのある声に遮られた。

「月島くん？」

浅葱と入れ替わるようにして教室に入ってきたのは水穂だった。不安げな顔でこちらを見る水穂を、青葉はただ見つめることしかできなかった。水穂は青葉の方にやってくると、表情を変えることなく青葉に尋ねる。

「ごめん、邪魔しちゃったかな」

「いや、大丈夫……」

そう言うと、水穂の表情が少しだけ緩む。本当は全くもって大丈夫ではないが、水穂には関係のない話だ。余計な心配をかけたくなかった。

彼女は青葉のことをまっすぐ見据える。

「言いたいことがあるの」

その真剣さに圧倒されそうになる。青葉もまた、彼女を見据えた。

「うん。何かな」

聞き返すが、彼女は頬を赤くして俯いてしまった。少しか二人の間の空気が止まる。しばらく無言の状態が続いたが、やがて水穂が意を決したように口を開いた。

「……あたし、月島くんのことが好きなの。一年前から、ずっと」

青葉は何も言えなかった。それは自分が予想していなかったからではない。

なんとなくそんな気はしていた。夏祭りに二人で誘われたこともあった。あれは水穂なりのサインだったのだと、今思い返しても納得はできる。

水穂のことに目を背けてきたのには理由があった。一つは彼女が親友の片思い相手だからということ。そしてもう一つは、それが単なる勘違いと自意識過剰だったときのダメージを軽減するためだった。こうなってしまう時点で勘違いでもなんでもないのだが、はっきりとしたことが分かるまでは「まさかな」と思っていた部分もあるから仕方がない。

それと同時に頭に浮かんだのは、傷ついた表情を浮かべた親友の顔だった。

浅葱は水穂の好きな人のことを知っている。それも夏祭りのときからずっと。好きになった相手の想い人が自分の親友だった、という事実を突きつけられたとき浅葱はどう思っただろう。堪えるのも無理はない。それに加えて、さっきの勘違いもある。青葉の頭を支配したのは、今日の前で起きることよりも、親友に対する罪悪感だった。

どうにか冷静になろうとしても、できなかった。今の自分は、うまく取り繕えているだろうか。悟られないよう、青葉は聞き返す。

「……それは、恋してることだよね」

「うん、そういうこと。だから……。あたしとお付き合いしてください」

飾ることのない、シンプルな告白。頭を下げたままの水穂を、青葉は見下ろす。

問われていることには答えなければいけない。だが、ここにくるまでにいろいろなことが積み重なりすぎてどうしていいかよく分からなかった。とりあえず人を見下ろすのは自分の性に合わないの
で、水穂には頭を上げてもらう。緊張している面持ちでこちらを見るものだから、青葉にもそれが伝
染してしまいそうになる。動揺してはいけない。

青葉は自分の今の気持ちを偽りなく話すことにした。

「……そう想ってくれてるっていうのは、嬉しい。なんならちょっとびっくりしてる。けど、今
ちょっといろいろありすぎてそこまで考えられる余裕がなくて。ちゃんと考えるから、この返事は保
留させてもらってもいいかな」

納得してくれるとは思っていない。だからなんとと言われても構わなかった。だが思っていた答え
と、水穂のそれは違っていた。

「うん、分かった。あたし、待ってるからね」

水穂はそう言うと言室を出て行った。一人残された青葉は、窓から外を眺める。濃いオレンジ色に
染まる空が、視界の端に映った。

頭の奥、さっきまでのことがフラッシュバックする。頬を赤らめ、緊張したような水穂の表情と、
彼女が発した好きという言葉。そして自分を拒絶した浅葱の、低く震える声。

それだけではない。自分の中に別の可能性が生まれてしまった。浅葱のことを考えすぎるあまり、
彼と一緒にいたいと思う感情がそこにはあった。それに似合う名前を、いつしか青葉は見つけてい
た。独占欲だ。いつからそれが芽を出していたのかは分からない。彼の失恋からか、祭りの夜から

か、それとも二年以上の時間の積み重ねが、一気に自分に火をつけたのか。混沌とする心の奥は、一
向に鎮まる気配を見せない。いくつもの思いが、巡り巡る。

青葉は眼鏡を外すと、顔を自分の両腕にうずめ、深く溜息をつく。

「どうすりゃいいんだよ……」

すがるような声は、カーテンを揺らす風に消えていった。

〈決断する冬〉

学園祭が終わると、三年生は本格的に大学受験までまっしぐらに進んでいく。明るい時間が徐々に
短くなり、頬に吹き付ける風がだんだんと冷たくなっていく頃、第一関門といえるセンター試験まで
残り一か月を切った。三年二組の教室にも、殺気立っているといっても過言ではない空気が漂い始め
ている。

「月島、聞いてるか？」

「あ……。すみません」

「最近ぼんやりしてること多いけど、大丈夫か？ この間の模試の結果もあまりよくなかったみたい
だが」

進路面談の最中、担任からつい先日受けたマーク模試の結果を返される。いつも試験や模試ではそこその点数を取っていたが、今回のそれは思った以上に酷いものだった。三教科の点数がかなり落ちているし、他の教科も良とは言えない。受験がもうすぐそこに控えているのにこれでは目も当てられない。青葉は思わず下を向いた。

「何か心配事でもあるのか」

「心配事……」

ないとは言えないが、勉強面とは全く関係のない話である。そんなことを担任の前でさらけ出す勇気など持ち合わせていない。青葉は言い切った。

「大丈夫です」

自習時間中、青葉は模試の結果を見ながら、学園祭のことを思い出していた。浅葱と仲違い状態になってしまったあの日。模試の結果が散々なのも、おそらく原因はそこにあつた。

浅葱は完全に、自分が好きなのは水穂だと誤解している。確かに水穂と青葉は、傍から見ると仲がいいという分類になるだろう。二年生の秋に学園祭の実行委員をやり、三年生になってクラスが同じになったこととお互いの距離は縮まった。明るくて前向きな女の子、そして親友の片想いしている相手。友達として一緒にいるには楽しかったし、彼女もそのつもりだと思っていた。あの日までは。

水穂に告白されたときに浮かんたのは、浅葱に対する罪悪感だった。告白されたことに目を向けるより浅葱のことを考えてしまうのだから、告白の返事を考えるのもままならない……というのは嘘で、答えは既に出ている。いい加減返事をしなければいけない。彼女には申し訳ないが、自分はその気持ちに答えることはできないと。

問題は浅葱の方だった。学園祭が終わってから全く話していない。そうこうしているうちに受験が近づいていて、勉強に割く時間が増えた。浅葱の方もそれは同じらしく、これまで以上に勉強の方に力を注いでいる。

この状態のまま卒業してしまう可能性もある。三年間共に過ごした終わりが、こんなものでいいわけがない。それなのに、未だ気持ちの整理はついていない。それが青葉を焦らせる。

全ては自分もたらしたこと。自分でけりをつけるしかない。

視線の先には、微かに揺れる薄茶色の癖毛が映っていた。

それからしばらく経ち、結局なんの進展もないまま終業式を迎えてしまった。午前で授業が終わったせいか騒がしい教室とは裏腹に、窓の外は厚い雲に覆われている。そのせいか空が低く見えた。

持ち帰る荷物と教科書を片付け終えた青葉は、浅葱の席を見る。だが彼の姿はない。机の横に掛かっている通学鞆も見当たらないから、既に先に帰ったのだろう。センター試験よりも前にどこかで連絡

して話をつけようと心に決め、自分も帰るか教室を出ようとしたときだった。

「月島くん！ ちょっといいかな？」

呼び止められて振り向くと、水穂がいた。そういえば彼女の告白の返事も先延ばしにしていた。おそらくそれに関わることだろう。この機会に話しておかないといけない。だがそう言おうとする前に、水穂は青葉に言った。

「ちょっと話したいことがあるの。人がいると話しにくいから、二人だけになりたいかな」

同じ階にある演習室に二人はやって来た。誰もいない教室というのはどうしても寒く、青葉は手をすり合わせた。教室の扉を閉めた水穂が、青葉に向き直る。

「この間の告白の話なんだけどね」

「やっぱそれか。ずっとほったらかしててほんとにごめん」

「それなんだけど、なかったことにしてくれないかな」

「うん……。って、なんて？」

青葉は聞き返す。水穂は顔色一つ変えることなく、言葉が続けた。

「お付き合いしてくださいっていうのは、なかったことにしてほしいの」

「なんでまたそんな……。大事なことなのに、どうして」

「……日生くんには勝てないなって思ってた」

「え、なんでそこに浅葱が出てくるの」

いきなり浅葱の名前が出て、青葉の内心はびくついていった。冷静を装ったつもりではあるが、それ

がうまくいっているかは知らない。だがそんな青葉のことなどお構いなしに、水穂は続ける。

「月島くん、日生くんといるときが一番楽しそうだから。何があつたのかはあたしには分からないけど、今二人とも全然一緒にいないでしょ？ そのせいか最近月島くん、雰囲気が少しどんよりしてるな、って思ってた。それだけ日生くんのが好きなんだなって思ったとき、あたしはそこの立場にはなれないんじゃないかって気づいた。だからお付き合いしたいっていうのはなしにしてほしいの。最初は負けたくないって思ってたし、今でもちょっと悔しい気持ちはあるんだけどね」

水穂は穏やかに笑うが、どこか寂しそうだ。青葉は少し俯くと、考えていたことを伝える。

「告白されたときに言ったけど、びつくりもしたし嬉しかった。けど、俺は師屋さんのことはずっと友達だと思ってたし、これからもそうとしか思えないと思ってる。だから今の話聞いて、正直なところ申し訳ないと思う自分も、ちょっとほっとしてる自分もある。ほんとにごめん」

「ううん、いいの。それは月島くんが決めることだから」

そう言った水穂は、大人びて青葉の目に映った。

水穂に言われてしまうくらい、自分と浅葱の距離は近かったのだろう。それが離れてしまったら、疑問を持たれるのも仕方はない。

浅葱に向けるもどかしい感情は、今まで以上に大きくなっている。罪悪感も然り。話さなくなっ

からというものの、一緒にいたとき以上に彼のことを気にしてしまっていた。階段を降りながら、青葉は溜息をつく。

「月島、顔が暗い」

昇降口の下駄箱までやってきたとき、いきなりそう言われた。顔を上げると千草が立っていた。青葉は気だるげに言葉を返す。

「……わざわざそれ言うためにここにいたの」

「別に。それより、さっきまで水穂と一緒にだったんでしょ。後で慰めてやんないとな……」

「多分教室にいると思うから」

「そう。まああの子なりに考えたことなんだからね、分かってやんなよ」

「言われなくても分かってるよ」

「ところでさ、最近日生と喋ってるってこ見ないけど。どういう風の吹き回し」

唐突に話題を変えられ、青葉はまた溜息をつく。心の中で、その話かと呟いた。千草にはこれまでも浅葱に関する色々話している。だからこう聞かれるのも無理はないのだが。

今はそれに関してはあまり触れられたくない。そう思うものの彼女に話を聞いてもらうと、理由は分からないが少しだけ解決策が見えてくるような気もしていた。

「……揉めた。浅葱の勘違いんだけど、元を突き詰めると俺のせいなんだよね」

そこから青葉は事の起りを話す。千草には呆れられてしまった。

「好きな人がいるって、確定してもないことを話してどうすんのよ。日生のことが気になりすぎて他

のことが見えてないのはよく分かったけど」

「……事実だから何も言い返せねえ。独占欲どんどん強くなってってるし、自分がこんなに欲張ってるとは思ってなかった」

「……なんでいきなりそんなこと思うようになったわけ」

青葉は少し考えると、拙いながらも話し始める。

「なんでなんだろうなって思ったけど、やっぱ一緒にいた期間が長かったからっていうのと、浅葱がああいう性格してるからじゃないかと思う。長いこと一緒にいるとそれだけ扱い方も分かってくるし、見てて危なっかしいところもちょっとあるから。会ったときからずっと、あいつには俺がいないとだめなんじゃないかって思ってるところもあるし。それがエスカレートするというか、俺なら絶対分かってやれるとかいう根拠のない自信が生まれたというか。だから甘すぎるとか言われることもあるんだろうけど。浅葱がまだ恋に積極的だった時期はそれこそ相談されたりとかしたし、そういうの見てたから尚更、俺がいるのになって思ったというか、俺が浅葱と対になれる立場なら……、とか思ったりしたわけで。けどそれもちょっと頭の隅によぎるくらいで、ここまで考えるようになったのはつい最近の話だし……って、あーもうこれ何言ってるのか分かんねえな」

そこまで話して青葉は言葉を切ると、頭をぐしゃぐしゃとかき回す。千草は冷静な表情を崩すことなく、青葉に尋ねる。

「まあそれだけ混乱してんのは分かった。具体的にそう考えるようになったのはいつからなの」

「あの祭りの後。浅葱に告白させようっていうのは自分でやったことなのに、複雑に思うって、なん

なんだろうなって。勝手すぎるとは分かってんだけどなあ……」

千草は相槌を打つとそのまま黙り込んだ。もうこれ以上特に話すこともないのなら帰りたい。そう思い、青葉はスニーカーを取り出そうと下駄箱を開ける。

「ねえ……。もう一個、聞いていい」

それを見たからなのか、千草にまた呼び止められる。青葉は手を止めた。

「何。俺、ある程度のは話したけど。まだなんかあんの」

聞き返すと千草は一瞬躊躇ったが、それも長くは続かなかった。

「月島って、そっちのケがあったりするの」

青葉は黙り込んだ。浅葱に対する感情が、自分では独占欲だと思っているものに近くなっているのは事実だが、それとこれとは別物だ。

「なんつーこと聞いてくるんだよお前は……」

「いや、けっこう大事なことだと思っただけ？」

「まあな……。確かに浅葱のことは好きだけど、友情と呼ぶにはどうなんだろうなって思うだけ。一回ごちゃごちゃ思ってた時期に、そういうのもアリなかって考えかけたことはあるけどさ、まともに考えられなかった。相手親友だし、その前に男だし。極端に考えると抱けるかってことだろ……って、これは東雲にする話ではないような気がする」

「別にあたしはそういうの気にしないから。あんたに夢見てる他の女子だったら多分幻滅してるだろうけど。というかあんたもそういうこと思ったりするんだ」

「一体女子は俺にどういう幻想を持ってんだ……。そういう欲もちゃんとあるのはあるから。人よりはかなり薄いと思うけど」

「ぶっちゃけすぎ。けど月島って恋愛経験もそっちの経験もないよね」

「ない」

「だよ。モテるくせに色恋沙汰の話なんて聞いたことないし」

「ほっとけ。余計なお世話だ」

一体どこからこんな話になったのか。心の中で溜息をつくとき、青葉はもう一度スニーカーに手を伸ばす。

「……東雲、俺これからどうすればいいと思う」

「とりあえずは自分の気持ちにもっと正直になってみたら。分かんなくても考えてみる、とか。後は日生と話つけるくらいしかないんじゃない？そこは二人次第だけ」

青葉が尋ねると、淡々とした答えが返ってきた。結局は自分の行動力と気持ちにかかっているというのを改めて認識させられ、青葉は昇降口から空を見上げる。

「……あれ、雪降ってる」

「え、嘘。うわ、ほんとだ。そりゃ寒いわけだわ」

初雪の舞う空を、二人はしばらく見つめていた。

冬休みに入ってからというものの、時間があつという間に過ぎていく。

三が日の最終日、青葉は何もする気が起きず布団にくるまっていた。正月の間くらいは受験勉強を休んでもいいかと決めたが、今日でそれも終わる。寝正月も悪くはないと思っていたが、現実はその甘くない。母親に起こされ、だらけるくらいなら身体動かしてきなさいと言われてしまった。

そんなわけで重い腰を上げ、青葉は自転車走らせていた。行き先は高校のすぐ近くにある大きな神社だ。この辺りではそれなりに名前が知られているので、初詣に訪れる人も多い。お参りをする人、おみくじを引く人、絵馬を書く人と、境内は賑わっている。

「……さみい」

冬休みに入ってからほぼ家に引きこもっていたせいか、北風の冷たさが身にしみる。できるだけさくっと済ませて早めに帰るかと境内の方へ向かっていたとき、すれ違った人と肩がぶつかる。

「あ、ごめんなさい」

「いや、大丈夫です……って、あ」

お互いの視線がばっちりぶつかり合い、声が漏れる。そこにいたのは浅葱だった。

湯気からミルクティーの甘い香りが立ち込める。カップからじんわりと伝わる熱が、冷たくなった掌を温めていた。ファミレスの片隅、青葉と浅葱は向かい合って座っていた。

「なんつーか……。話するの久々だな」

「言われてみればそうだね」

だが、会話が続かず無言に戻る。しばらく話していなかったせいか、どう接していいか分からずやや気まずい。学校があつた間はあれだけ気にしていたのに、いざ正面から向き合ってみると何もできないものなのかと、心の内で呆れ返る。

「最近、どうしてた」

何から話していいのかが分からないので、当たり障りのないことを言う。浅葱はさらっと答えを返した。

「入試近いから勉強してたよ」

「まあそうだよ……。俺もそんなもんだけど。ちょっと前に受けたマーク模試がぼろぼろでさ、担任からも親からもつつこまれるわでもう」

「……青葉が模試の結果悪いの珍しいね」

「まあいろいろあるんだよ……」

さすがに正直なことは言えないので、言葉濁す。そのとき青葉はあることに気づいた。

「そういうえば、俺浅葱の進路の話聞いたことない気がする。俺も言った記憶ないけど」

「あ、確かにそうかもね……。勉強の話はしてたけどね」

一緒に勉強する機会は多くあつたが、それなのに進路の話はしていなかった。行きたい学部やこんな大学生活を送りたい、なんてことはぼんやりと考えていても、結局のところはセンター試験の結果

次第というところがあるから、詳しい話はなかなかできない。

「青葉は大学どうすんの」

青葉が聞こうとする前に、浅葱が尋ねてきた。青葉は大きく伸びをすると、答える。

「実家から通える範囲のところに行こうと思ってる。それでも距離はちよつとあるから、電車通学することになるかな」

「電車はラッシュ大変だから気をつけてね」

「善処する。お前も大変そうだったし」

まあね、と浅葱は笑うとカフェオレを一口飲む。ふう、と息をつく浅葱に、青葉はついさつきされた質問を彼に返した。

「浅葱はどうすんの。勉強頑張ってるみたいだったし、目標とかあったりするの」

彼は何も言わず頬杖をつく。遠くを見つめて考え込むような様子の浅葱に、もしかして地雷を踏み抜いたんじゃないかと青葉は焦っていた。沈黙の間がいたたまれなくなってしまう、青葉は思わず言葉が続ける。

「……悪い、俺なんか変なこと言ったかな」

「え？何のこと？」

この反応を見るに自分の思いこみだと分かった。青葉は胸をなで下ろす。浅葱はそのまま言葉を続けた。

「俺はね、高校卒業したら地元出る」

「そりゃそうなることもあるわな……」

その日の夜。布団に身を預けたまま、青葉は大きく溜息をついた。浅葱が地元を出ると知ったことが、余程自分には大きかったらしい。中学の頃にも受験で友人と離れることを体験しているとはいえども、それ以上にショックが大きいのはやっぱりその相手が浅葱だからなのだろうか。

三年生になったとき、担任から「高校生活最後の一年だから、気を抜かず悔いを残さないように」と言われたような記憶がある。そうは言っても高校生たるもの、目の前で起きることに夢中になるものなんじゃないの、と青葉自身そう思っていた。だからこそ今までも、浅葱と共に過ごす現実というものに目を向けていたわけで。進路問題に直面して、迫りくる未来を現実として受け入れなければならぬことに気づかされた。

これまで浅葱と共に過ごしてきた日々は、卒業と共に終わりを迎えてしまう。二か月とあと少し、長いと思うか短いと思うか、これもまた自分次第だろう。だが今そんなことはどうでもいい。過ごせる時間に終わりが来てしまう、ずっと続くと思っていた日常に終わりが来てしまうということが、怖かった。そして自分にとって、どれだけ浅葱の存在が大きいものだったのかということに気づくのが遅すぎた。

（なんで今更になって気づくんだろうな）

学校の中にある、当たり前前の日常。自分にとってのそれは浅葱と過ごすことだった。親友と共にいられること、それが何よりの楽しみで、かけがえない大好きな時間だった。ずっと一緒にいられると思っていた。

そんな中で芽生えた、親友への思い。恣に悩む彼に手を差し伸べる一方で、自分なら彼のことを分かかってあげられると思っていた。いつしかそれが嫉妬に近い何かになり、いつしか独占欲へと名を変えた。それ以上のことは分からないからと目を背けていたが、もう一度これに向き合う日が来たのかもしれない。千草が自分の気持ちに正直になれと言っていたが、今の自分にそれができるのだろうか。そう思うが、もう時間は残されていない。無理にでも向き合わないこと。

青葉は身体を起こし、壁際にもたれかかると目を閉じた。

——俺は青葉と一緒にいるの好きだよ。居心地いいからね

いつか浅葱が言っていた言葉。それは自分も同じだ。あるとき無理にでも、俺のところに来れば、と言っていたらよかったのだろうか。体のいい誘い文句だと言われても仕方ないだろう。でも自分といることで心がほぐれるならいくらでも近くにいたいと思っていた。

好きという気持ちにも種類があると千草は言っていた。今の自分にあるのは一つの独占欲だが、その根っこにあるのは、浅葱への愛しさだろう。

「愛しいって、なんなんだろうな……」

今の自分に一番近いもの。それが正解かどうかは分からないが、少しだけ何か見えるかもしれないような気がしていた。何にしろ、いつか浅葱に話さないといけない。それが自分に出せる、一つの答えだと思っていた。

それからしばらく経ち、センター試験前日を迎えた。決起集会なるものが行われ、それが終わったから三年生は下校時間になる。青葉は教科書を片付けると浅葱の席を見るが、鞆も本人も見当たらない。それならと教室を見回すと、前の扉から出て行く浅葱の姿を見つけた。青葉は慌ててそれを追う。

「浅葱！」

歩みを止めた浅葱が、青葉のことをじっと見る。

「いきなり大きい声出さないでよ。びっくりするでしょ」

「あ、悪い……。まあそれはそれとして、一緒に帰ろうと思って」

「そういうことね。いいよ」

外はまだ明るく、冬の青空が冷たい空気に澄み渡っている。特に言葉を交わすでもなく、二人はただ歩を揃えていた。

(あ……。そういえばあの日の話してなかった)

自分たちが気まづくなったあの日のことを、青葉はぼんやりと思いだす。未だに誤解を解いていないことに気づいた。そして今の自分は浅葱に話さないといけないことがある。だがそれはセンター試験を明日に控えた状態です話ではなかった。

「なあ、浅葱」

彼の名を呼ぶと、何、と柔らかな声が返ってくる。薄茶の瞳が自分を捉えていた。

「俺さ、お前に話してないことがあるんだよ」

「いきなりどうしたの、急に改まっちゃって」

「まあ最後まで聞いて。別に話さず墓まで持って行くつもりじゃないから、どっかでちゃんと言おうとは思ってる。けど今の状態では流石に難しいかなって。俺もだけど、お前もセンター集中したいだろ。だから全部が落ち着いたら話す。もうちょっと早く言えばよかったんだけど……。悪いな、いきなり訳分かんないこと言ってる」

「何、それ言うために一緒に帰ろうとしたわけ？」

「そういうこと。一応言っときたかったんだよ。ま、そういうことだから明日明後日頑張ろうな！」

「ちよつと青葉、髪触らないでっいつも言ってるでしょ！」

吹っ切れた青葉の姿を、冬の太陽が見つめていた。

〈いびつな三角の行きつく先へ卒業へ〉

色とりどりの飾りに、チョークで彩られた黒板。卒業式の終わった三年二組の教室は、いつも以上の賑やかさがあった。寄せ書きを書く者あり、写真を撮る者あり、友達と話す者あり。青葉はその中で、考えを整理していた。

——高校卒業したら地元出る

卒業、それは一つの終着点。同じ場所で過ごしてきた仲間たちが、新たな一步を踏み出すときだ。青葉や浅葱も、その中にいる。だが大学に進学しても地元に残る青葉とは違い、浅葱は進学と共にこの街を出る。遅くとも三月中には引越しになるだろう。一緒にいられる時間は、もう残り少ない。それまでに、自分のことを伝える必要がある。

誰にでも、それぞれが歩む道というものがある。浅葱の場合はそれが街を出ること。彼が決めたことなのだから、困らせるような真似はしない。それは野暮だ。むしろ青臭いと言うべきか。

それでも、離れたくないと思う気持ちは打ち消せない。我ながら本当に、勝手な話だ。

（何考えてんだろな、俺は）
青葉は思わず頬を緩ませる。今の自分は間違いなく痛い人間だ。溜息をつき、教室を見回す。最後に浅葱の席に目を向け、そこで自分がやらかしたことに気づいた。

「……鞆がない」

ついでに本人もいない。幸いアルバムに寄せ書きは書いてもらっていたものの、一緒に帰る機会がこれが最後だっただろうに。積もる話だってある。会う時間を作らないといけないな、などと考えていたときだった。

「月島くん」

聞き慣れた声が響く。上を向くと、水穂がいた。その手には卒業アルバムと、サインペンが握られている。

「よかったら書いてほしいな、なんて」

「卒アル？ いいよ」

ペンのキャップを開け、寄せ書きの空いたスペースにメッセージを埋めていく。書き終わりそれを水穂に返すと、彼女はどこかほにかんだような表情を浮かべていた。何を言うでもなく、謎の間が沈黙と共にしばらく続く。どうしようかと困っていると、近くにやってきた千草が水穂に声をかけた。

「水穂、何してんの」

「わ、千草いつからいたの」

「さっきから。傍から見てたけど、何を固まってんのよ。そんでもって終わったの」

「終わったけど終わってない！」

「ならさっさと終わらせなよ」

二人のやり取りに、状況が呑み込めない青葉は首をかしげると尋ねた。

「えーっと、何の話ですかね」

水穂はますます慌てたような素振りを見せる。愛想を尽かした様子の千草に背中を押され、水穂は少し躊躇うと、青葉に言った。

「ねえ月島くん、ちょっとだけわがまま言っていていいかな」

「どうしたの」

「その……。よかったら一緒に帰ってください！」

頭を下げる水穂に、青葉は目を瞬かせる。とりあえず頭を上げてもらおうと、水穂は困ったような表

情を浮かべていた。

「……別に構わないけど」

青葉が答えると、水穂の顔がぱっと明るくなる。昇降口までは三人で行くことになった。道すがら、青葉は言う。

「さっきの話、第二ボタンとかそういうのかと思った」

「やっぱりベタにいくとそうなるよね、けどこの制服で第二ボタンってのもさ」

「あれ元々学ランの話でしょ？ それに第二ボタンって貰ったところでもできないと思うんだけど」

「東雲はほんと通常運転だな……」

そんなやり取りをしながら下駄箱までやってくる。スニーカーを取り出していると、同じように下駄箱を開けた水穂が声を上げた。

「あれ、何かなこれ」

二人は彼女の下駄箱の中を覗く。そこには白地の封筒が入っていた。

「手紙？ 誰からなの」

「うーん。封筒には名前書いてないみたい」

「中見てみれば」

「それ、俺にもちよつと見せて」

そう言うと、青葉は水穂の上から手紙を覗き込む。水穂は千草に言われるがまま、貼られたテープ

をはがした。中には青いラインが入った白地の便箋が折り畳まれている。そこには短い文章が書かれていた。

——初めて会ったときからずっと好きでした

それだけ書かれた手紙。少し丸みを帯びた癖字に、青葉は見覚えがあった。

「で、結局誰からなの、それ」

「えーつとね、下にちっちゃく『日生』って書いてある……って、これ日生くんから」

「二回言わなくても分かるから」

騒ぐ女子二人から離れ、青葉はスニーカーを取り出すと昇降口に座り込み、そこからの空を見上げる。

「……頑張ったな」

誰に聞かせるでもなく呟くと、青葉はほんの少しだけ微笑んだ。

卒業式に桜、というイメージは誰が定着させたのだろう。堅い蕾を木の先につけ、じっと春を待つそれを青葉は見上げた。穏やかな光が、通学路にある桜並木を包んでいる。

「師星さん、俺のチャリのかごに鞆入れていいよ」

「え、そこまでしてもらわなくていいよ。荷物ほとんどないから重くないし、ここから駅までってそんなに距離ないでしょ」

「……そう？ ならいいけど」

青葉は水穂のペースに合わせて、自転車を押しながら歩く。桜並木を見上げながら、水穂は呟いた。

「今日で、卒業しちゃうんだね」

卒業。その言葉の重みを噛みしめていたのは、水穂も同じだったらしい。青葉は彼女の横顔に尋ねる。

「その様子だと師星さんは、卒業したくないなって思ってる感じ？」

「んー、どうだろう……」

悩むような声が返ってくる。しばらく考えて、水穂は青葉の方を向くと穏やかに微笑む。

「どっちでもないかな。大学は大学で楽しいことあると思うし。勉強はよく分らないけど、友達作って一緒にわいわいしたり、入るかどうか分からないけどサークルもあるでしょ。それに制服じゃなくなるからオシャレもできるし、アルバイトしてお金貯めて……とか考えると、いろんなことやりたいなって思うの。それだけやれることがあるってことだからさ。だけどね」

水穂が言葉の切ると同時に、交差点の信号が赤に変わる。立ち止まり、目の前を過ぎていく車の姿を見ながら青葉は次の言葉を待った。

「今までの三年間がすごく楽しかったから、それが終わっちゃうんだなって思うのはちょっと寂しい。それだけいっぱいいろんなことがあったからさ。でもその中で何よりも大きかったのは、やっぱり月島くんに会えたことかな」

面と向かってそう言われると、多少の気恥ずかしさはある。不意打ちというのは厄介だと、青葉は思わず視線を外した。言った水穂本人も青葉と同じ気持ちになったのか、少し頬を染めている。

「けどね、ほんとの話だから」

気恥ずかしそうにそのまま、水穂は言葉が続ける。いつの間にか信号は青に変わっていた。同じ歩幅で歩く二人の姿は、他人の目にどう映っているのだろうか。

「一年生のときにさ、中学校が一緒だった友達に彼氏ができたの。女の子ってそういう話大好きだから、すぐ食いつくんだよね。まああたしもその中の一人だから他の人のことは言えないんだけど。そのときに、好きな人がいるってどんな感じなの？ って聞いたらその子、『世界が五割増しで輝いて見える』って答えたの。そのときは、いくらなんでもその表現は大げさすぎるでしょってみんなで笑い飛ばしたんだけどさ。けど今考えるとその気持ち、よく分かるんだよね」

「それ、師屋さんも世界が輝いて見えてたってこと……？」

「待って月島くん、お願いだからそんな一歩引いたような感じで見ないで。それとはちょっと違うの。確かに世界が五割増しで輝いて見えるって言いたくなるのは分かるし、それもあるけど、あたしは学校に行くのが急に楽しくなったんだよね。ただ授業受けてってやってる中でも、好きな人の姿を見かけるとちょっと得した気持ちになるっていうか。あたしが月島くんのこと好きになったのってまだ二年生のときで、クラスも違ったし。今日は会えるかな、顔が見られるかな、今何してるんだろかな、なんて思いながら過ごしてて。だからクラスが一緒になったときはすごく嬉しかったし、毎日が幸せで本当に楽しかった」

過去を懐かしむ水穂は柔らかな笑みを浮かべている。それはまさしく、恋する乙女の顔だった。それが眩しくて、青葉は正面を見据える。目的地の駅はもうすぐそこだった。

「……師屋さんはどうして俺のことを好きになったの」

「月島くん、それを聞くのは野暮だと思うよ」

青葉の問いに、水穂は答える。それもそうだな、と青葉は頭を掻いた。

「月島くん、最後にこれだけ言わせて。お付き合いしてほしいっていうの、なかったことにしてってあたし言ったよね。そうは言ったけど、月島くんに対する好きっていう気持ちは、あたしの中にはまだ残ってるの。だから自分のこと好きだって思ってる女の子がいたってこと、覚えてくれると嬉しいな」

水穂はそう言うと、じゃあねと明るく言い残してその場を去って行った。青葉はその背中を黙って見送る。強がるような彼女の笑顔が、しばらく焼き付いて離れなかった。

「……浅葱、大学決まったのかな」

春休みに入ってから、浅葱の情報が途切れてしまった。そのせいか青葉の中で焦燥感が疼いている。そこまで考えてしまうならいっそのこと連絡してしまえばいいのだが、進路の問題が絡んでいるせいで踏み込めなかった。下手に地雷を踏んで取返しつかないことになるのはどうしても避けた

い。合格発表の日くらい聞いておけばよかったかもなと考えていたとき、手元に置いてあるスマホが震える。ちかちかと点滅する緑のランプが、メッセージを受信したことを示していた。

三月といっても、流れる空気はまだ冷たい。自転車だと尚更寒く感じる。桜並木を進んでいると、通い慣れた校舎が見えてくる。校門の前に佇む、薄茶の癖毛が目に入った。

「浅葱」

呼びかけた声は思った以上に上ずってしまった。全速力で自転車を飛ばしてきたせいか、喉の奥が締めつけられるように痛い。自転車を止めようとブレーキをかけると、タイヤの軋む音がアスファルトに響く。

彼はゆっくりとこちらを振り向くと、青葉を見つめて呆れたように笑った。

「そんなに焦らなくても、別にどこにも行きやしないのに」

「いや、なんつーか……。自分でもびっくりしてる」

酸素が行き渡ってないせいか、頭がうまく働いてくれない。大きく息を吸い、吐き出す。まずは、浅葱にとって大事なことから言わなければいけない。

「……大学、決まったってな」

「うん。今日合格発表でさ、先生に報告しなきゃいけないでしょ。だから学校来たの」

「てことはこれから忙しくなりそうだな」

「そうそう。春から一人暮らしだから、準備とか手続きとかでやることめちゃくちゃあるんだよね。ほんと勘弁してほしい。親は慌てすぎっつーか心配しすぎっつーかって感じだし。一人暮らしなんて大丈夫なのって、重く受け止めすぎなんだって。なんか、『あなたの娘を信じなさい』みたいなコマーションなかったっけ？ 今ほんとにそんな気持ち」

「溜まってんな。まあ親なんてそんなもんだって。けど寂しくなったらいつでも帰ってきていいんだからな？」

「青葉さ、俺のことなんだと思ってるの」

不機嫌そうに浅葱は呟く。青葉は、さあな、とそれをはぐらかすと言葉を続けた。

「引越しの準備、手伝ってやろうか」

「別にいいよ、青葉だって忙しいでしょ。そういえば青葉は大学決まったの」

「決まってる。けどどうせ家にいるから暇なんだよ。春休み入って俺がいたらしてるもんだから母親がうるせーの。なんか車校行かせようとしてるし」

「青葉もいろいろ溜まってんね」

「ま、お互い様だ。それより浅葱、今からどうすんだ。暇ならどっか寄って行かぬ」

「そうしたいところなんだけど、終わったら帰ってこいって言われてんだよね。お祝いしようって親が浮かれてる。俺以上に」

「じゃあ駅まで送る」

自転車を押しながら、青葉は浅葱の姿を横目で見ると、あることを思い出した。

「そういえばお前、師星さんに手紙送ってたな」

切り出した言葉に浅葱の歩みが止まる。なんでそのこと知ってるの、と言いつ返す浅葱の表情には、恥ずかしさが滲み出ている。

「ちょっといろいろあったんだよ。やることやってんじゃん、お前」

「どうせ卒業して会わなくなるんだし、もうどうにでもなれって思ってたさ。やけくそみたいなもんだよ。燻らせてばっかだったからちょっとはすっきりしたけど、面と向かって言えない辺りやっぱ俺はヘタレなんだろうね。というか思い出したくない。黒歴史確定だよ」

「そうか？ 行動に移しただけでも偉いと思うけど」

「……ほんと青葉って優しいよね」

「……ほっとけ」

青葉は空を見上げた。白く霞がかったそれに、飛行機雲が横切っている。

そろそろ自分のことを話さないといけない。そうは思っていたが、なかなか踏ん切りがつかなかった。本人を目の前になると、躊躇ってしまう自分がいる。

「……浅葱、向こうに移るのっていつ頃になりそう」

「それはまだ分からないけど、三月の終わりぐらいかな。どうかしたの」

「いや……。前に、お前に言っていないことがあるって話したじゃん。そのこと。今話してもいいんだけど、ちょっと心の準備がほしいっていうか。だからその時に話そうと思って」

浅葱は少々訝しげな様子を見せていたが、それ以上は何も聞いてこなかった。

「分かった、いいよ。引越しの日が決まったら連絡するから」

流れる空気に少しだけ春の匂いが混ざり始めた頃、浅葱から引越しの日が決まると連絡が入った。

入場券を買い、新幹線のホームに入る。まばらにいる人の中に、スーツケースとともに佇む浅葱の姿を見かけた。木のベンチに座り込み、スマホに向かっている。

「いたいた。浅葱、新幹線乗るまでは時間あるわけ」

声をかけると、スマホの画面から目を離れた浅葱と視線がぶつかった。青葉はベンチの空いている場所に座り込む。

「うん、まだ大丈夫。それで、言わなきゃいけないことって結局なんだったの？」

自分から切り出す前に、浅葱に切り出されてしまう。それなんだけど、と青葉は決心を固めた。

「謝らないといけないことがある。つっても学園祭の時のことだから、大分前なんだけど」

「……なんかあったっけ？」

「好きな人がいるっていう話。めちゃくちゃ紛らわしいこと言って悪かった」

「あ、それか。いいよ、もう気にしてないし。あのときは思わずかつとなっちゃっただけだから。後々冷静になって考えたらさ、青葉は好きな人が師星さんだなんて言っていないじゃんって。勝手に思

い込んで勝手に決めつけて自滅してっさ、なんというかもう……。自分が馬鹿すぎて言葉が見つからない」

「……その感じだと怒ってはなさげか」

「というより忘れてた。学園祭終わったら受験のことに神経使ってたから、どっか飛んでっちゃったのかも」

呆れたような困ったような、何とも言い難い難い笑顔を浅葱は浮かべている。青葉は拍子抜けしてしまった。自分だけがこんなにも気にしてしまっていたのか、そんなに重く考えることもなかったのかなどと思いはしたものの、本人がこの様子ならそれはそれで問題はないのだろう。ずるずる引きずって拗らせてしまうよりはよっぽどましなのかもしれない、などというろと考えていたときだった。「けどさ」

浅葱の一言で頭がリセットされる。次の言葉はなんとなく予想できた。

「そうなると、青葉の好きな人って誰なの？ 知られたら友達じゃいられなくなるかもみたいなこと言ってたけどさ。一応聞くけど、師星さんじゃないんだよね？」

「違う。師星さんではない」

「うーん。そうなら東雲さん？」

「なんでそこで東雲が出てくる」

「いや、俺と青葉に関わりある人で女子っていたらそのくらいしか思いつかなくてさ。けどよくよく考えたら青葉は分かるけど、俺と東雲さんってそこまで接点ないよね」

浅葱はしばらく考え込んでいたが、やがてホームの屋根を見つめて気の抜けた声を出す。

「だめだー、全然分かんない。結局誰なの？」

純粹な疑問と興味の色が、浅葱の声に混じる。ついにこの時が来てしまった。だがここまで来たら、もう後戻りはできない。今日はそのためにここに来たのだから。

青葉は一つ息をつくとき、彼に向かい合った。

「……お前だって言ったら、どうする」

ただ、薄茶の瞳が揺れていた。耐えられない沈黙に押し潰されそうになってしまっていたとき、浅葱が口を開いた。

「……ごめん、言ってる意味が分からない。からかっているわけじゃないんですよ」

「この状況で冗談言える馬鹿がどこにいる」

「……だよね」

浅葱は俯いてしまった。狼狽えるのも無理はない。浅葱としては異性の名前が出ると思っていたのだろうから、親友である自分の名前が出るなんて想像すらしていなかっただろう。

それでも、彼は青葉の言葉を受け入れてくれようとしているようだった。

「いつからなの」

そう言ってくれるなら、自分も言葉で示さなければならぬ。青葉は少し微笑んで、彼の右手にそっと触れた。

「いつからなんだろうな。ずっと仲はよかったし、恋愛相談もされてたわけだし。頑張れって思いな

がらも、知らないうちに嫉妬してたんだろうよ」

「答えになってない」

「分かってる。とりあえず最後まで聞いて。俺はさ、浅葱のことは俺が一番よく分かってると思ってる。だから浅葱が恋してた時期とか、応援する傍らずっと思ってたんだよ。俺だったら全部分かってやれんのかなって。最初はそんなもんだった。けど、夏に四人で祭り行ったときに、東雲に頼んでお前と師屋さんを二人にしようとしたことがあって。そのとき、もし二人がくっついたら俺と浅葱の関係って変わるんだろうなって思った。そう考えると、めちゃくちゃ複雑に思えてきて。俺の方がいいつのこと分かってやれんのに、なんで？ っつて。まあ杞憂なんだけど」

青葉はまた一つ息をつく。浅葱はただ黙って青葉のこを見つめていた。

「で、お前は失恋してダメージ食らってて。自覚したのはその頃かな。そういう状態だし尚更一緒にいてやりたいって。俺ならなんとでもしてやれるって思った。そのときは、自分でもどうなんだろうなって思った。ただ、一緒にいたいって思ってた。だから学園祭のとき、ああ言った」

「そこまで言い切って、また沈黙が訪れる。その空気を破ったのは、浅葱だった。」

「……けど、それは友達としてそう思ってくれてたわけなんですよ」

「最初はな。けど今の俺には、これが友情って言っているのかが分かんないんだよ」

「じゃあ聞き方変える。青葉は、俺と気持ち以上の関係になりたいって思う？」

「それはない。ただ独占欲が人一倍強いんだと思ってるよ。根本にあんのは愛しいって思う気持ちなんだらうけど、だからってそういうことしたいかって言われたら全然考えられなかった。恋愛経験も

そっちの経験もないのに何言ってるんだって思われそうだな、これ」

「それはそれで意外なんだけど……」

「うるせーよ、今どうでもいいんだよそれは。けどめっちゃお前のこと大事にしたいし、一緒にいたいって思ってるのは、事実。そういう気持ちがあるってこと」

「……うん、それでいいと思う。それは友達でもできることでしょ。それが自分の思う友情の形なんだって思えばいいんだよ」

浅葱は穏やかに笑う。それもそうだな、と青葉は笑い飛ばした。今まであれだけ考えていたことが、馬鹿らしく思えてきた。そして心に潜むもやもやも少しだけ晴れたような、そんな気がしていた。

「けど、青葉がそれだけ俺のこと大事に思ってるなんて考えたことなかったな。というかそこまで思われてたって考えたら、ちょっと恥ずかしいかも。けど嬉しい。自分のことで手一杯だったから、気づいてあげられなくてごめん」

「いいよ。俺が言いたかったのは、そういうこと。ちゃんと覚えて、よかった」

一緒にいられる時間の終わりは、刻一刻と迫っている。電光掲示板と、その横に設置されている時計を二人は仰いだ。間もなく、浅葱が乗る新幹線が到着しようとしている。

「乗るの、これだよな。切符なくすなよ？」

「分かってる」

滑り込んできた新幹線の扉が、音を立てる。降車客をやり過ぎすと、浅葱はケースを引きながらそれに乗り込んだ。扉の近くに立つ浅葱に、青葉は声をかける。

「この間も言ったけど、寂しくなったらいつでも帰ってきていいんだからな」

「青葉が寂しいだけじゃなくて？」

「うるせーな、ほっとけ」

そして、青葉はもう一度浅葱の右手に触れる。その指先は、ほんの少し冷たかった。

「……たまには連絡しろよ。俺もするから」

「うん、分かってるよ。お互い元気で頑張ろ」

発車のベルが鳴り響き、扉が閉まる。過ぎ去る車体と共にホームを吹き抜けていく強い風が、見送る人の髪を揺らしていた。



サナギの旅



田端敏之

最近、よくこんな夢を見る。

だだっ広い空間。静かで、暖かく、そして何も無いところ。

その空間を蝶が舞っている。何匹も、何匹も。ひらひら、ひらひらと皆それぞれに、空を舞っている。彼らは皆、サナギの姿から変身を遂げたばかりだった。

自分もその中に加わりたく願う。羽を広げて、一緒に空を飛ぶことを願う。

けれど、それは叶わなかった。

飛び立つことはおろか、動くこともできない。

俺はサナギのままだった。

地上からじっと動かぬまま、彼らの飛ぶさまを眺めている。空を眺めて、飛ぶ日が来るのを想像しながら、俺は眠っている。けれども、いつまでたっても俺の身体は動かない。ただ仲間たちが空に舞う様を眺めているだけ――。

そんな風にして、夢は終わり、俺はまた朝を迎える。

自分は何者だろうと、時々思うことがある。

俺は一体どんな人間だ。どんな人となりで、何が好みで、何が不得意で、どんな夢があるのか。年齢だけは二〇歳を越えて、けれども一番わかっていなければならぬはずのことが見えてなくて。それが時折不安になることがある。

初めは大した悩みとも思わなかった。誰にでも起こる気の迷いだ。大したことない。そのうち何とかなる。

けれど確実に、その不安は俺の心の中に存在し続け、少しずつ大きくなっていった。

そしてその不安は、全く予想もしていなかった形で、俺の目の前に現れたのである。



坂本渉が結婚するらしい。

そんな話を知ったのは、朝晩がそろそろひんやりとしてきた、秋の初めのことだった。本人がそういったのだから間違いない。自分の部屋で大学の課題に追われ、必死にパソコンの画面とにらめっこしながら文字を打ちこんでいたまさにその時、携帯がメッセージの着信を告げたのである。携帯の画面には短く、しかし驚くような文言が表示されていた。

渉◀ おつす。いきなりだけど、今度結婚することになりました。親愛なる友人にいち早くお知らせします 詳細は後日！

そのメッセージの意味を理解するにはしばらく時間がかかった。それだけピンと来なかったのだ。子どもの頃から知っている同級生が、ましてや俺の友人たる坂本渉が、「結婚します」などといきなり言ってきて、現実味がなさすぎて、ああそうですか、とすんなり理解することができなかった。……いやいやそんな、ご冗談を。

いくばくかの間をおいて返事を送る。まずは「おめでとう」が伝わりそうなスタンプをこれでもかと連投。続けざまに《相手はどここの姫君だ？》と打ち込む。もちろん冷やかしのつもりで。返事はそれほど間を置かずに画面上に出現した。

渉◀ 姫君WW大げさ
会社の先輩

——いやいや。いやいやいや、マジかよ。心配になって、もう少し食い下がる。

湯川昭利◀ マジで言ってる？
ていうか彼女いたのかよ

渉◀ いきなりだからね。悪い、ビックリさせたよな。でもほんとなんだ。付き合ってる子と今度結婚する

渉◀ わりい訂正結婚というか、プロポーズ成功しましたって報告
まあどっちみち結婚はちゃんとするよ

湯川昭利◀ ホントのホントか？

渉◀ 嘘言っつてどうするのよ

「……マジかよ」

口ぶりからして、どうやらヤツは大真面目のようだった。とりあえず返事を送る。

湯川昭利▽ おめでとうだな！今度じっくり話を聞かせてくれたまへ！

黒光りのマッチョマンがグーサインで「あたぼうよ！」と言っているスタンプが返ってきた。どこから拾ってくるんだこんなもの。

いつなら会えるんだと聞いてみれば、この週末の日曜の夜なら会えるという。最近はなかなか顔を合わせる機会もない。どうせなら直接会って、付き合ってる彼女のこと、いつからくつついているのか、なんてことを根掘り葉掘り聞いてやれ。今日が週初めで良かった。日曜にバイトを入れてはいたが、今ならまだシフトの調整がきくだろう。

では日曜に会って飯でも食おう、という約束をしたのち、俺たちは交信を終えた。

携帯を持ったまま、俺は椅子にもたれかかって上を見上げた。見慣れた自分の部屋の天井が恐ろしく高く見えた。そう感じてしまうほど、実感がわかなかった。

「……そうかそうか」

自分の今の心境をうまく表現できるわけでもなく、言葉ばかりが口の中で反芻される。

あーそうですかそうですか、坂本涉さんご結婚ですか。すでに社会人とはいえそうですね。結婚しちゃいますか。いやーめでたいような、悔しいような、そうですね、でもまあなんでしょうなあ、そうですね。

うかそうか……。

何度考えても実感がわかず、モヤモヤとした感覚ばかりが渦巻いていた。

別に親友の結婚話だけが原因というわけではないのだが、ここ最近、どうも心がモヤモヤとしていて気がしてならなかった。

大学三年生の年になって、いよいよ人生の選択をあれこれについて、これ以上ないくらいに真剣に考えざるを得ない時期に差し掛かってきた。就職先についてしっかりと考えろだの、単位はしっかりと取っとけだの、大学からしつこく釘を刺されるようになった。

そりゃ確かに、就職先がなければ生活できない。単位が足りてなきゃ卒業もできない。怖や怖や。でもまだ考えなくてもいいじゃないかまだ三年生だぜ、などと考えている自分もいることも確かだ。せつかくのモラトリアムをこっちは謳歌しているんだ、せめてもう少し就職云々は後にしてくれ。でもだからって、自分の未来が全く描けないままでもいいのか。不安は常に目の前をチラついていた。モヤモヤしている原因がもう一つ。俺の学業に関わることだ。

俺の大学生活は、おそらく人よりユニークだ。大学で文芸創作を学べるカリキュラムが設けられており、俺はそこで文芸創作——詳しく言えば小説の執筆について学んできた。昔から物語を文章で生み出すということに憧れを抱いていた自分にとっては非常に魅力的だったのだ。

卒業のためには卒業論文ならぬ、卒業制作という形で小説を書き上げる必要がある。それに向けて腕を磨いていかねばならない今日この頃、なのだが。

「湯川君」

所属している文芸サークルで集まった時、部長からそんな風に声をかけられた。

「最近どう？ 作品書けてる？」

「うっ。あー、ちよっと進捗まだです、的な……わりい」

俺と同じ三年生の部長は、だよなー、と苦笑した。

「やっぱりこの時期は忙しいよねえ。いやー湯川くん、これまでたくさん作品書いてくれてたからさ。今年はその誌に載せるの難しそう？」

「短いのでいいなら、多分いけるけど……どうも最近思うように書けてなくて」

「まあ、無理にとは言わないけどさ。載せるんなら、早めに出しといてね。もうあんまり時間ないし」

「ゴメンね、申し訳ない……」

スランプ、という言葉で片づけたくはないのだが、最近はそのような文章を書いていなかった。授業の課題で出されたものにしても、サークル用に書くにしても、毎度紡ぐ文章が、ひどく稚拙で、グダグダなものに見えてしまう。納得できるものを書けない、表現できないという行き詰まりがあったのだ。

そう、とにかくモヤモヤとする。小説は書けない、自分の行く先も見えない、おまけに親友はオトナの世界に羽ばたこうとしている。

——そうだ、それか。いろいろ考えているうちに、ふと一つの仮説に行き当たった。もしかしてモヤモヤの正体はそういうことだったのか。

大人。そう、オトナ。大人であること。坂本は大人だ。何せ結婚するのだから。彼だけじゃない。学校のやつらも、バイト先の仲間も、そういえばみんな俺よりもオトナの雰囲気を持っているような気がする。あくまで気がするだけだけど。

では、俺はどうだ？ 俺は果たして大人になっているだろうか。二〇歳を越えている、という年齢的なことではなく、もっと精神的な成長という意味で、まだ大人になり切れていないのではないか？ 彼女がいるわけでもない。自分が成長しているなんて実感もない。うだうだと言いつつ小説も書けない、自分の将来も考えないバカ野郎——とまで言うときすがに言い過ぎかもしれないが——今の自分は、少なくとも大人になり切れてはいない。むしろガキに近いのではないだろうか。それを心のどこかで薄々感じていて、焦って、不安にかられているんじゃないだろうか？

すなわち、俺の周りほとんど大人になっていって、俺は取り残されたまま、子どものままでいるのではないか——そんな考えが、いつの間にか頭を何度もかすめるようになっていた。最近見る夢の通りだ。みんながどんどん子どもの皮を破って飛び立っていくなかで、自分はサナギのまま眠りかけてるんじゃないだろうか。いやまあ、眠りかけているのはおかしいか。でも結局、自分が成長できてないってことを心配するせいで、へんてこな夢を見るわ、執筆ははかどらないわ、なんてこと

になつてるんじゃないだろうか。何とかしなきゃそろそろヤバくないか。俺もいい加減、大人にならなきゃならないんじゃないか？ 考え出すと余計にそう思えてきてしまう。

少なくとも、曇っている自分の気持ちをどうにかするために、何かしらの気分転換が必要だった。少しでもいいから気持ちを切り替えて、残りの大学生活をしつかりと謳歌できるようにするためのきっかけが欲しかった。

そして思いついたのが、

「……そうだ。旅に出よう」

閃いたのは、なぜかコンビニのバイトでレジに立っていた時だった。

我ながらアホな考えだとは思う。いわば自分探しの旅。うわあ、自分探しの旅。カッコいいんだか悪いんだか。恐らく後者だ。こんなことを考えてる時点でガキ臭えか？

でもその時は確かに名案だと思ったのだ。近場でも構わないから、普段あまり行かないような場所に行き、心身のリフレッシュを図る。いいんじゃないか？ ちょうど季節も涼しくていい感じだ、旅するにはもってこいだろう。ついでに出先で少しでも原稿を進めてみよう。環境が違ふところと書くと、案外いいアイデアが浮かんだりするかもしれない。

「店長。今度の土日、お休みもらえませんか」

仕事が終わった後、俺は上司に掛け合った。うちの店長やオーナーは、ありがたいことにスタッフ

に対して心配になるくらい優しい。休みが欲しい時なんかにもこうして申請すれば、大概あっさり許可を出してくれる。

「いいけど、何の理由で？」

「……ええと」

ただし、休みを取るときは理由を言うのが暗黙の了解だ。

「……バカらしいかと思いますが、いいですか」

「いいから言ってみなよ」

「……ちよつと旅というか。遠出したいなって思ってた」

「ほおお、旅ね！ いいねえ。お前も立派に青春してるじゃないの！」

そして店長は、あっさりシフトを変えることを認めてくれた。俺も昔そんな時期があったよお懐かしいなあ、なんて言いながらケラケラ笑っている。この優しさよ。ここでバイトを続けていられるのも、上司の底知れない優しさがあったからこそだ。感謝。

「その代わり、来週多く入ってもらうかもよ」

うへえ、ブラック。

「冗談冗談。まあ楽しんできなさい。代わりにスタッフ確保だけよろしくね。ハハハハ……」

かくして、俺はリフレッシュするため、そして自分自身を見つめ直すために、小旅行をすることになったのである。

明日からの旅に向けて荷物をまとめる——といってもたいしたものはない。着替えに筆記用具にルーズリーフ、それから愛用の小さくて軽いノートパソコン。あとは財布に携帯があれば、男子大学生の一人旅には十分すぎるぐらいだろう。

しかし何だか、まあ……カッコ悪いなあと思ってしまうのは、なぜなんだろうか。



Age:13 恋する

「何ニヤついてるんだ、お前」

入学式も終わって数日後。昼休みの教室で、坂本渉はニヤニヤと笑う友人に問いかけた。

「別に。ちょっと妄想してただけ」

「きつも」

「なんでさ」

「妄想とか、オタクかよ。また『モンコレ』のことでも考えてんじゃねーのか」

「ゲームのことじゃないやい」

メガネを指で押し上げながら、湯川昭利は唇を尖らせてみせた。そしてふと、そうだとわざとらしく膝を打った。

「そうだお前さ。久しぶりに家に遊びに来ない？」

「お前んち？ まあ、言われてみりゃ確かに久しぶりだけど」

彼とは昔から遊ぶ中ではあるが、確かに最近は二人で遊ぶ機会を持たずにいた。

「いいよ。また通信対戦でもするか？」

「『モンスターコレクション』は俺の中じゃあもう古い。今は別のマイブームがあるんだ」

「マイブーム？ 何だかよくわかんないけど……お前んちに行けばいいんだな？」

「ああ。お前にも俺のムーブメントを味わってもらおうかな」

「……何を言ってるのかはよくわからんけど、『モンコレ』も持って行こうか？」

「……ゲット出来ないヤツがいてさ。協力してもらえる？」

「そらみろ。何が古い、だ」

「でもな！ でも、それはあくまでついだ。メインは違うからな？」

「はいはい。お前ん家ね」

「おうともよ。待ってるぜ」

メガネをわざとらしく押し上げて、湯川は笑った。

「小説家に、俺はなるっ！」

「……は？」

唐突な湯川の宣言に、坂本は眉をひそめた。部屋に入るなりこれだ。坂本でなくとも、その突然の行動には言葉を失うに違いない。来客が部屋の戸を閉めた途端、部屋の主はいきなり——親が出払っているのをいいことに——大音声に呼ばわったのである。

「何だよいきなり」

「おう聞いてくれ、聞いてくださいよワタル殿」

「……その満面の笑みで詰め寄ってくるの止める鬱陶しい」

「ん？ どうすりゃいい？ もっと口角上げた方がいい？」

「誰が笑い方を何とかしろつつた。ああだから、顔が近いキモい！ 寄るな！」

興奮すると大げさな行動にはしるのが、湯川の悪い癖だ。満面の笑みで迫ってくる湯川を坂本はどうにか押しとどめた。

「落ち着け……何だ、小説家になるって？」

「そうそうそう」

「なれねーだろ」

「は？ 何故にいきなり全否定？」

「んなこと言われても。いきなり何言ってるのこイツって感じだし」

「どういことさ」

「現実味がないって話だよ」

「あるよ。俺の小説バカ売れ。印税ガッポガッポ。俺の人生ウハウハ。ほら現実味バッチリ、証明終了、L・E・D！」

ノリノリで湯川はまた坂本に迫ったが、坂本の表情はますます困惑のそれに代わるばかりだった。

「……一応言っとくけど、LEDって、ライトとかの照明のことじゃないのか」

「……あ、そっか」

「それを言うなら、確か、Q・E・Dだったと思うがな。……なあ。他にもいろいろツッコミたいんだがいいか」

「いいけど」

「まずさ、さっき言ったた人生設計、ただの非現実的妄想にしかなくてないと思うんだが。それと、そもそもどうして作家目指す気になったんですか。いきなり小説家になるって言われたって、どう反応すればいいのかわかんねえよ。以上」

言い終わるころには、坂本の顔はほとんど呆れたような表情になっていた。

「んなにいつぺんに言われてもな」

「別に全部答えなくてもいいつつの。……まあ、せめて何で作家になりたくなかったかぐらい教えてもらわないと、共感もできねーだろって話」

「なるほどな。なら見せてやる」

「……何を？」

湯川は部屋の奥に無造作に積まれた文庫本の山に手を伸ばしていた。積み重ねていたうちから、上から数冊を手にとって坂本に差し出す。

「これを読めば君も書きたくなる」

「……そんなものかねえ」

言いながらも坂本はその本の表紙に目をやった。いわゆるライトノベルという種類の本だった。アニメやマンガでありがちな、可愛らしくデザインされた女の子が、『生徒会長、お願いしますッ!』というタイトルと共に表紙にレイアウトされている。

「面白いの、これ」

「まあね。メインヒロインが好みでさ」

開いて見せたページには、なるほど生徒会長と思わしき、黒髪ポニーテールの女の子がポーズを決めている。唇に人差し指を当ててウインク。

「あざといよなー、東雲しのぶ会長。そこがいいんだけどね。このかわいさに、時折エロさを交えてくんの
もまた、たまらないっーかさ」

お前はそういうのが好きなのか、と坂本は心の中で呟いていた。

「これがお前が作家になりたいと思っただ理由か」

「あー、正確には違うんだ。こういうラノベの世界をお前が知ってんのかなと思っただけで、試しに見せてみたんだ……本命はこっち」

今度は積まれた本の塔の中ほどから一冊引き抜かれた。バランスが崩れ、上の方から本が何冊か落

ちた。

「……『崩壊世界のリペアリスト』。それが?」

「貸すよ。ぜひ読んでみてくれたまえ」

自信あり、と言わんばかりに湯川は件の本を坂本に差し出した。裏表紙を見ると大まかなあらすじが書いてある。

崩壊世界グラン・シャド。大いなる厄によって崩れ去った楽園に住む少年・クレイは世界を修復できる《修復者リペアリスト》の力を持っていた。魔獣や精霊が我が物顔で蠢く世界で身を隠すように生きてきた彼の人生は、《神域》で目覚めた旧世界の少女・カルナとの運命的な出会いによって一変する。「クレイ——貴方しか、世界を救えないの」

第14回丸河エンタ新人賞《優秀賞》受賞!本格異世界ボーイミーツガール、誕生。

「……どんな話かすぐわかるもんなんだな」

「面白そうだろ?」

「いや、中二病的内容だっただけはわかったから、もういいかなーって」

「読ーめーよお!」

「その顔、ムカつくから殴っていいか?」

「暴力反対。……いや、俺もまあ、今の顔はキモいんだろうなって思いながらやってた」

「思うぐらいなら初めからやんな」

「なあなあなあ。やっぱりふくれっ面とか前髪パツンつてのは、ラノベに出てくる女の子がやってくるからこそ映えるのかな」

「知らねえよ。いきなり何の話だ」

「メインヒロインに似合う表情と髪形についての討論」

「してねえよいつからそんな話になったんだよ」

ため息をついて、今一度坂本は手に取ったその本を開きながら言った。

「で？ 結局この本が何だって？」

「おおそうだその話をしてたんだって……それ、書いてある通り優秀賞受賞作品なのさ」

「ああ。この丸河ナントカってやつか」

「丸河エンタ小説大賞だ。すげくねーか？ 新人賞だけ。一般の人が応募して、それが選ばれて、本になって、本屋に並んで、俺たちが読める。これってすごくね？」

「……まあ、な。すごいだろうな、知らんけど」

「これな、応募要項見たらさ、プロアマ問わず、年齢問わずってあるのよ。つまり誰でも出して構わないってことだろ」

「……まあそうなるな」

「これってさ。俺も小説書いたら、ひょっとしたら受賞のチャンスがあるってことだな？」

「……何だ？ 書いたのか」

「よくぞ聞いてくれましたっ！」

目をキラキラさせながら、湯川はA4サイズの紙の束を差し出した。

「どうだ。まだプロログしか書いてないんだけど。これをぜひ次の締め切りまでに書き上げて、投稿してやろうと思ってる。俺のデビュー作だぞ」

「デビューもなにも、まだ完成もしてないんじゃないか……これを読めってか」

「感想よろ」

「そんなに早く読めるかよ……」

とは言いつつも、坂本はページをめくって目を通し始める。縦書きのワープロ打ちで、黒い活字がびっしりと——ほとぼしる情熱が如実に見て取れるほどに——紙面を埋め尽くしていた。「どこにも逃げ場はないぞ！ 聖騎士レイド！」という、悪役らしい登場人物のセリフに始まって、主人公の絶体絶命のシーンが描かれている。そして最後には追い詰められた聖騎士レイドの前に、救世主の如く現れたメインヒロインの姿——スタイル抜群の美少女という設定らしい——の描写で終わっている。

坂本が顔をあげた瞬間、湯川は目をキラキラさせながら感想を求めた。

「どーだった？ どーだった？」

「ダメだろ」

「全否定ホワイ！」

またもうるさい声を張り上げた湯川を、坂本が原稿をハリセン代わりにして制する。

「いちいちうるせえ。……あのさ、まず読みづらい。例えばここ」

坂本は文を指で指し示した。『ザアザアと雨が降ってる。聖騎士はハアハアを息を付き、ガクッと膝をおとした。ピカッと光がシュッと走ってゴロゴロゴロッ！雷が鳴ってレイドの姿を映し出す。ゴゴゴゴゴゴ……と彼は敵が放つ気を感じていた——』とある。

「マンガチックでわかりやすいだろ。こういうのオノマトペっていうんだっけ？」

「それ失敗な。読みにくいし、見た目が幼稚だし。それからこの、銀髪でロングヘアっていうヒロイン」
「おお、我らが主人公レイドを導く守護天使、エレナだな。それがどうした」

「これのバクリだろ」

手に取った『崩壊世界のリペアリスト』の表紙に描かれているヒロイン、カルナの容姿は、湯川の小説に描かれたエレナの容姿とほとんど同じだった。しかし湯川の顔から自信の色が抜けることはない。「バクリじゃない、これはオマーージュだ」

「上手いこと言って誤魔化してんじゃねーよ！」

「うーむ、オリジナリティを重視して書いてきたつもりなんだけど。やはり少なからず影響が出てしまったのだなあ……」

額に手を当ててブツブツ考え事を始めた湯川に、坂本は呆れてため息をついた。

「まあ、がんばれや。そんな調子じゃ、ドーセ大したものも書けやしないだろうけど」

「言ったな。見てろ、絶対賞取ってデビューしてやるから……そうだ。お前にこの本貸すよ。お前にも布教してやる」

「布教？」

「安心してくれ。好きな本に関しては最低三冊買うようにしているんだ。保存用、閲覧用、布教用。」

お前にもこの『崩壊世界のリペアリスト』の良さを分かってもらった上で、一緒に語ろうじゃないか」
手渡された文庫を見て坂本は微妙な表情を浮かべた。

「まあ、読ませてもらうけどよ。にしても何とというか……まあ……すごいな、お前」

「ありがと。お前の言う通り、実力は全然だけどな」

「金の無駄遣いが」

「そっちなよ！」

坂本はやれやれとため息をついた。

湯川が小説に目覚めたのは最近のことだ。これまではゲームに興じたり、家族に隠れてこそこそと深夜アニメを見たり、というのが彼の楽しみだった。しかし、深夜アニメには大概原作があり、中には小説を原作にする場合もあるらしいということを知った彼は、興味本位で書店に並ぶライトノベルを手にとった。これまでは活字に触れる事が少なかった彼だが、今ではすっかりライトノベルに心酔するまでになっていた。

中学に入ってこの方、彼は暇さえあれば愛読するライトノベルのキャラクターたちを愛で、物語に思いをはせるようになっていた。さらにはもつと物語を読みたいという思いが転じて、自分で話を

作ってみたいという欲求にかられ、自由気ままにファンタジックな世界を空想するようになっていたのである。

それは例えば授業中にも行われた。

まだ夏というには早いものの、五月の日差しは確実にその強さを増しつつあった。陽の光に暖められた空気が、換気のために開けていた窓の隙間から入り込んでくる。ちょうどその風は窓際に座る湯川の席を通り過ぎていった。

暖かな陽気に、優しく吹く風。加えて昼休憩後の彼の苦手な数学の授業。担当の年配の先生の声が念仏のように聞こえてくる。

眠気にかけてうつらうつらし始めた湯川の耳に、先生に当てられた生徒の声が届いた。

「じゃあ二宮。前の問題やってみて」

「はい」

一人の女子生徒が、前に出て黒板に書かれた問題を解き始めた。その姿に湯川の目はにわか覚醒し、その後ろ姿を追っていた。

彼女——二宮佳奈の姿を入学して最初のホームルームで見たととき、湯川は胸元を優しく絞められたような感覚を覚えた。

『二宮佳奈です。小学生の頃からバレーをやっています。よろしくお願ひします』

最初の自己紹介で、澄んだ声でそう言っていた彼女を、湯川は思わず見つめてしまっていた。ほっそりとしたスポーティな立ち姿。小さく整った顔立ちに大きな瞳が印象的な美人だった。彼女と目が合いそうになって、あわてて視線をそらしたほどだった。

おそらくこれが一目ぼれなのだろうと、彼はこの経験したことのない心情の変化を分析した。そしてその一目ぼれの効果はその後も持続し、こうして彼女の名前を聞くだけでも、湯川の心はかすかにざわめくのだった。

カッカッ、と二宮は黒板に回答を書いていく。スポーツもできるし、勉強もできる。まるでメインヒロインのようにじゃないか、と湯川はぼんやり思っていた。そうだ、今考えている冒険ものの話のヒロイン、細かいキャラクター設定がまだ詰めきれてないや。魔法の設定も考えないと。ああでも、呪文を本格的にしようと思ったら、やっぱり海外の古い言葉とか勉強した方がいいのかな——早くも彼の頭の中は、授業に出てくる数式よりも執筆中の小説のアイデアの方が多く湧き出し始めている。

さっと風が部屋の中に吹いて、湯川の頬を掠めていく。その風はゆっくりと天井へと飛び、天井をも突き抜けて再び大空へ。この時すでに彼の意識は、彼の夢うつつの世界へと飛んでしまっていた。物理法則も社会の常識も、何もかも超越できる空想の世界へと。

——主人公は魔法の力で宙を飛んでいた。雲の間をすり抜けて、風を切り、宇宙と大地にはさまれた青い空間を浮遊する。目の前に見えてくるのは、豊かな緑が一面に広がる島——空に浮かぶ天空の大地の美しい姿だ。主人公であるところの、湯川の顔をした勇者レイドは、この島に出没するという怪物、ワイバーンの討伐のためにやってきたのである。

遠くには山々が連なり、その麓から樹海が広がっている。緑生い茂る大地の片隅に、拠点となるテントが設営された草原があった。天空の島々にそれぞれ設置されているという勇者のためのベースキャンプ。竜の頑健な骨格や皮を素材に建てられ、長期滞在にも悪天候にも耐えうるこの拠点から、仕事の依頼を受けた勇者は冒険に挑んでいくのである。彼はそこ目掛けてゆつくりと降下していった。

ベースキャンプには先客がいた。

「あら、あなたが新しい勇者くんかしら？」

大きな水晶付きの魔法の杖を持った、白装束の魔女・エレナが言った。湯川の考えたオリジナルキャラクター。彼が特にお気に入りしているキャラのひとつである。

もっとも、その顔立ちはどう見ても二宮のそれであったが、これもまた湯川の妄想世界ゆえである。

「ああ。僕がレイドだ。君が魔女のエレナだね？」

「そうよ……何だかあなた、頼りがいがないなそんな顔してるけど。ホントに大丈夫でしょうね？」

「そ、そんなことねーよ。そりゃあまだ未熟かもだけど」
「ふーん……ま、いいけど」

現実世界の二宮はこんな口調ではない。もう少し丁寧なのだが、妄想の補正がかかっているせいで、いかにもアニメのヒロインがやりそうな表情やセリフをやってみせるのである。

「じゃあ、勇者くん。聞いているとは思うけど、今度の依頼の確認よ。この島に巣食うワイバーン級ドラゴンの討伐を——聞いている？」

「聞いているよ」

聞きながらも、レイドは——もといそういう設定になりきっている湯川は、これから彼女とともに練り広げられていくであろう冒険に思いを馳せていた。

これからこの二人でさまざまな冒険を乗り越えていくことになるだろう。数知れぬ怪物を退治して、邪悪な魔法使いと戦って、道中いろんな能力を持った旅の仲間と出会って、旅を進めるごとに二宮そっくりな魔女エレナとの絆が深まって、そしてゆくゆくは——。

と、鼻の下を伸ばしていた勇者は、エレナの顔がさっと青ざめたのに気がついた。

「どうした？」

「……今……後ろの方から何かが——」

彼女はゆつくりと背後の山々を振り向いた。一面緑で覆い尽くされた広大な山林。

瞬間、遠くの木々がざわめいたかと思うと、荒々しい咆哮がそこから響いてきた。大地を震わせ、何かが森の中を突き進んでくる。乱暴に揺らされた森の木々が波となって、

ベースキャンプの方に向かって一直線に向かってくる。

「……エレナ。何あれ」

「……私が聞きたい」

バキバキ、メキメキ。遠くから木が無理やり引き倒されていく音。どんどんそれは近づいてくる。そして二人のいるベースキャンプまで近づいてきたときには、その怪物の咆哮と足音が、すさまじい地響きとなって押し寄せてきていた。

森の木々をなぎ倒して現れたのは、体長一〇〇メートルはありそうなオオトカゲ——少なくとも見た目はそっくりな化け物——だった。

「逃げろおっ！」

大怪物の姿を認めたたん、勇者は全速力でダッシュしていた。

「ちょっと！ 置いてかないでよ！ てか、勇者でしょ君！ 戦いなさいよ！」

「俺はっ！ ワイバーンを狩りに来たんであってっ！ あんなデカブツと戦うなんてっ！ 聞いてないっ！」

「私だって予想外よっ、こんなのが乱入してくるなんて！」

オオトカゲはその巨体に似合わず俊敏だった。巨大な四肢を使って力強く前進しながら、慌てて逃げる二人との距離をみるみるうちに詰めていく。

「エレナ！ お前魔女なんだろう、魔法とかで何とかしてくれよ！」

「無理よっ！ あんなの相手した事ないんだもん！」

「何かないのかよ、便利な道具とか、マグロの餌トラップとかさっ！」

「んなものあるわけないでしょっ！ 何よマグロって！」

「ハリウッド映画であるんだよっ！」

「知らないわよそんなのっ！」

グガア、と牙をむき出しにしてトカゲが吼え、二人がヒイイと悲鳴をあげた。ダラダラとヨダレを垂らしながら猛進してくる怪物に、二人は死に物狂いで走って逃げ、

「あだっ！」

そして湯川が盛大にコケた。

「勇者くん!？」

エレナが叫んだ時には、追いついたオオトカゲの足が勇者の頭上に迫っていた。怪物の巨体を支える強靱な足が、とてつもない質量を伴って湯川に襲いかかる。

「うわあああっ！ 潰れるうううっ！」

そして勇者の身体は、巨大なトカゲの足の影に吞まれて――。

「あだっ！」

「おい、起きんかい」

教科書で頭をはたかれて、湯川は目が覚めた。顔を上げると、いつの間にか先生が呆れた顔をしてすぐ横に立っていた。教室のあちこちからクスクスと笑う声が漏れ聞こえてくる。何が起きている

のかよくわからず、寝起きの頭のままゆっくりとあたりを見回した。坂本はやれやれといったような表情でこちらを見ている。そして二宮もクスクスと笑っている。

——そうだ。俺今、すんごく恥ずかしい夢を見ていた気がする。

「ほれ、湯川。はよお前に出て問題解決」

ようやく湯川は自分が先生に当てられたことを理解した。

前に出てチョークを持ったものの、寝ぼけた頭が災いしたのか、書いた答えは見事に不正解となった。



Age:21 旅する

プロオオオオオオオオ。

流石に二〇年前の車ともなると、エンジン音がいささかうるさく感じられる。

父親がちょうど俺が生まれた年に買ったというこの黄色いスポーツカーは、未だこうして人を遠くまで運ぶ輸送装置としての機能を果たしてくれている。二人乗りの車内は長年のタバコの香りが染み付いて、どこか煤けている。カーステレオはいまだにカセットテープ式。車の中で聞くのは大概ラジ

オ番組だ。

旅に出たはいいが、とりあえずガソリンが底をつきそうなので、ひとまず給油のために車を走らせている次第。よく利用しているスタンドまではもう少した。自販機が置いてあるから、ついでにコーヒーも買おう。

プロオオオオオオオオ。

「オーライ、オーライ」

セルフサービスの店が多い中、このスタンドではスタッフが給油から何までしっかり世話をしてくれる。人にやってもらえるのはありがたいし、安心できる。

停車位置にピッタリと止めると、若い店員が窓際まで近寄ってきた。

「らっしやいませえ——あれ」

一瞬、店員は不思議そうな顔をした。

「もしかして……湯川か？」

「え？ ……あ。お前もしかして、井上か？」

それは中学の時一緒だった井上だった。別段、そこまで交友があったわけではない。確か二年のころだったか、クラスが一緒になった程度だ。おお、そうかそうか。お前ここで働いてたとは知らな

かった。でも俺、結構前からここには通ってるんだぜ？

「ああ、シフト変わってさ。前まで夜メインだったんだけど、昼にも入るようになってね」
ほう、大変だな。

「まあね。——給油でよろしいですか？」

その一言で、俺は目の前にいる人物の立ち位置が、元クラスメートからいちガソリンスタンドの店員にシフトしたことに気がついた。そうだ、俺給油しにきてるんだった。

「あつと……レギュラー満タンで」

「レギュラー満タンで。吸い殻の回収はかがしましょう」

「ああ、いや、タバコはやってなくて」

失礼いたしました、と井上は丁寧な受け答えをした。車内の清掃に使ってくださいと濡れタオルを手渡してきた。その動きは何ともこなれていて、キビキビとしていた。態度がきっちりしているという意味において、彼の姿は少なくとも、俺の記憶にある中学生の時のそれと比べれば、一〇〇倍も大人に見えた。まあそこまで交友があったわけではないけれども。

渡されたタオルで車内の手垢がつきやすそうなところをちょこちょこ掃除する。外では井上がすでに給油を始め、テキパキとフロントガラスを拭いている。俺はそんな彼の働きぶりをしばらく観察していた。

しばらくして、給油口を締め終わった井上が再び運転席側の窓を叩いた。

「お待ちせいたしました、お支払い方法は……」

「現金で」

さすがにクレジットカードなんて大層なものを持ってない。

「……古い車だな。綺麗にしてあるけど」

ふと、井上の口調が同級生のそれに戻った。彼は物珍しそうな顔でこのスポーツカーを見ている。そんなに珍しいかな。売り出された頃はかなりの人気車種だったらしいのだけれど。

「俺の親父のだからな、もともと」

「へえ。維持すんのも大変だろ。古い車種って税金かかるって話だろ」

確かに。取り立てが大変だよと親がおどけて言っていたのを覚えている。父親が車好きでなかったらとつこの昔に廃車にしていたに違いない。なんで新しいのに代えないの、と親に聞いたことがある。

『そりゃ、お前が生まれた記念に買ったもんだからね。なかなか愛着もあるしな』

それほど思い入れのある車を、乗りつぶして運転経験積んどけと言って、あっさり俺に貸し出してしまうというのともうかと思うが。清算も済ませ、掃除に使ったタオルも返却する。

「じゃあ、ありがとな。またばったり会うかも」

「俺、土日は大概入ってるぜ」

「ではその時はよろしく」

そうして俺は、井上の流れるような誘導に従ってスタンドを出た。ありがとうございましたあー、と威勢のいい声と共に見送られる。バックミラー越しに、きっちりとした角度で頭を下げ続けている店員の姿が見えた。

……しまった。コーヒー買うの忘れた。コンビニ寄るか。効率悪いなあ。

コンビニでドリップコーヒーを頼み、車内に戻る。この店、店員さんの声の通りが良かった。俺ぼそぼそ言いがちだから、反省。

淹れたてを少しずつ口に含みながら、俺は携帯の地図アプリを表示させた。目的地への経路が青い線で示されている。アチツ、含みすぎた。

車を使うとはいえ、二日間の休みの中で強行軍が可能、かつそれなりに自然があつてリラックスできそうなところとなると、案外足を伸ばせる範囲は限られてくる。加えて坂本との約束を守ろうと思つたら、日曜の夕方には街に戻つたほうがよいだろう。時間的制約というのもまた行き先を決める上でネックになる。

結局考え付いたのが、中学の野外活動で行つたことがある、磐田島^{いわた}だった。内海の中に点在しているものの一つで、フェリーに乗れば二〇分ほどでついてしまうようなところだ。

中学一年のころ、その島にある磐田少年自然の家——確かそんな感じの名前だった——という施設で、全クラスの生徒と教員が二泊三日を過ごした。みんなでカレーを作つたりキャンプファイアの火を囲んだりしたものだ。

朝いちにふと、この施設のことを思い出したのである。考えてみると、なかなか良い行き先ではないだろうか？ 海という物理的な仕切りを隔てた、島という世界。缶詰めてわけじゃないけど、普

段生活する場所から離れてリフレッシュを図るといふ今回の旅の目的からすれば、かなり魅力的なのではないか。しかも中学の思い出が残る場所。いいじゃない。そんなことを思いながら、車のエンジンをかけて家を出た。

だが、それ以外のことをろくに決めていない。飯の当ても、宿もどうなるかわからない、言うなれば出たとこ勝負。今だつてこうして、行き先の経路を確かめているところなのだ。本来ならせめて前日までにはチェックすべきものを。

「フェリーの時間を調べないといかん」

磐田島までは船に乗らないといけない。が、こういうものは慣れていないので、いまいち勝手がわからなかった。お金かかったりするのかな。普段乗らない公共交通機関というもののほど、とつつきにくいものはない。どれ、料金は——。

「ゲツ、二〇〇〇円オーバーって……」

こんなに取られるのか。やっぱり事前に調べときやよかつた。ていうか、船乗るのつてそんなに高いのかよ。二〇分で二〇〇〇円。一分につき一〇〇〇円の消費。……やめよう、意味のない計算だ。

「行くか」

コーヒーはすっかり空になってしまっていた。エンジンをかけ、コンビニを後にする。

せっかくのドライブ、そして懐かしい場所へと出かけるのだから、どうせなら楽しんでいこう。リフレッシュ、リフレッシュ。フェリーでの船旅、いいじゃないの。潮風に当たりながら船に揺られて島の自然の中を車でひとつ走り。今日は天気もいいから画になること間違いなし。きつと気分転換も

うまくいって、執筆もすらすら進むように、

「なるかなあ……」

そうはいつても、心の中はやはりモヤモヤとはしていた。書けるのか本当に。車のギヤを入れ直しながら俺は思った。

書けない、というと語弊がある。小説の書き方を忘れてしまったというわけではない。

ただ、それらしい文章を書くことができても、納得できるものを書いている実感がなかった。その文章が果たして、自分が書きたいように書いているのか、自分が表現したいと思っていることが表現できているのか、そもそも面白くかけているのか。そんな考えがキーボードを叩くたび頭をよぎっていくようになっていた。

赤信号になった。車を止め、俺はホウと息をつく。

一言でいえば、自信がないのだった。

いざこうして考えてみるとおかしなものだ。「表現したい」と思うから小説を書くのであって、「書きたい」から書くのであって、実際に小説を書いている時点で、「表現できない」「書けない」ことはならない。少なくとも文章は書けるのだから。

でも俺からすると、その「表現した文章」というやつが、「小説」であるかどうか疑わしく感じられる。キーボードを叩いていると、自分が結局何を書いているのか、どんな話が書きたいのか見えなくなってくるのだ。そんな状態で書き続けていて、果たして意味があるのだろうか――。

突然、後方からクラクションが短く鳴り響いた。やばい。思わず考え込んでしまって周りが見えな

くなっていた。信号はとっくの昔に青になっている。走り出そうとしたらガコンと車が揺れた。

「げっ……!」

エンストしやがった。最悪。慌ててエンジンをかけなおす。後ろの車がまた短くクラクションを鳴らした。明らかにイライラしている感じだった。わかったよちよつと待つてるよ今すぐ出すからさ。エンジンを復活させ、今度こそ発進させる。

――やっばりなんか疲れてるよ、俺。

プロオオオオオオオオオ。

港から出た先に延びている道は、海沿いに緩やかなカーブを描いていた。車通りは少なく、時折二、三台がすれ違っていく程度だ。

家を出てから、なんやかんやで二時間ぐらいは経っただろうか。俺は無事磐田島に到着し、海沿いの道に車を走らせていた。水面は穏やかに揺れ、陽の光がその中できらめいている。島の自然と海に挟まれた道の中を、俺の運転する黄色い車だけが走っていく。

気持ちいいねえ。

途中、駐車できそうなスペースがあったので車を降りてみることにした。ちょうど海が見渡せるよくな場所だった。隣り合う島々や、それらを結ぶ橋が見える。

海から吹く風が潮の匂いを運んできた。そういえば、こうして潮風を肌で感じられるほど、海の近くで来たのも久しぶりだ。どこか懐かしい磯の香り。美しい島々の風景を、俺は携帯で何枚か写真に収めておく。

そろそろ昼時だった。一瞬、ケチってコンビニかどこかで済ませてしまおうかとも考えたが、せっかくだから、島の名物で腹を満たすことにした。ネットで検索をかけてみると、この先にいろいろ美味しい店が多く立ち並んでいるらしい。地元で取れた海の幸が自慢だそう。ひとまずその辺りを訪ねてみようか。再び車に乗り込んでエンジンをかける。

プロオオオオオオオオ。

「はいお待ちどうさん」

運ばれてきた天井は、想像していたよりもずっとボリュームがある代物だった。地元の海産物をふんだんに用いました、とメニューに書いてあったが、なるほど看板に偽りはないらしい。記念に一枚写真に収めてから箸をつける。甘辛いタレが絡んだ揚げたての白身魚の天ぷら。他にもタコやイカ、エビのかき揚げ、それから山菜やタケノコなどの山の幸もたっぷり。口に頬張る。美味しい。

店は繁盛しているようで、テーブルのあちこちで、地元の人と思わしき爺さま婆さま方が楽しげに談笑しているのが聞こえてくる。俺は一人、カウンター席の隅っこに陣取って天ぷらを頬張っていた。

食べ終わって支払いを済ませると、レジのおばさんが話しかけてきた。

「お兄さん、観光？」

「え？ ああ、ええ」

「よう来ちゃってじゃねえ。ここにはどれくらいおるの」

「一泊しようとは思ってますけど」

「それなら、ええトコあるよ。この先に、波止場という民宿があるから。あそこの料理美味しいよ。うん。あと、あっこ安いけえね。お兄さん学生さんでしょ？」

安いのは大歓迎だ。今宵の宿をどうするかまだ決めていなかったところだ。せっかくだしその情報を参考にさせてもらおう。

「今日はこれからどこに行くんね？」

「自然の家のあたりをぶらぶらしようかと」

そこに、客の一人が割り込んできた。

「兄ちゃん、あのあたりはあんまりいいものがねえぞお。山と海ばかりでさあ」

「え？ ああ、ええと、自然を見に来たんで、ええ……それで大丈夫ですよ。ありがとうございます」
また別の客が声を上げた。

「何を言ってるんな、シゲちゃん。向こう行ったら、大きい砂浜があるうが。朝日がええが見える所っちゃうてなあ」

「おー、ほーじゃったのお。なんて言うたかいなありや」

ああ、その砂浜ならネットで調べていたときにチラッと見かけた。確か日の出がとても綺麗に見えるとかで、新しい観光地になりつつある場所だとか。

「えっと、磐田サンライズビーチですか」

「そうそうそれ！ いやあ今時の横文字はようわからん。ガハハハ」

地元の人からの情報を得て、俺は店を出た。いいなあ、こういう爺ちゃん婆ちゃんというもの。色々と教えてくれてありがたいや。あまり下調べをせずに出てきてしまったことかと思っただが、案外何とかなりそうだ。磐田サンライズビーチも、名前だけ知っている程度でどんなところかはよく知らない。暇があればいつてみようか。

とはいえ、創作もしなければなるまい。わざわざ意欲を持って小説を書くきっかけを作るために——ついでに学校のレポート課題を消化するために——こうして愛用のPCを持ってきてまで旅をしているのだ。少しでも書き進めてみなければ。

書けるかなあ。納得できるやつ。

いやいや、つべこべ言わず書くんだよ、と首を振って自分に言い聞かせてから、俺は先ほど店のおばちゃんに教わった民宿とやらを調べてみることにした。でも言っちゃあ何だが、田舎の民宿だ。ネットに情報載ってるかしら。

幸いにも、すぐに住所と連絡先を調べることができた。電話を入れ、空きがあることを確認すると、俺はひとまず宿に向かって車を再び走らせた。

アクセルを踏みながら、視線の片隅に映っていた島の緑に目をやった。秋晴れの空の下、少しだけ

色づき始めた木々が車窓の向こう側で流れて行く。

今夜の宿を押さえた後、俺は磐田少年自然の家を訪れた。こういう施設にはやはりというべきなのか、団体が泊まりに来るものらしい。俺のように一人で来るのは、少なくとも俺のほか誰もいなかった。「珍しいですね。お一人ですか」

事務の受付の人にも言われるくらいだから、相当珍しいのだろう。物好きな兄ちゃんと思われてるんだらうな。

「ええ、まあ。前に一度ここを利用したことがあって……」

「おお、そうでしたか」

施設の利用に関しては、前もって予約が必要とのことだったが、敷地内の山林に設けられたアスレチックは、事務所に言って書類を書けば誰でも利用できるそう。

「アスレチックってどんなのがあるんですか」

「ターザンロープとか、吊り橋とかですねえ。こちらの用紙にご記入ください」

記入を終えると、午後五時までとなりますので、お帰りの際は連絡をお願いします、と彼はにこやかに言った。

施設の案内表示をたどりながら、アスレチックとやらの入り口にたどり着いた。すぐそばに設置し

である大きな看板に、施設の全体図が書いてあった。全部で二〇個ほどの遊具がコースに散らばり、歩いて回ればそれなりに運動ができるらしい。

一人で遊具と戯れる二〇代の青年。なんだかなあ。まあ知り合いがいるわけでもなし、何より自然の中に行きたいと思つての今回の旅だ。童心に返るのも悪くない。

山道をくぐっていくと、早速最初のアスレチックが顔を出した。丸太とネットで作られた遊具が、上り坂にそって伸びている。案内表示には「ネットの長城」。どうやらこれを最初はよじ登っていくらしい。どう見ても長城なんて豪華なもんじゃないけれど。

「よっこ」

こうやって遊具で遊ぶのはいつぶりだろう。あの時、野外活動で訪れた時も遊んだ記憶がある。あまり時間がなくてちゃんと楽しめなかつたような気がするが。

ネットに足をかけ、アスレチックをよじ登る。思ったよりも傾斜がある。足元がゆらゆらとゆれる。実質、四、五メートルもないぐらいの距離だったが、登り終えるまでずいぶんとあつたような気がした。木々の葉がさざめく中に、鳥の鳴く声が混じって聞こえてくる。

「これも登つた……ような気がするな……」

懐かしいな。二段目のネットに足をかけながら、俺は野外活動で訪れた時のことを思い出していた。



Age:13 敗れ

パチパチという音にあわせて、火の粉が森の澄んだ空気の中に舞っていく。

「そろそろ大丈夫かー。できた班から食べてくださいよー」

担任教師がそういつて急かすものの、中学一年生が料理をテキパキとこなせるかというところ、そういうわけにもいかない。

「やばいつて。完璧あたし遅れてんじゃん」

「もう。湯川くんもうちよつとき、皮むきやるならちゃんとやってよ」

「……すまん」

班員からあきれた口調で言われ、彼は幾分バツが悪そうに背中を丸めてみせた。二宮佳奈もまた、この湯川昭利という少年の所業に多少あきれはしていた。

野外活動二日目。この日の昼食は班のメンバーで協力しての自炊。にんじん、玉ねぎ、肉にじゃがいもというシンプルな具材でカレーを作るというものだった。自然に囲まれて火をおこし自分たちの飯を作る、アウトドアの王道のようなプログラム。料理の上手い者、下手な者、それぞれに奮闘し鍋に材料を切り入れて煮込んでいく。

ただ、湯川の場合は、明らかに下手、それもド下手であった。自分からじゃがいもの皮むきを志願しておきながら、いざ作業を始めたたん「あれ、こんなに硬かつたっけ」と首をひねり、何を思つたかごぼうのささがきのような包丁捌きを披露し始め、二宮を始め班員一同押しとどめてピーラーを

——ピーラーがあるにもかかわらず彼は包丁を使っていた——勧めたのである。結局、あれやこれやと無駄な時間をかけた結果、二宮の班の作業ペースは大幅に遅れてしまっていた。周りを見れば、すでに皿に盛って食べ始めているところもある。

「どのぐらい煮えた？」

「開けてみる？」

二宮が苦笑いしながら、煮込んでいる鍋のふたを取った。班員全員がその中を覗き込む。果たして、お玉でかき混ぜた中身は、カレーの色と香りのするスープであった。

「ぜんぜんとろみついてないね」

「そりゃぜんぜん煮込んでないもん」

「……なんかごめん。俺が遅れたせいだ」

また湯川が落ち込んだような口調で言った。二宮は苦笑いながら返す。

「気にしない気にしない。それよりどうする？　こんなだけど、もう食べようか」

「そうだね。それでいいよ」

彼女にそう言われたのが嬉しかったのか、湯川の顔に明るさが戻った。口には出さないが、わかりやすいなあと二宮は思った。水っぽく炊けたご飯と、サラサラのカレールーが、班員分皿に盛りられていく。

この炊事に限らず、湯川の行動は見ていてわかりやすかった。班決めで一緒になった時から、ニコニコと嬉しそうな表情を浮かべていたものだ。彼の視線がたびたび自分に向けられていることも、二

宮は薄々気がついていった。明らかに湯川がこちらに向けてくる笑顔の回数が多いのだ。

彼は自分のことが気になっていのではないかと、二宮は考えるようになっていた。それはおそろく恋愛の意味で。そして彼女はといえば——。

「美味い！」

唐突な叫びは湯川の口から発せられたものだった。意識を引き戻された二宮は驚いて目を見開いた。

「……何？　どしたの」

「いや、美味いなーって。こうやって大自然の中で飯を食うってのも」

「そ、そうだね」

湯川はまたニコニコと笑ってスプーンでカレーをすくった。周りの班員が「何言ってんだこいつは」という視線を彼に向けるなか、彼はむしゃむしゃとスープカレーを口に運びながら言った。

「森の中でアウトドアなんてさ。まるでアドベンチャー映画で遭難した主人公の気分になれるよね！」

「……そうだね」

「……あれ？　違った、かな？　……ごめん」

やっと班員たちの冷めた目に気がついたのか、湯川はまた背中を小さく丸めていた。

ほんとに何なんだろうこいつは、と思わず胸の内、二宮は呟いていた。

基本的に今回の野外活動は、あくまで学習のためのプログラムであり、ただアウトドアを満喫するために来ているわけではない。「部屋に入ったら騒がず明日の予定の準備をしておくこと」「ゲームやトランプなどの持ち込み禁止」などと、教師陣が口を酸っぱくして生徒たちに言い聞かせている。もちろん、それを中学生たちが行儀良く守るわけではない。

「はい、上がりっ！ さっちゃんの負けえ」
「あーっ、もう……」

そろった手札を二宮は勢いよく場に置いた。相手は悔しそうに、手元に残ったジョーカーを放り出した。

二宮が過ごす四人部屋ではババ抜き大会第三回戦が終了したところだった。負けた人が今気になっている人についてみんなの前で正直に告白する罰ゲーム付きである。そして幸いにも彼女は最後の最後で勝負に競り勝ち、三戦連続でババから逃げおおせたのだった。

「えーやだあ、話すの」
「さっちゃんの好きなん誰？」

「そーいやさ、さっちゃんこないだ、アイツのことなんか言ってたなかつたっけ」

「ちよっと待ってって、別に好きな人なんておらんもん……！」

「はあ？ あたしちゃんと言ったじゃん。逃げんなよお、いるんでしよう好きな人お」

「逃げてないよ！ マジでないんだって……」

「ほれほれ、早く言えー」

先ほどからこの調子で他の子もやられている。かろうじて二宮は負けを三連続で回避していたが、そろそろ自分にも順番がくるのではないかと気をもみ始めていた。

さっちゃんと呼ばれた女子生徒が顔を赤くして、観念したようにごにごにょと気になっている男子の名前を言うと、みんな色めき立った。嘘オ、あいつう？ ちよっと意外。でも結構まあ確かにいい人そうよね。確かに。でもそんなカッコよく無くない？

「……いいじゃん別に」

「へー、やっぱさっちゃん好きなんだ」

「うーるーさーいー！」

罰ゲームが済んだところで、ふと一人が言った。

「そーいえば最後言っただけなの、かなちゃんだけだね」

「へっ？」

「そーだね。ちょうどわたしら全員話したし。かなちゃんも、好きな人バラしちゃいなよ」

「えっ？ いや、あの……それはババ抜きの罰ゲームでしょ？」

「あー。隠しちゃって。好きな人いるんだ」

「いや、ちよっと、その……」

そして彼女はささか姑息な手段に出る。

「ちよ、ちよっとトイレ……！」

「わー！ かなちゃんヒキョーい！」

部屋から飛び出し、乱暴に扉を閉めて廊下を走る。頬が驚くほど熱くなっていることに二宮は気がついた。鼓動もいつになく早い。こんな気恥ずかしい感覚は久しぶりだった。しかもそれがもて、あんな幼稚な逃避行動をとることになるとは。

思いを寄せる相手がいらないといえば嘘になる。バレー部の先輩。練習の合間に見せる笑顔に惹かれていた。部活に行くのは今やバレーをするためというより、その先輩と同じ空間で時間を過ごすためになりつつあった。普段相手への気持ちは押し殺して、何事もないように過ごしているが、日に日に気持ちが大きくなりつつあるのを感じていた。

彼が好きだということに間違いはない。でも、それを自分の口で、他人の目の前で肯定することがあまりに気恥ずかしく思えた。先輩の顔が一瞬頭をよぎり、二宮はまた顔が熱くなるのを感じた。

「……顔洗お」

ため息をつけてトイレに向かう。消灯時間が近いこともあってか人通りは少ない。微かにがやがやとした声や物音が聞こえては来るが。

その中で、廊下の反対側から——男子生徒の部屋がある反対の棟の方から歩いてくる人影があった。

「あっ……二宮さん。どうしたの」

眼鏡をかけた少年は、明らかに嬉しそうに声をかけてきた。

「湯川くんか……ちょっとお手洗い。湯川君は？」

「俺もちょっと催しちゃって」

頭を掻きながら湯川が答える。

「いやあ、みんな禁止されてなのに、ゲームとかいっぱい持ってきててさ。楽しいのはいいけど、見つかっただらどうすんだ、みたいな感じで。部屋のやつらには困ったよ」

「そうなんだ……いいんじゃない？うちの部屋でもトランプ持ってきてるよ」

「あ、そうなの？ そうだったんだ……」

湯川はいやにそわそわとしているようだった。

「どうしたの？ 何かあった？」

「え、何が？」

「なんか落ち着きがないというか……。どうしたの？」

「ああ、いや……。あのさ。ちょっと、話してもいいかな」

急に真面目な口調になったのを感じて、二宮は眉をひそめた。湯川の顔もいつの間にか真っ赤になっっている。

「え……話？ その……何？」

湯川は大きく深呼吸をしてから、まっすぐに二宮の方を向いた。

「今誰もいないし——今度またいつ言えるかもわからないから。今ここで言わせて」

湯川の喉がぐくりと鳴った。眼鏡の奥でその目だけは今までになく真剣だった。

「俺、中学入ってから、ずっと……好きだった。二宮さんのこと」

「——っ」

「……ごめんね、突然。でも、言わせて。初めて会った時から、二宮さんのこと気になって、結

構気になっちゃって、いろいろ考えちゃってさ。気づいたらその、とっても、君のこと——好きなんだって思っ——ああ、何だ、何と言えはいんだろ……その……勉強もできるし、バレも巧いし、すごく尊敬できるなって、その、思っ、だからその、二宮さんのことずっと好きだった、よければ俺と付き合っってくれませんか？」

最後の方は早口になりながらも、湯川は勢いよく頭を下げた。そして二宮は驚いた表情で彼の告白を聞いていた。

まさか彼が自ら告白してこようとは。彼女からすれば、それは予想していなかったことだった。彼の好意こそ感じるものの、それを実際に告白するような、しかもここまでストレートな表現で告白してくるような、そんなタイプの人間には見えなかったのだ。

「……びっくりした」

彼女の口から発せられたのは、そんな素直な感想だった。

「へ？」

「ああ、いや……湯川くん、こんなに堂々と告白するんだって……意外だったというか」

言いながらも、彼女はどうか答えを返すべきかわからなくなっていた。

正直、まっすぐに好きですと彼に言われて、悪い気はしなかった。むしろ嬉しかった。人から何のためらいもなく「好きだ」といわれるのは、とても嬉しい体験だった。

しかし、だからといって目の前にいる男の子のことを、こちらも好きと言えるかというところがなかなかなかった。

彼じゃない、という声彼女の中で響いた。そして予感していた。自分はきっと、彼のことを恋愛対象として好きになることは無いだろうと。友人としては彼のことを好きだし、面白い子だとも思う。でもそれが——あの愚直な告白があるとしても——恋人として好きになれるかというと、それは違った。彼の気持ちを受け止められない理由を、彼女はすでに知っていた。いつの間にか二人の間に短い沈黙が流れていた。

「……ありがと。その気持ち、すごく嬉しい」

湯川の顔に一瞬花が咲いたような明るさが宿った。そして次の彼女の言葉で一気にしぼんでいった。

「でも、ごめん……私、もう、好きな人がいるんだ」

「……へあ」

湯川の声はもう言葉になっていなかった。またしばしの沈黙が、先ほどより何倍も重いそれが場を支配した。

「……本当にごめん。その……気持ちに答えてあげられなくて。でも、嬉しかったのは本当だよ——ごめんなさい。今更だよね」

「ああ、いや……その……いいんだ」

湯川は苦笑いして答えた。それはどこか不自然で、無理やり作り出したような顔だった。

「その……なんだろう。俺も、そんなこともあるかなって覚悟はしてたつもりなんだ。そうか、もう……好きな人いるんだね。なら仕方がないか」

「えっ……いいの、それで……？」

「うん。……好きなんでしょ？ その人のこと」

「……うん」

小さく彼女は首を縦に振った。たったそれだけの動作が、とても重く、鈍い動きに感じられた。

「そっか……それならいいんだ。それにもともと——もし二宮さんに好きな人がいるんなら、諦めようと思ってたから。これでいいんだ」

そう言いながらも、彼は目のあたりを手で拭っていた。小さく鼻をすすって、彼はまた不自然な笑みを浮かべた。

「……ごめん。ありがとう。でもちゃんと一度、気持ちを伝えたくって。そしたらちょうど今二人きりで、誰もいなくてさ。今言わなかったら、もう言い出せないんじゃないかと思っちゃってさ」

「……わたしこそ、本当にごめんね。気持ちに伝えてあげられなくて」

応えられなくて当然といえば当然だった。彼女にはもう思いを寄せている人がいる。それに対して、湯川は別にタイプというわけではない。あくまで友人の一人だ。

それでも、せっかく告白してくれた彼を、自身の片思いを理由にして足蹴にしていることに対して、彼女は申し訳なく思っていた。

「二宮さんも……頑張ってるね」

湯川が言った。その顔には泣き笑いの表情が浮かんでいた。

「——ありがとう。頑張る」

「……小便可の忘れてた」

トイレのドアを開けて、今一度湯川は彼女の方を見た。寂しげで、燃え尽きたような目をしていて。ほんとに、急にゴメンね。じゃ——また明日。おやすみ」

「……うん。おやすみなさい」

男子トイレの扉が閉められた。彼女は一人廊下に取り残された。踵を返してゆつくりと元の部屋に戻っていく。部屋に戻ると、さっそく友人各氏が待ち構えていた。

「あ、帰ってきた！ どこ行ってたのさ」

「……トイレに」

「うっし。じゃあ改めて、罰ゲーム抜きでかなちゃんの好きな人を教えろー」

「そーだそーだ。……あれ。かなちゃん、何かあった？」

「え？」

「なんか元気ないような」

「……何でもないよ」

部屋を出て、また帰ってくるまで五分と経っていない。けれどそのわずかな時間の中で、本当にいろんなことがありすぎたのだ。多少は顔に出してしまったのかもしれない。

「ホントに？ ……もしかして、この手の話ホントに嫌だったりする？」

「……ううん。大丈夫。……好きな人、の話だよ」

「え？ いるの？ かなちゃんいるの？」

彼女は一度深呼吸をした。自分の気持ちをもう一度確認するために。ついさっきはつきりと自覚し

た自分の気持ちをし、ちゃんと言葉にするために。
「私もいるよ。好きな人——」



Age:21 見つめる

——今だっ、と彼は思った。銃声が途切れたその一瞬について、隠れていた机の中から飛び出した。身を低く、少しでも敵との距離をつめるために。目の前で殺された仲間たちの姿が一瞬頭をよぎった。

逃がしてやるものか。やつらをなんとしても追い詰めなければ。男はいまや、刑事から仲間を殺された復讐者に成り下がっていた。追い詰めて、追い詰めて——それからどうするのだ？

その一瞬の思念の去来が、果たして原因だったのだろうか。

銃声が再び聞こえたときには、彼の足に激痛が走っていた。左足を撃たれていた。倒れこんだと同時に悪党どもが駆け寄ってくる。

「野郎ッ」

刑事は咆えた。手にした回転拳銃を必死の形相で構える。なめてかかってきたチンピラどもの胸に一発ずつ。熱く焼けたような痛みを抱えたまま、刑事は今度はすぐ近くの通路の影に隠れる。

利那、その隠れた通路の壁に、続けさまに銃弾が叩き込まれた。飛び散る壁の破片が刑事の顔を叩いた。

「いい加減にしてくれよ、刑事さん」

憎たらしい声が聞こえた。彼がずっと追いつている組織のボス。麻薬と人身売買の元締めで、これまでも摘発を受けながらいくぐってきた。

「悪いけどこのまま行かせてもらうからな。あんたらと遊ぶ時間もないんでね」

「ふざけやがって！」

痛みに歯を食いしばりながら刑事は叫んだ。

「よくも部下を殺しやがったな」

「ほざけポリ公。てめえの部下なんぞ知ったことかよ。俺はただ自分の商売をやってるだけなんだ。あんたらごときに仕事の邪魔させら

「……何書いてるんだ俺」

一人そうつぶやく。俺はパソコンの画面相手に目を細め、キーボードを叩く手を止めた。

ただいま午後二〇時過ぎ、民宿「波止場」の一室。俺は浴衣姿で、授業の課題として課された、短編作品の執筆に取り掛かっていた。構想は刑事が出てくるガンアクション。主人公がマフィアのボスの摘発に乗り出す、次々に部下を殺され、窮地に追い込まれていく、なんて話を考えていたのだが。

「あー、……何書いてるんだろ、俺」

またこれだ。自分が何を書いているのか、わからなくなってきた。おかしいな。結構前から構想自体は練っていて、ある程度書きたいストーリーも考えられているはずで、あとはそのままテキストにおこせばいいはずで。

それなのに、今自分が書いているものはどうだ？

なんか面白くない。非常に緊迫したシーンのはずなのに。サスペンスってのはもったこういうシーンでドキドキハラハラするもんじゃないのか？ 何とか言葉遣いも陳腐だし。今どきの悪い人たちは、警官をどう表現するのかしら。

「何だよポリ公って……」

ああ、ひよつとして、すごくありきたりに書いてしまったんじゃないか？ 刑事と悪者でドンパチして、それでもって主人公がピンチになる。そんなよくありそうな話を、ひねりもなく書いているから、面白くないんじゃないだろうか。どっかの刑事ドラマでありそうでもないな。あ、そうだよ、絶対そういうドラマを一回見たことがあって、それで影響されたんだろ。

「……つまりは俺のアイデアでも何でもないわけで」

俺はため息をついて、パソコンの画面を閉じた。とはいえ、今の進捗状況ではとても眠るわけにいかない、電源を切るわけではない。便利なもので画面を閉じてしまえばスリープして、開けばまたすぐに作業が再開できる。やれやれ、今夜は寝られるかな。

それまで座っていた椅子から立ちあがり、敷かれた布団の上に寝転がる。天井には昔ながらの丸い蛍光灯が吊り下げられている。しばらくそのままじつとして、光の輪が浮かぶ天井をぼーっと見つめる。

「俺、何が書きたかったんだっけ……」

今一度、そこから考え直すことにする。

ええと、刑事ものが書きたい。出てくるのは主人公とマフィアの一味と、ポストと、警察の人間と、それから、ああ、ええと。

「……多すぎる」

たかだか学校の課題に、どうやら二時間もののドラマの脚本を構想していたらしいことに、俺はようやく気がついた。出てくる登場人物の数も、設定も、何もかも多すぎる。ゼミのみんなは大概、原稿用紙数枚に収めてくる。それに比べて、俺が今書いているものを全部文章に起こしたら、いったい何枚必要になることか。あー、そういうことか。話のネタがデカ過ぎるんだ。刑事^{デカ}だけに。

「……寒っ」

盛大に自爆した。爆炎で熱くなるならまだしも、心の中は親父ギャグのせいで一気に冷え込んでしまった。やばい、本当に寒い。布団に包まりたい。悪寒がする。自分寒い。

ダメージが回復するまで、しばらく時間がかった。ごろごろと布団の上を寝転がったり、毛布に包まってみたり。ああ恥ずかしい。二一にもなつて何やつてるんだ俺。やっぱりガキンチョだ、いつそのまま幼児退行してしまいたい、ああやだよ。毛布を引っ被る。寒い。繭にでも包まってしまいたい。口から糸でも吐いてやろうか……。

ひとしきり布団の上で暴れた後で、俺はもう一度、頭の中の整理に取り掛かった。

……つまりだ。確かに書きたいものはある。だが、その書きたい物語が大きすぎるのだ。ゼミで出される課題というのは、いわばまだ修行の段階で、練習の場なのだ。そうしたこと——書きたい物語のポリウムとか、書きたいことの整理とか——も含めて勉強する場であつて、大長編を書く場ではない。そんなものは卒業制作で書くなり、文学賞へ投稿するなりすればいいのだ。

今書いているような刑事の話は、確かにそれなりに前から構想が頭の片隅にあつた。どこかでそれをちゃんと組み立てて、どんな作品になるか試してみたのだ。そしてそれが、ゼミの課題というシチュエーションに向いていなかっただけなのだ。でも書いていてなんとなく、楽しく書いていないのもまた事実だつた。いや、楽しいというとまたそれは言い方が違う。何だろう。もつとこう、のめりこめないというか、集中力が続かないというか。書けば書くほど、どことなく熱意が冷めてくるような。

「……これって、書きたくないってことなんだろうか」

おかしいな。書きたいと思つて書いていたはずなんだがな。俺、ほんと何を書きたいんだろう。

ああだめだ、なんだか似たような問答をずっと頭の中で繰り返している気がする。起き上がったた

め息をつく。頭が回らなくなりつつある。糖分がいる。あとカフェインも。

「……コーヒー買おう」

旅館のロビーに出て、自販機に小銭を入れる。脳に糖分を送り込むため、微糖でミルク入りのやつを買う。さつそくその場でプルタブを開けて飲み干す。普段はブラックを好んで飲むのだが、この時ばかりは甘つたるい液体が体に染みわたっていくようだった。

「あら、こんばんはあ」

後ろから声が聞こえ、振り返ると宿の女将さんがニコニコと立っていた。

「お風呂のお湯加減いかがでした？」

「ああ、どうも。よかったですよ、気持ちよかったです」

「それはそれは。今日はしっかり観光できましたか？」

「ええ、まあ」

「明日の明け方、サンライズビーチに行くの、おすすめですよ。明日はちょうど朝はよく晴れるみたいだから。朝日がきれいでね」

「そんなにきれいなんですか」

「最近じゃ何？ えーと、何とか映え、とかでネットで話題になつてつて話でね。若い人もちよくちよく観光に来られるんですよ。夏場には昔だったら考えられないくらい人が来るようになりましてね……」

どうやらかなりの人気スポットらしい。磐田サンライズビーチ。

「じゃあ、ビーチに行ってみることにしますよ」

「ゼヒ、ゼヒ。ホントきれいですから」

女将さん曰く、明日の日の出は六時過ぎだそう。早起きせにやらんか。やれやれ。

明日の予定を確定させ、俺は部屋に戻りもう一度パソコンの画面を開いていた。起動させたワープロソフトには一文字も入力されていない。先ほどまで書いていた文章をいったんわきに置いておいて、今一度新しく書き出してみようと思った、のだけれども。

「……どう書こうか」

さて、何を書いたらいいものやら。今回のゼミの課題は、自身である情景や舞台設定を考え、それに沿った話をゼミで討論できる分量で書いてくること。ところが俺が書きたいと思っていた話は明らかに原稿用紙数枚では足りない。つまり、今回の課題に対する題材としては、少し的外れだったのでないか。それも、なんだか書く上でのモチベーションが低下し始めているらしいネタだ。

とはいえ、せっかくここまでいろいろ考えてきてポツにするのも惜しい。今まで書いてきたものを基にして、刑事の活躍の瞬間を切り取ったものを書いてみようか。

場面は一気にマフィアのボスとの一騎打ち。互いに銃を向け合って、殺るか殺られるか、次の瞬間全ての決着がついてしまう——そんな一瞬を書いてみよう。とりあえず課題はそれで。うちの先生も『迷うよりもまず書け』と言っていた。ああそうだ、なんならサークルの部誌に載せる原稿もそんなテイストで書いてみようか。バトルの一瞬を描く。西部劇の決闘的なアレ。いいじゃない、いいじゃない。

俺はゆっくりりとタイピングを始めた——男は銃を向けた。その先にも銃をこちらに向ける者がいる——なんて書き出し。

課題を進める頭の片隅ではしかし、もう一つの疑問が解けないまま、くすぶり続けていた。俺は結局、どんな話を書きたいんだろう。

朝の五時台に起きたのは久しぶりな気がする。眠い目をこすりながら着替えて車に乗り込む。件のビーチまでは車で数分もない。短い距離ではあるが寝起きの頭で事故を起こしてもしょうがないので、緩やかにアクセルを踏んでいくことにした。

ああ、ここか。磐田サンライズビーチ。車道のすぐ近くに広がっている海岸線。そこから海に浮かぶ島々の影が見える。まっすぐ、細長く伸びた砂浜は整備が行き届いているらしく、砂のきめ細かさや遠くから見てわかるようだった。

俺は車を降りて、そのままボンネットをベンチ代わりにして座った。前もって買っておいた缶コーヒーの口を開ける。

空は静かに白み始めている。日の出まではあと十分ほどといったところか。砂浜の方からは、きれいだねー、あーこれヤバーい、などといった若者の声が聞こえてきていた。薄明かりの中、めいめいカメラや自撮り棒を東の空に向かってかざしているのが見える。中には腕を組んでくっついたカップ

ルと思わしき連中もいる。チクショウめ。俺はコーヒーを喉に流し込んだ。

結局、昨日の夜は筆があまり進まなかった。話の方向性を決めたとはいえ、たった原稿用紙数枚の分量が恐ろしく遠く感じられた。もう少し書き進めなければならぬ。ゼミの締切までまだ日にちがあるのが幸いだった。

だが考えたいのはその先だ。

俺は結局、何を書きたいのだろうか。今後の卒業制作に向けてもそうだし、これからも書き続けている上で——本当に書いていけるのかどうかはまた別として——俺はどんな話を書きたいのだろうか。俺はどんな話を書けるのだろうか。どんな話だろう。大したものを書けない気がする。子どもの俺に、大人にまだとてもなり切れていない自分に、果たしてどれだけのショウセツが書けるものか。

ふいに坂本の顔が思い浮かんだ。その顔は子どもの頃からそう変わったりはしていない。でも明らかに大人びて見える。間違いなく奴は大人だ。俺よりもずっと。

目線の先で、朝日を待つカップルが楽しげに話しているのが見える。表情はまるで見えないが、それでも会話を楽しんでいるのがわかる。俺は二宮のことも思い出していた。彼女は今どうしているだろうか。元気にしてるかな。この間の同窓会で会ったきりだ。磐田島という環境が彼女との思い出を蘇らせてくれる。それも恥ずかしい思い出だ。再会した時にはそんな思い出、口にも出せなかったけれど。

『湯川君元気にしてた？』

『ああ。そっちも元氣そうだね、久しぶり』

『卒業してから会う機会なんてないものね』

中学の時から比べて、ずっと大人っぽくなっているような気がした。おしゃれをしているせいもあつたのかもしれない。それを差し引いても、たわいもない近況や昔の思い出を樂しげに話して見せる彼女の表情は、やっぱり大人びて見えた。

彼女は笑って俺と会話してくれていた。それだけで有難い話だ。確かに俺の気持ちに彼女が届くことはなかった。それでも、フラれてから月日を隔てた今もなお、友人の一人として笑顔で接してくれたことが、何より嬉しかった。それはきっと彼女が本当に大人だったからこそだと思う。

みんな大人だ。胸張って、見えないところできつと歯を食いしばって頑張って生きている。俺のようにはやるべきことを作業で流して、休みには自堕落に時間をつぶして食って寝るような、そんな生き方をしてはいまい。みんなに比べたら俺はまだまだきつと——。

その時、目の前が急に明るくなった。

浜辺で歓声が上がった。海に浮かぶ島の影から、まっさらな陽の光が指している。いつの間にか日の出の時刻を迎えていたらしい。島の凸凹に沿って、影と光が空の色合いに濃淡をつけてゆく。仄かなオレンジの光が空に浮かぶ雲を、そして海を照らし出す。

「おお……」

それはとても美しい光景だった。陽の光はゆっくりと、でも確実にその高度を上げ、夜の闇を西の果てに追いやるようにしている。仄かに紅い光球を中心に、空の色が美しいグラデーションに塗り分けられる。俺はいつの間にか携帯を取り出して、きらめく空の方向にカメラを向けていた。

こんなにきれいな風景、携帯のカメラなんかじゃきつと切り取ることはできない。それでも俺は何度もシャッターを切り、少しでもその光景を収めようとしていた。

「良いな……」

こんなにきれいな朝日を見たのは初めてかもしれない。

浜辺では多くの観光客がみんな写真撮っている。ある者は自撮り棒を掲げ、またある者はジャンプした瞬間をカメラに収めようとしている。友達と、家族と、そして恋人たちがそれぞれこの瞬間を共有している。……ぼっちの俺には関係ないことだ。一人古い車に寄りかかり、お陽さまを眺めている自分。ううう。

いや、待て。俺にだって親友ぐらいいる。あいつの場合は腐れ縁とでも言うべきか。俺はもう一度、今夜会う予定になっている親友の顔を思い浮かべていた。

そうだ。せつかくだし、どうしたら立派な大人になれるのか、あいつに聞いてみるか。

どうやって彼女にプロポーズするほどオトナになっていったのか、取材のつもりで聞いてみることにしよう。そもそも、こんなことで悩み始めたのも、言っしまえば坂本の報告から始まったんだ。

あれがあつたせいで色々考えがまとまらなくて、やれ大人だ子どもだと悩んでしまうんだ。

……我ながらひどい責任転嫁だ。悪いな渉、でも今夜は付き合ってくれ。一緒に飯食ってお前と話していれば、きつとこのモヤモヤも解決できる気がする――。

「……本当にそうか？」

どうだろう？ 彼は俺に何か言ってくれるだろうか。言ってくれたところでどうなるのだろう。俺

はまた書けるようになるだろうか？ 自分は子どもなのか大人なのか、そのモヤモヤを取っ払うことができるだろうか？ 俺とあいつとで、そんな話をしているというのがいまいち想像できない。しかもラーメンを啜りながら。今宵は坂本が勧めてきた街のラーメン屋で落ち合うことになっている。

「……まあ、話してみて、だな」

缶コーヒーを飲み干した。太陽は少しずつ上に昇り、静かに揺れる水面を一層きらめかせ始めていた。



Age:13 嘆く

ため息をつく湯川の姿がよく目に付くようになったのは、行事も一通り終わった秋頃のことである。クラスで会うにしても、遊びに行くにしても、坂本は友人の吐き出す息が、どこか悲壮感を伴っているのを薄々感じていた。「何かあったのか」と聞いたところで、

「へ？ 何が？」

はぐらかしておきながら、また弱々しく息を吐くのである。あまり突っ込んで聞くのも億劫に思われて、坂本はそれ以上の追及をしないでした。

そんな状態が一週間以上続いた。だが、秋の気配がいよいよ濃くなり始めたその日、湯川の姿を見て坂本は思わず問いかけていた。

「おい。具合悪いのかお前」

「いや？ 元気だよ。何で？」

いつになく湯川の顔は白く、吐き出されるため息は細かった。壁にもたれかかるようにしてどうにか立っている。元気だよと言われても全く坂本には信じられなかった。

「何かあったんだろお前」

「別に」

「前から何か機嫌悪そうだったしな」

「……」

「何か言にくいことでもあるのかよ。……愚痴ぐらいなら聞いてやれるが」

白い顔のまま、湯川は辺りを見回した。休み時間の教室はそれなりに人がいる。あまり人に聞かれないのか、廊下で話す、と言って彼はフラフラ外に出た。窓際に寄りかかり、また力なく息を吐く。

「おい。本当に具合大丈夫だろうな」

「……落ち込んでるだけ」

「何で」

また湯川は辺りを見回した。チラチラと視線を泳がせつつ、随分と小声で坂本に囁く。

「……落ちた」

「……あ？」

一瞬、坂本はポカンとなった。

「落ちた？ 何が」

「……かわ」

「何？」

「丸河エンタに落ちた」

「丸、何だって？ ああ、思い出した。文学賞かなんかだよな」

「……長編小説書いたんだよ。お前にも見せたる前に……」

ああ、と坂本は思い出した。確かに以前、プロローグだとかいう文章を見せてもらった記憶はある。しかしそれはもう随分と前の話だ。

「春に見せてもらったあれか。つか、書いてたんだ、あれ」

「……八月末が締め切りでさ。書いたわけさ。必死こいてさ」

「……すると腰を下ろし、湯川は廊下に座り込む。」

「……頑張ったよ。すごい頑張って書いてたんだよ。テストの前日だろうが何だろうがさ。毎日コツコツ——そりゃ気分の乗らない日もあったけどさ。それでも完成させて出したんだよ。自信作だったんだよ」

「それで落ちたのか」

「……こないだ結果が出た。俺の名前も、作品名も、リストに一切載ってなかった——それも、一次

選考通過者のところにさえ名前が残ってなくてさ。ああ、お前知ってる？ 賞に送られてきた原稿、全部で三〇〇作だそう。それで一次に残ったのはたった五〇数作——結局俺のは、それ以外の部類になっちゃったのさ」

「え、何？ 賞取れると思ってたの？」

「奨励賞ぐらいなら。……さすがに大賞まではいかなくとも」

「……お前さあ」

坂本は頭を掻いた。

「そりゃ取れねえだろ」

「……何で」

「何で、じゃねーよ。取れたらびっくりだよ」

「なんだよ。決めつけやがって」

口を尖らせて湯川は拗ねたような声を出した。坂本はさらに言った。

「そりゃ、作品を書いたんなら、そりゃすごいなって思うよ。でもさ。中学生がいきなり小説書きましたって言って、それがデビューにつながるなんて、普通ありえねーだろ」

「自信があった作品なんだよ。自分の中で練りに練って、よしこれだ、って思って書いたんだ。絶対面白いはずなんだ！」

「だからそれは、お前の中だけの話だろ」

坂本はまたため息をつく。湯川が拗ねた目で坂本を見、ゆっくりと口を開いた。

「……自信があったのはホントのホントだ。それに、大賞なんて夢のまた夢だったのも、薄々は思ってた」

「それでもいけるとは思ってたんだ」

「夢はでつかく、だよ」

「なんだよそりゃ……考えてもみろよ、中学生で小説書いて、それがなんとか賞ってのもらっただなんて、そりゃ天才だぜ。でも悪いけど、俺はお前のこと天才だとは思えないな」

今度は湯川がため息をついた。ゆっくりと立ち上がり、ずり落ちたズボンの位置を直す。

「……でもまあ確かに……お前の言う通りかもしれない。落ちたからには、たぶん俺にはまだそんな話なんて——面白い話なんて書けねーのかも。自信はあったけどさ。でも結局……思うようには書けなかったのかもな。確かに最後の方なんか、締め切り近くで急いで書きちゃってたし」

うつむき気味に話す湯川に対し、坂本はまたため息をついた。そろそろ、彼の落ち込み具合に嫌気がさし始めていた。

「まあ、何でもいいけどさ。小説落ちたからって、そんなに落ち込むかね。俺てっきり、二宮のことかと思っただが」

ビクッ、と湯川が一瞬肩を震わせた。

「……何で二宮さんが出てくんの」

「何でもなにも。昨日二宮に彼氏ができたからだと……」

「っー」

明らかに湯川が慌てた表情を見せた。噂によれば部活の帰り、二宮が好きだった先輩に告白したところ、めでたく付き合うことになったらしい。誰かがその様子をすっかり目撃してしまっていたらしく、一夜明けた今では、クラス中の人間が知るところとなっていた。坂本は続ける。

「まあ、残念だったな。せつかくお前告白までしたのにな」

「……へ……何で知ってんの？」

呆けたような口調で湯川が尋ねる。

「は？ お前……自分のことが噂になってたことも知らなかったの？ フラれたって、結構噂になってたぞ」

「……うおおお」

湯川は頭を抱えてうめいた。やめてくれやめてくれ、今俺の顔を見るな恥ずかしいんだ、などと小声でボソボソつぶやいている。

呆れたやつだ、と坂本は心底そう思った。

「気づいてなかったのか？」

「……いや……そこまで噂になっていたとは……」

「クラス全員知ってんぞ」

「……お腹が痛い」

「何というか……お前、その……バカだな」

「どうだ参ったか」

「自慢をするな。……ていうかさ、お前そんなに落ち込んでる時点で、未練タラタラなんじゃねーか」
「んなことねえって。今日は小説の件で落ち込んでるだけだって！」

「……ホントか？」

湯川はメガネを指でずり上げ、慌てて答えた。

「……っ、あの子のことはもういいよ。もう好きな人いるって言ってたし。フラれちゃったし、俺ももう諦めてるしさ！」

「……そうか？」

嘘をつけ、と坂本は胸の内を呟いた。小説が落選したことも湯川にとってはショックだったのだから、今の彼の反応はどう見ても、二宮のことで受けたショックの方が大きかったとしか思えなかった。湯川はどこかわざとらしい動きで伸びをした。

「あーあ、ダメだなあ。ホントにダメ人間だな俺は！ 何かこう、スパッと気持ちを切り替えられるようなことないかな」

「……もう諦めついてんじゃないか」

「創作の話！ 気持ちを切り替えて、新しい話を考えていかないと、だよ。お前の言うとおりだ。うじうじしてもしゃーねえや。でもまずは気持ちの整理から始めないと」

「……気持ちの切り替えねえ」

ため息をつきながら、坂本は何気なく外を見た。もうすぐ休憩時間が終わる。グラウンドでは体操服に着替えた生徒の団が、朝礼台の前に集合している。そろそろ授業では持久走が始まるらしいこ

とを坂本はふいに思い出していた。

「ああ、そうだ」

その思い付きは、ほんの冗談のつもりだった。湯川に対するたわいもないジョーク。

「お前、運動してくれば？」

「――え？」

「体動かしたら、リフレッシュできるんじゃないか？ ほら、グラウンドでも走ってこいよ」

「走る……」

その直後の数秒間、湯川の動きが完全に止まった。ただグラウンドを真っ直ぐに見つめ、息をするのも忘れたかのように一点を凝視していた。

「……どうした？」

坂本は嫌な予感がした。そしてその予感、湯川の口から発せられた言葉によって確信に変わる。

「――良いな、それ」

「は？」



Age:21 語う

波に揺られる感覚が、俺の身体にゆったりと染みわたっていく。微かに船体が上下して、重いエンジン音を響かせながら水面を滑っていく。俺はフェリーの後方のデッキから、海に白い線が引かれていくのを見ていた。片手には自販機で買った缶コーヒ―。口に含むたび、ほろ苦い香りが鼻に抜ける。曇ってきたやがった。すっかり曇ってしまった空にも目をやりながら、そんなことを思った。朝はあんなにきれいに暗れていたのになあ。このぶんだと今日の夜は冷えるかもしれない。

課題はなんとかメドが立ちそうだった。まだ詰めなきやならんところがあるにせよ、どうにか筆を進めて原稿の大半を完成させることができた。この小旅行も少しは意義のあるものになっただろうか。部誌の方の原稿はまだ手付かずだが、方向性も見えたことだし、まあ何とかなるだろう。ポオオオー、と汽笛が曇った空に響いて消えていく。風が頬を撫でる。心なしか少し冷える。

ポケットに突っ込んでいた携帯が震えた。坂本からだった。

渉▽ 店場所わかる？

湯川昭利▽ 調べるー

麺の長屋って店でしょ？

帰ってきたスタンプは、勇者が「然り！然り！」と叫ぶものだった。どこかのアニメキャラらしい。何だっけこれ。

湯川昭利▽ 現地集合で良い？

渉▽ おけ

俺は残りのコーヒーを飲み下した。携帯をしまおうとして、ふと顔を上げる。一泊した磐田島が、随分と遠くに見えるところまで来ていた。

『本日もご利用ありがとうございます。まもなく阿品港あじなに到着致します——』

アナウンスが聞こえてきた。俺は携帯を構え直し、遠ざかり島々にカメラを向けた。曇っているせいで見栄えは良くないが、何となく一枚写真に撮っておきたくなったのだ。画面の中で、船がたてる白波が、轍のように海面に描き出されては消えていった。

その店は奥に長く、カウンター席のみのシンプルな作りだった。「長屋」という名前も頷ける。人気の店らしく、もうすでに多くの席が埋まっている。あいつのオススメということだが、俺はこの店

には初めて来た。まだ坂本の姿は見えない。俺は急いで二人分の席を確保し、お冷を飲んで待っていた。「らっしゅーせー！」

しばらくして、威勢のいい店員の声が聞こえた。入口の方を見ると、見覚えのある顔がこちらに向かってくるところだった。

「おお、こっちこっち」

手招きすると、友人はニヤリと笑って隣の席に腰を下ろした。

「早かったな」

「待ち合わせには早く行って待っておくのが信条です」

「あー、言ってたねえ」

笑い方や喋り方は昔から変わっていない。元気そうだ。髪型が随分短くなってはいるが。

「仕事、大変そうだな」

「まあな、今日もちょっと会社行ってきた」

「は？ 今日も？ 休みは？」

「取ってるよ。ちゃんと」

「……ブラックだな」

「だからちゃんと休みはもらってるって」

二人そろって、この店一押しという豚骨ラーメンを注文する。

久しぶりに見た彼は、どこか筋肉質になっっているような気がした。まあ、建設関係の会社に勤めて

いるから、それなりに体を動かす業務をしているのかもしれない。社会人というのは大変だ。

高校卒業後、坂本は就職の道を選び、今の会社に入った。同い年だが、社会人として随分と先輩になつてしまったわけだ。学生の俺と、大人のコイツ。しかも――。

「まさかお前がもう結婚するとはなあ……」

「……だから、まだだつて」

俺はため息交じりに呟いた。坂本は苦笑しながら、水をちびりちびりと飲んでいる。

「そーいや、そう言つてたな。つまり――なんだ。今どういう状況なんだ」

「プロポーズが成功しただけ。そこから先はこれからだよ」

「お前から言つたの？」

「ああ」

「彼女どんな人なんだよ」

「前にも言つたろ。会社の人だよ。俺の先輩でね」

「じゃ年上か？」

「今二六だ」

わお。つまり結婚したら姉さん女房だ。

「まあ、そうなるのかな。……写真見るか？」

頼んでもないのに奴は自身の携帯の画面を見せてきた。おおなんだ、ノロケかこの野郎。非リア充に対する挑発か、いいぜ乗つてやる。社員の集合写真の中から坂本がズームして見せてきたのは……

はあー、なるほど。

「……美人だ。良いなあ」

「ありがとう」

「何でお前なんぞが射止められたんだろうな」

「言い方を何とかしろ」

お世辞でも何でもなく、本当に美人さんだった。長い黒髪の似合う和風美人。どこか凜とした雰囲気がありながらも、優しい表情をしている。こういう人が会社の先輩でいたなら、仕事頑張れそうだな。うらやましい。

「何から何まで、びっくりだな……。で、あれか、プロポーズするのはその、片膝ついて指輪のケースをパカッと開けたりしたわけ？」

「なんだそりゃ……？」

水を含み、喉を潤してから坂本は続ける。

「まあ、結婚するのはまだ先の話だ。指輪は受け取ってもらつたけど……もう少し待ってくれって言われた。もうちょっと貯金してからにしたいんだと。まあ、現実考えるとそうだろうなと思うね。実際お金だつていくらあつても足りないわけだし」

「……なんか、すげえな、色々と」

俺も水を飲み下す。知らないうちに喉が渴いていた。でもさ、と俺は続ける。

「指輪を受け取ってもらつたとはいえ、何だな、ちゃんとくつつくまでは、なんつか、少しやきも

きするな」

「どういうことだよ」

「いやその……彼女に、逃げられたりとか……失礼な話だとは思うけど」

「バカ。不吉なこと言いやがって」

そんなことを言いながらも、坂本はいつもの笑顔を浮かべていた。

「まあ、彼女にも言われたよ。私もいい加減な気持ちでこの指輪を受け取る気はない、一緒に結婚する準備をしていこうって——なんて言われちゃってさ。ここで頑張らなくてどうすんだって話だろ。せつかくももらった時間があるんだから、男をあげとかないな」

「……かっこいいなお前の彼女さん」

かっこいいのはいいが、なにやらノロケ話になり始めている気がする。くそっ、リア充め。多少恨みを込めて坂本を睨み付けてやった。そんな話がさらりとできるようになって、お前も大人になったな。うらやましいぜこの野郎。

と、ラーメンが二人の目の前に運ばれてきた。食欲を掻き立てる豚骨の香りが湯気とともに立ち上る。

「ここの美味いんだ。付け合わせのピリ辛もやしを入れるのがおすすめだぜ」

坂本は辛そうなもやしの和え物を丼の中に投入した。俺も習って少し入れる。おお、これは美味そう。

「腹減った。まあ、食べようか、友よ」

「食おう」

箸をとり、二人同時に麺を啜る。

「悪いな。送ってもらって」

「いいよ。付き合ってもらった礼だ……いやー、食ったな」

俺は助手席に坂本を乗せ、すっかり日の暮れた街に車を走らせていた。おいしいラーメン屋だった。糖質と油ですっかり腹が膨れている。あの後二人ともに替え玉を追加し、坂本の奴はさらにチャーハンの大盛りを平らげた。

食後の気怠さに包まれるなか、俺は緩やかにハンドルを切った。車は街の灯りの群れを抜け、バイパスを走っていた。道を照らすオレンジの光が入れ替わり立ち替わり、走る車を、俺たちを映し出す。車のエンジン音がうるさく聞こえてくる。

「まあ、安心したわ。結婚だのなんだの言われて、ちょっとびっくりしてたんだけど。元気そうよかった」

「けっこう連絡はしてたじゃねーの」

「いやいや、実際に会うと会わないのとじゃ、やっぱりね……あのさ。後学のために、失礼を承知で聞くんだけど」

「なんだ」

「……彼女とはもうヤツたの？」

「この野郎」

坂本は俺の頭を軽く小突いた。我ながらひどい質問だと思う。

だが彼はいつものように——中学の頃のままの顔で苦笑いしていた。

「……どんな風にしてるか詳しく教えてやろうか」

「やめろ、冗談だつて。……てかヤッてんのかよこの野郎」

「そりゃ付き合ってるんだし」

「おええ、否定しないんかい」

「聞いてきたのはそっちだろ」

「ええええ、そりゃあもう。御馳走さまでございます」

「悪かつたよ」

二人してまた笑う。パイパスを降りて、彼の実家がある方へと車を走らせる。今はまだ実家暮らしらしいが、結婚したら彼女と二人で暮らすのを楽しみにしているそう。

まったく、ホントにお前は大人になっちゃったな。

「ところでアッキー、俺ばっかりじゃなくて、お前も近況報告とかないわけ？」

信号が赤になったとき、ふと坂本がそんなことを聞いてきた。

——そうだ。いろいろあるんだ。話したいことが。だからこうして会ってるんじゃないか。何から話そう。何を話せばいい。うまく言葉が出てこなかった。

「……ああ、そうだな……」

「確か大学で小説の勉強してるんだつたよな。どんなことやってたんだ？」

「……あ、ああ……そうだな……風景を文章だけで表現したりとか……自分でテーマ決めてそれに

沿った短編書いたりとか。まあ、そんなことをな」

それで果たして自分が成長できているのか、今の自分のことを考えると疑問だった。

「まあそんな感じのことをな。いろいろつらつら書いてさ。時々長めの小説を書く機会もあってさ。

——何なら、今度サークルで書いたやつ、お前に見せるよ」

「おお、それはそれは」

坂本は笑った。それと対照的に、俺は自分の顔がどんどん曇っていくのを感じていた。

ああそうだ。俺は確かにショウセツを書いている。そりゃ確かに大学にまで行って学んじやいるけど、今の自分の実力を思えば、「小説を書いている」なんて声高に言える自信なんて無い。俺の胸の内をよそに、坂本は懐かしそうに言った。

「お前、中学の頃から書いてたものな。あれ、今でも投稿してんのか？ ほら、ナントカ大賞、みたいなやつ」

「いや、その……」

俺にはどのタイミングで彼に話せばいいのか決めかねていた。自分がここ最近悩まされている胸の内をモヤモヤを少しでも解きほぐすためにも、彼に愚痴の一つでもいいから聞いてもらいたかった。どういったら彼の不安が伝わるのか、奴に言ったところで何か変わるのか——そんなことはわからない。わからないが、とにかく彼に話してみたいのは確かだった。胸の内に溜まっている形容しがたい気持ちの群れを、一度誰かの目の前でぶちまける必要が——。

「——おい。青だぞ」

言われてハツとした。いつのまにか信号の色が変わっている。今度はエンストしないように落ち着いて手順を踏み、なめらかに車を発進させる。

「大丈夫か？ 何かぼーっとしてたけど」

「……ああ、悪い。ちよっと、考え事してた」

「だろうな。運転中なんだから、しっかりしてくれよ」

……やっぱり、今言ってしまおう。これがベストなタイミングなのかなんてわからない。でも今しかない気がした。緩やかにハンドルを切りながら、俺は口を開いた。

「なあ渉……ちよっとその……相談というか、愚痴というか……俺の話聞いてくれるか？」

「は？ 何、いきなり」

怪訝そうな顔をされたが、俺は続けた。

「……俺さ。どれくらい大人になれたんだろうな」

「……は？」

俺の問いかけに、坂本は面食らったような表情になっていた。

「いやな、その……お前が結婚するって言ってきてさ。めっちゃビックリしたのよ。マジかって。お前すごいよ。もう一人前の社会人で、ちゃんと稼いでて、それで彼女も作って婚約までして。なんかすごいその……何だ。大人だなんて感じたわけさ。すげえなって」

いざ話してみるとこっ恥ずかしいな。ああ顔が熱い。でも言葉にしなければならぬ。

「それでさ、何というか……自分がすごいなんか……子どもに思えてきたんだよね。俺成長できてん

のかなって。周りがみんな大人に見えてきてさ。俺は別にこれといって、社会のために役立つようなこともしていないし、誰かのために意識して行動してるわけじゃないし。ただただ大学行って、バイトして、小説書いて、それをただ、こなすだけの人間になっていて、そこから何か一生懸命学んだり、吸収したりってことができないんじゃないかって思えてさ」

言ってて胸が苦しい。言葉が詰まりそうになる。どういうわけか鼻の奥が熱い。鏡に映したありのままの自身の姿を語ろうとすることが、こんなに苦しい行為だとは。

「怖いんだよな。自分が大人になり切れてないことが。子どものままでいることが。自分だけ取り残されてないだろうかって、思っちゃうところがあるんだよ。——アホ臭い話で、そんなことが理由で小説も満足に書いてないんだ。何だか知らないけど、面白く書いてる気がしないんだ」

何だか愚痴しか言っていないような気がする。俺は何が言いたいんだろう。何を坂本に伝えたくて、何をわかかってほしくて、鼻声になっちゃってんだろ。クッソかっこ悪い気がする。ただただ恥ずかしいことになってるんじゃないか。

「俺……お前に比べたら、まだ——ガキ、だよな？ 悪い、突然こんなこと言って……」

どこか念を押すような口調になってしまっていた。坂本は少しうつむき加減で俺の話聞いていた。少しの間だけ沈黙が下りた。ウインカーの音が妙にうるさく聞こえてきた。

「……大人ねえ」

しばらく下を向いていたが、ようやく低い声で彼はそう言った。いつになく神妙な顔つきだった。

「一応言っとくけど。俺は別に大人なんてもんじゃねーぞ」

「そうか？」

「当たり前だ。そんなこと言ったら、俺こそまだガキだよ。仕事だ彼女だってそんなこと言ったって、それがあから大人になれるって訳じゃねーだろ」

それはそうかもしれないけど。いや違うんだ。もつと違う次元で、お前は俺とは違って大人なんだ。俺はそう言うことが言いたいんだ。しかし坂本は首を横に振った。

「恥ずかしい話だけど、俺もいまだにしょっちゅう怒られてんだぜ？ 修行が足りないって。会社の人とかそれこそ彼女とかにも……お得意先の人に青二才呼ばわりされたこともあったっけかな」

「それは入りたての頃の話だろ？ 今は違うはずだ」

「ま、確かに最近はそのかもな」

そらみる。やっぱお前はすごい大人だ。

「……社会人としては普通だと思っぞ？」

坂本がこちらに向き直った。いつになく真剣な顔つきだった。

「あのさ。さっきから俺のこと、大人代表みたいな言い方してるけど、そういうのはやめてくれるか。聞いてて恥ずかしいわ」

「……ごめん。でも、お前のことすごいなって思ってるのはホントだぜ」

「そうだな、それも何度も聞いた……あのよ。言っとくけど、俺からすれば、アッキーの方がよっぽどすごいと思うんだけどもね」

「……え、何で」

「小説書けんじゃん、お前」

「……へ？ 小説が書ける？ 言われて俺は一瞬固まった。友人の顔にはいつしか、いつものニヤニヤした笑いが戻っていた。

「すごいことじゃん、それこそ。小説が書けるなんてさ」

「……どうして」

「俺には小説なんて書けねえもの」

言葉に詰まった。散々探していたものが、自分の足元に転がっていたような、奇妙な感覚が俺を襲った。

「今も頑張っつて勉強してんだろ？ ていうか、作品を書くお前の方が、よっぽどすごいことやってんなー、つて俺的には思うぞ」

自分にしかできないこと。小説を書くこと。俺にしか書けないこと。他の人にはできないこと。きつとどこかで、そんなこととつくにわかってた。書いている時も、こうして今悩んでいる最中も。そしてそれをどうにかして否定しようと必死だった自分がいた。こんな俺でなくとも出来ると、必死に自分自身を否定していたのだ。

車はいっしか住宅街の中を進んでいた。「そこで停めてくれ」と言われた家の前に俺は停車させ、エンジンを切った。ちょうど街灯の真下だった。仄かな光が俺たちを包んでいた。

「……最近、書くのがスランプさ」

いつのまにか、自分の口が思ったことをそのまま言葉にし始めていた。

「中学の時から、ちょこちょこ投稿したりはしてつけど、一次選考にも引っかからなくてさ。」

——大学の連中もすごいんだぜ。参ったよね。ゼミの仲間、みんな猛者ばかりでさ。こんな話の書き方あるんだとか、こういう物語のジャンルがあるんだ、とか。なんつーか、カルチャーショックを受けたような感じだよ。んで、自分がこれまで書いてきたものは、本当に大丈夫かって、なんか不安だったんだよな」

そう、不安だった。自分がしている「創作」というやつが、果たしてどれほどの価値があつて、どれほど意義があつて、面白い話なのか。

それを考えると、自分の書くものがだんだんと面白くないものになっていくような錯覚を覚えるのだ。こんな話はどうだ。面白いかこれ？ もっと良くするべきでは。じゃどうすりゃいい。わかんねえよ。そんなことの繰り返し。

「きつと俺も、それなりに書けているんだと思う。結局、自信が持てないだけなんだ」

だからずっと悩んでいるのだ。自信が無くて、その堂々巡りから抜け出す勇気が無くて、同じモチベーションのままぐるぐる回り続けていたのだ。

街灯の白い光が、静かにフロントガラスを通して車内の空気に滲んでいく。

「いろいろお前も悩んでるんだな」

類杖を突きながら、坂本が言った。

「俺は小説なんて読むぐらいが精一杯だから、どのくらい大変かなんてわかんないけどさ。正直知らんがなって感じだけでも。まあでも……そんなに自分で分析できてんだから、その……何だ、お前が

大人になるだのならないだの、そういうことも……アッキーなら何とかなるんじゃないか？ 無責任なことしか俺も言えんけどさ」

「……そうかな。でも、どうなんだろうな。自分のことがどうしても、ガキンチョのままのように思えてさ。中学のころ思い出して、あの頃と変わらないままなんじゃねーかって」

「あのままだったら俺引くね」

坂本がふいにニヤッと笑った。

「お前さ、あの時のこと覚えてるか」

「あの時って？」

「覚えてない？ 中学の時の、ほら、俺がむしゃくしゃしてるなら走れば、つて言つて。そしたらお前がそれ本気にしてさ……」

「おお、やめろ……黒歴史だよそれは！」

「今思うとあれは傑作だわ」

「やかましい」

よりにもよってそれかい。確かにあの時の俺もいろいろ落ち込んでいた。そして今よりも遙かにおバカな少年だった。バカだったからこそあんな恥ずかしいことができたのだ。思い出ただけで死にたくなる。

友人はわりいわりいと言いながら、さも可笑しそうに喉を鳴らした。

「お前、今あんなことできるか」

「死んでもやらねえ」

あの時は名案だと思ったのだ。恥もプライドもどうでもいいと思って、良かれと思ってあんな行動に走ったのだ。若気の至りというやつだ。

「だろ？ でもそれって結局、今だからこそそう思えるんだよ。そう思うぐらいには、大人になっただけのことなんじゃないかな」

それまで律義に付けていたシートベルトを外し、坂本は狭い車内の中で伸びをした。

「ほら、昔のこと振り返ってみると、あの頃はガキだったな、なんて思ったりするじゃない。でもそれって、今こうして何年も経ってからじゃないと振り返ることもできないじゃない。だからその——ああ……なんて言えればいいかな」

彼は言葉に詰まったが、言わんとしていることは分かる気がした。

過去を振り返るといことは、これまで生きてきた時間を振り返ることだ。積み重ねてきた過去を振り返る。かつて経験した「今」を振り返って、その時よりも成長した立場から、あの頃はまだ子どもだった、と回想する。

中学生の時代から、もう一〇年近い月日が流れている。俺も少なからずいろんなことをこの数年間に体験してきた。でもだからって、その成長した姿が、大人であるとは限らない。

「……そうだよな。まだ、大人じゃないよな」

俺は呟いていた。

考えてみればそうなのだ。いつから、子どもと大人できっちり線を引いて、明確な境界線を引いて

考えるようになってしまったのだろう。昔はまだ子どもだった、昔に比べて大人になったもの——そんなことは、過去を振り返った時に初めて感じることなのだ。過去と今とを比較して、その成長がいかほどかを考えて、初めて口にできる感想なのだ。そしてその瞬間に決まった時期などない。ベストなタイミングなんてない。ただ、その人がそう思う時が来たのなら、それがその時なのだ。

そして俺は、俺たちは多分、まだその時ではないだけなんだと思う。

「俺たちは、まだ大人じゃない。今はまだなってる途中——そうだよな」

「……さあな。よくわからんが。お前がそうだと思うんなら、そうなんじゃねえの？」

坂本はいかにも、やれやれ、というような感じで答えた。

本当はどこかで理解してはいたのだろう。あるいはそういう考え方もあることを知っていたというべきか。でもそれを肯定できずにいた。一人で勝手に焦って、周りから取り残されていると勘違いしてただけなのだ。そしてそれを認める勇気が乏しかっただけなのだと思う。

自分は今、間違いなく大人に向かって進んでいる——そう思うために、誰かに背中を押してもらいたかったのだ。

それにしても、と坂本が苦笑した。

「いろいろお前も大変だな。悩み多くて」

「……作家目指すと、深刻に物事を考えちゃうんだよ」

俺も苦笑した。今までの話で、気持ちがいぶ楽になったことは確かだった。

「涉……ありがとな。話聞いてくれて」

「別に。お前の愚痴を聞くなんざ、今に始まったことじゃないしな」

「迷惑じゃなかったかい？」

「いや？ 楽しさ半分、迷惑半分」

「やっぱり迷惑だったんじゃない？」

「嘘だって」

二人でケタケタ笑いあう。

「今度また一緒に飯食おうぜ」

「あー、酒が美味しいところあるよ。布袋町ほていにある店でさ……」

狭い車内で時間がゆったりと流れている。街灯の光が静かに降りる中、俺たちは笑いながらくだらない話をしている。それはきつと昔と同じように。

変わらないものもある。変わっていくものもある。その狭間で俺たちは生きている。

そして確かに、俺たちは大人に向かって、少しずつ歩いているのだ。



Age:13 肆し

ゆれる列車の中で、湯川はかたくなに坂本の方を見ようとはしなかった。つり革に手をかけたまま、じっと車窓の外を見つめている。その口元は真一文字に結ばれていた。

「あのさ……」

呆れながら坂本は友人に尋ねた。これから口にしようとしている質問が、あまりにも馬鹿げているような気がしてならなかった。

「本当にやるのかよ」

「やっちゃいけない法律なんてないものよ」

「何だそのガキみたいな言い訳は」

流れる景色を見つめたまま、湯川は電車の揺れに耐えていた。

時刻はもう夕方で、空は茜色に染まりつつあった。いくつか浮かぶ雲が光を遮って、空の色合いを微妙に変化させていく。街に向かう路面電車の中には、彼らの他にも多くの乗客が乗り合わせている。

「……本気でやる気か？」

いままさながら坂本は自分の発言を後悔していた。ふざけて言ったばかりに、親友はそれを鵜呑みにしてしまったのである。それもかなり奇抜なやり方で。

「……あのさあ。何だって、駅前に出てまで走るの？ 何でわざわざ人前で走るの？」

湯川が走りこむ場所として選択したのは、最寄駅の近く、大きな放水路にかかる橋だった。車通り

も多い場所である。彼らは学校帰りに、わざわざそこに向かってバスと路面電車を乗り継いでやってきたのだった。

「あんなに人通りの多いところだ。どうしてそんな走るなんてできんのさ？ 学校のグラウンドでいいだろそんなもの」

「グラウンドで走れるわけねえだろ！ 恥ずかしい」

どこか興奮したような口調で湯川は言った。大勢見知らぬ人がいる中でどうしてそんな大きな声を出せるんだ、と坂本はため息をつく。

「恥ずかしい？ こんな街中で走り回るほうがよっぽど恥ずかしいだろうが！」

「学校でやったら、あいつバカなことやってるってすぐ噂になるだろ！ でも街でなら、名前の知らないバカがなんかやってる、だけで済むじゃん」

「……ますます言ってることが意味わからんぞ。だいたいなんでそんなことやる必要があんだよ……それから、お前自分のことバカバカ言うのやめろって」

「いいだろ！ 実際バカなんだから」

「認めんなよ！」

自分自身を貶め続ける友人に、坂本は顔をしかめた。

だが確かに、彼がこれからしようとしている行動は、バカと表現されても仕方がないようなものだった。ストレス発散のために、どこか走れそうなところで全力疾走したい——しかも、学校のグラウンドでやるならまだしも、こんな街中で。

これから向かう橋は市内でも有数の大きな川にかかるもので、確かに道路の幅は広く、歩道もきっちりとした整備がなされている。まっすぐ伸びたその道はしかし、あくまで歩行者が安全に歩けるようにするためのものであって、全力疾走するためのレーンではない。

「ストレス発散だよ、ストレス発散！ 恋もダメで、創作もダメで、やっぱちよつとフラストレーション溜まってっから！ こころでひとつ、スッキリさせたいじゃん！」

湯川の声の中に一瞬、鼻をすすするような音が混じったのを坂本は聞いた。揺れる列車はまもなく目指す電停に到着しようとしていた。

「……お前、ひよっとして泣いてる？」

「別に！」

「泣いてるくせに」

「別にっ！」

鼻声で言いながらも、湯川はそっぽを向き続けていた。電車が止まると、彼は大腿で出口のほうへと歩いていった。

橋は駅から歩いてすぐのところにある。幅二〇〇メートルほどはある河川の上を、鉄筋とコンクリートの道がまっすぐに走っている。すでに多くの車が路上を行きかい、先ほどまで乗っていた路面

電車も、中央に敷かれた線路に沿って街に向かっていく。ガタゴトと揺れながら離れていく四角い箱を、坂本は湯川の肩越しに見ていた。大股で歩く湯川は、橋に向かって歩いてる最中も、ずっと顔を見せないままだった。

彼が久しぶりに振り返ったのは、歩道が始まるまさにその地点に立ったときだった。明らかに目が充血している。夕日が薄い雲に隠れて、少しだけ辺りは薄暗くなった。

「……悪いね。こんなところまでつき合わせて」

「まったくだ。俺は走らんぞ」

「いいよ。もとから一人で走るつもりだし」

「さっさと済ませろ」

坂本は盛大にため息をついた。

「ホントに、何でついて来ちまったんだろ……言っとくけど俺、他人のフリするからな。そのコンビニで待ってるから、勝手に走って来い。俺は知らん」

「そのコンビニだね？」

「後でなんか奢れ。迷惑料だ」

「いいよ」

「肉まんぐらい食わせろ」

「もちろん。こんなバカに付き合ってくれてるんだ、それぐらいさせてくれ」

「だからよ。そんなにバカバカ自分で言うなって。こっちが悲しくなるわ」

「……わりい。もう一個、お願いがあるんだが」

「何だ」

「カバン預かってくれるか？ よく考えたら、置き場所がないや」

「……ポテチとコーラ追加だ！ たたく……便利屋かよ俺は」

「悪いね」

半ばひったくるようにして坂本はカバンを預かった。湯川は鼻をすすりながら笑ってみせた。どこかその表情は震えているように見えた。

「さあ、やるならやってこい！ 俺は知らんから、好きにしてくれ」

「……サンキューな」

返事もそこそこに、坂本はきびすを返してコンビニへと歩き始めた。そして数歩も行かぬうちに、その大声は背後から聞こえてきたのだった。

「ぬうあああああああああああああ——！！」

思わず振り返った先で、湯川が全力で走り出したのが見えた。しかも大声を張り上げながら。なんとも不恰好なフォームのまま、制服姿の友人の背中がどんどん小さくなっていくのを、坂本はあつげに取られながら見つめていた。

「……おいおい」

絶叫しながら走るとまでは聞いていない。突拍子もない友人の行動に呆れて、坂本はまた嘆息した。彼のことを本気でバカだというつもりはないものの、それでもこの所業はさすがに呆れる。

「なにやってんだよ、お前——」

二人分の荷物を抱えながら、今一度コンビニへと歩を進める。

まったく、あいつは何をやってるんだか。失態して、文学賞に落ちて、つまるところ自分の思い通りにならなくて。それでストレスが溜まったからといって、こんなことができるだろうか。自分にはできない、と坂本は思った。自分の思い通りにことが進まない、それだけで人目をはばからずこんなところ走れるか。ストレス発散で大声を出すなんて、近所迷惑もいところだ、ばかげて。やっぱりあいつはバカだ、いい意味でも悪い意味でも。彼はそう思った。

そして少しだけ、本当に少しだけ。

「——俺にはできないよ、そんなの」

バカなことをやってのけてみせる湯川のことを、羨ましかった。

橋の反対側まで来たころには、湯川は顔面蒼白になっていた。

「……ぜえ……ぜえ」

今までこんなに、気持ち悪くなるほど全力疾走したことがあっただろうか。自分でも気がつかないうちに、相当な体力と気力を足につき込んでいたらしい。橋の欄干にもたれかかり、湯川は必死に息を整えようとした。のどの奥に焼け付くような感覚がこびりついて離れない。運動に慣れていない身体で、絶叫しながら走ったことによる当然の結果だった。

自分ののどから、こんなに大きな声が出るものなのかと、湯川は内心驚いていた。きっと道行く人も驚いていたことだろう。すれ違った通行人が皆一様に、不審者でも見ているかのような目で見てきたのを、彼は肌で感じていた。

「……そりゃ……どつからどう見ても……バカやってるものなあ……」

ははは、という笑いすら乾ききつてうまく発声できなかった。疲労は激しく、息は乱れたままだ。ここにきて運動不足の生活を続けてきたことを、湯川は苦く思った。体は全身悲鳴を上げているが、まだ走り足りなかった。まだ気持ちの整理をつけられるほど暴れきれていなかった。

「……折り返しっ」

無理やり足に鞭を打って、もたれかかっていた欄干からよろよろと離れる。何度も深呼吸を繰り返す。夕日が雲の中から顔を出した。鮮やかな光がちょうど橋全体を明るく照らし出す。疲れ果てた湯川の姿を、光が優しく包み込んだ。

彼の目の前には、紅く色付いた橋がまっすぐに伸びていた。彼は光が向かってくる方を見た。海まで続く川の流れ。川沿いに行き交う車。影になって見える建物。そして空にその日最後の光を投げかける夕日。

ふと、好きな小説の一場面が思い出された。『崩壊世界のリペアリスト』。あのシリーズのラストシーンでも、夕日が美しく描かれている。一つの冒険を終えた後、夕焼け空の下、一行はまた新たな旅に出ようとする——そんなシーンが決まって本の最後を飾るのだ。

小説の中で夕日に照らされている主人公とヒロインは、それだけで格好良く、画になった。夕日に照らされるその姿を想像するだけで、湯川は次なる物語への期待に胸を膨らませた。

今の自分とはえらい違いだ、と彼は思った。俺にそんな美しい話は書けない。面白い話は書けない。だから落ちたのだ。自分にはそんな話を書けるほどの技量なんてないことがわかっていたはずなのに。こんな美しい風景を書くだけの力が、今の自分にはまだないのだ。魅力的で可愛らしいヒロインを描く技量もまた然り。自分の隣に、ヒロインはいない。一人で勝手に息を切らして疲労困憊している少年が独りいるだけだ。

ふと二宮の顔を思い浮かべる。彼女の笑顔を、授業のときの真剣な顔を、告白したときの彼女の顔を思い浮かべる。きっと明日もクラスで見られるだろうその顔が、今となってはとてつもなく遠い。彼女の存在が、自分が立っているところからはるか遠く、高いところに行ってしまうかのような錯覚を彼は覚えていた。

いや、現実には、学校に行けば彼女にはいつでも会える。幸いにと言うべきか、学校生活の上で支障が及ばぬ程度のコミュニケーション——挨拶をしたり、同じグループになって授業に臨んだり——ができるほどの交友は続いている。だがそのたびに、湯川は彼女がどこか申し訳なさそうな、少しだけ悲しげな顔になることに気がついてきた。彼もまたそんな彼女の表情に、彼女との途方も無い距離を感じ取っていた。

「……ああ、くそっ」

またもやもやとした気持ちだが、胸のうちでとぐろを巻き始めていた。そのもやもやを作り出してい

るものの正体が、落選した自分の駄作ではなく、二宮との思い出であることに彼は気づいていた。やはり悔しかったのだ、と彼は悟った。彼女に別の彼氏ができて、それが彼女の好きだった人で、そして彼女は自身の手の届かぬようなところに行ってしまった。

気持ちに区切りをつけなければならなかった。告白して玉砕して、それで区切りをつけたつもりでいた。そして結局、彼女のことを諦められていなかったのだ。

走らなければ、と彼は思った。他に方法はいくらでもあるのかもしれない。けれど今の湯川には、それがショックと挫折感に打ちのめされている自分の心を切り替えるための、最良にして唯一の解決法であるように思われた。紅い光はまだ美しく橋全体を照らし出している。かろうじて息だけは幾分落ち着きを取り戻してきていた。

夕日に照らされる中を、感情むき出しで突っ走る。果たしてそれは美しい画になりえるだろうか。
「——アホくさ」

きらきらと川の水面が輝く中、湯川は嗤った。なぜだか泣きそうになって、顔が引きつった。目の奥からいよいよ熱いものが滲んでくるのがわかった。

一歩足を踏み出す。筋肉がきしむ。つま先がしびれる。かかどが痛い。それでも二歩、三歩、徐々に足を動かすスピードを速めていく。地面を蹴った。でたらめに腕を振り、軋む両足を無理やり前に出し、元来た道をありったけの力で駆け抜ける。

——いいよ、バカで。俺は本当にバカ野郎だ。彼は再び口を開いた。他人の目など意に介さず、ただ気持ちの赴くままに。

「うわあああああああああああああああああああつ！」
紅い日が照らす中、彼は涙を振り払いながら走った。
息の続く限り、叫び続けていた。



エピローグ

また、夢を見た。

俺はただっ広い空間の中で眠っていた。

周りには自分と同じように眠るサナギたちがいた。俺もまた同じように丸まってじっと動かずにいる。静かに空を飛ぶ日を夢見ている。

そのうちにちらほらと羽化するものが現れた。もぞもぞと殻を破って、新しく成長した姿を見せる者。羽をゆつくりと伸ばし、羽ばたき始める者。中には大空へすでに飛び立っている者もいる。

俺もゆつくり体を動かしてみた。

だがそれは叶わない。まだ繭の中の身体は、動けるほど固まってはいなかった。

——それでいい。

俺はそう思って、また眠りについた。サナギの体のまま、じっとその時を待っていた。

空には多くの蝶たちが、自由に空を飛んでいる。

そこでまた目が覚めた。

奇妙な夢だった。でも以前とは違って、悪い気はしなかった。

「……やだなあー」

憂鬱な気分にならざるを得ない。ぽかぽかとした陽の光はこんなにも心地よいのに、何だかってこんな憂鬱な気持ちにならなきゃならんのだ。何だかってこうも説明会やら対策講座やらが立て続けに入ってくるのだ？ 俺の気持ちに対する考慮というものをもっとすべきではないのか。誰だ就活なんて悪しき慣習を日本に植え付けた奴は。

なんて、グチを言ったところで何にもならない。きつとこれは必要な行事なのだ。避けられない試験というやつだ。そう思っておくことにしよう。俺はため息をついて車のギヤを入れ直した。

やれやれ、今はそんなこと考えなくていい。楽しむことが第一。さあ忘れちまえ。アクセルを踏み、少々飛ばし気味の速度で車を走らせる。いいぞ。黄色いスポーツカーは俺の操作に応じてエンジンを唸らせた。

大学三年生の年が終わり、もうすぐ俺も四年生になる。時が経つのは早い。最初にこうして車に乗って旅に出たのも、去年の話になってしまった。

それと同時に、いよいよ恐れていた就活というやつが始まった。来週からは狂ったように企業説明会の予定が入っている。まったく、どうして嫌で嫌でしようがないはずの就職活動に動しまなければならんのだ。しかもこの春休みの内からである。春休みつてのはそんなことをするための休みじゃないと思います！ と声を大にして叫びたい衝動に駆られる。

就活もそうだが、俺にとっては卒業制作が何よりの試練としてのしかかってくる。

でも、書きたいテーマは決まっていた。いろいろ悩んで、ようやく見出すことができた方向性。そしてそれは文章でアクションを表現するでも、ファンタジックな異世界を想像するでもない。

俺自身を描こう。他の誰でもない、自分自身の姿を。そう決めていた。

あの旅を通して、自分を見つめ直した。自分の心を、人生を見つめ直した。ともすればこれまで目を逸らしてきてしまったような己の姿を、しっかりとこの目に焼きつけた。そんなことをしているうちにふと、それが物語になり得るのではないかと思うようになったのである。

こんな俺の人生でも、いろんな山や谷があるのだと今更ながら気がついたのだ。いや、今だからこそ気がついたのかもしれない。

それを使って小説を書こう。自分自身の人生という、最も正確にインプットされた情報を基に、文章をアウトプットしよう。これまで経験してきたこと全部を材にして、物語を作ってみよう。そんな目標を描くようになっていた。

——等身大の青年を描くことこそが、きっと今の自分が描くべき課題なのだろう。今はそう思える。あの小さな旅を経て、そう思うようになっていた。

とはいえ、春休みに突入した今の俺にとっての喫緊の課題とえば、就活と言わざるを得なかった。今後は毎日のように説明会やら面接やらが続いていくことだろう。その中でも小説の構想を練っていかねばなるまい。就活も執筆も、いろいろ大変な年になりそうだ。

——こらあまずい。息抜きが必要だ。俺の心は残念ながらそこまでタフではない。

そんなわけで、俺は一人、車を走らせていた。冬の厳しい寒さは峠を越え、窓越しに降り注ぐ日光はその強さを増し始めている。

今度は県境をまたいでの移動である。特にこれといって目的地は定めず、気ままにあちこち見て回る。そんな一人旅。

正直なところ、一人のドライブに楽しさを覚えていた。授業も就活もバイトも無いというラッキーデーがあれば、できるだけ車に乗り込むようにしている。去年の秋以来、ちょっととした楽しみになっていたのだ。一応、小説のインスピレーションを得るため、という名目を掲げているつもりではいるけれど。

行く先で赤信号が灯るのが見えた。ゆっくりとブレーキを踏んで減速させる。

本当は、坂本のヤツに感謝しなければならぬのかもしれない。話を聞いてくれたし、何よりあい

つからの連絡がなければ、自分のことを真剣に見つめ直すなんてこともなかったかもしれない。穴が開くほど俺自身のことを見つめ直し考えるきっかけをくれたのは、他ならぬ坂本渉というわけだ。まあそんなの、こちらで勝手に思っているだけに過ぎない。アイツのことだ、仮に「君のおかげです、ありがとう！」なんて言ったところで、「知らんがな」と返されるのがオチだろう。きっとその顔にはいつものニヤけたような笑みが浮かんでるに違いない。また連絡しよう。

信号が青になった。俺はギヤを入れ直し、アクセルを踏んだ。

黄色い車体が、またゆっくりと走り始める。



(了)

総評

二〇二七年度
卒業制作
作品集総評

光原百合

今年も光原ゼミ卒業制作作品集が完成しました。執筆者の皆さん、お疲れ様。作品集制作にあたってご指導・ご協力いただいた皆様に、この場を借りて感謝いたします。

毎年のことながらそれぞれの個性あふれる小説ができあがりましたね。「自分はこういうものを書きたい」という熱い思いを語り合いつつ（「性癖」とか「妄想」とか呼ばれることもありました（笑））進めて行ったゼミも、大変楽しいものでした。

とはいえ、これも毎年いうことですが、光原ゼミには「卒業制作は時間と枚数との闘い」ということわざがあります（四〇〇字詰原稿用紙一五〇枚が上限）。「時間と枚数があればここをもう少しこうしたかった」という思いももちろん残っていることでしょう。卒業制作としてはこれで一段落として、愛着のある作品であれば、時間をかけてまたブラッシュアップしていくの

もいいですよ。

その時の役に立てばと、簡単な総評を述べておきます。読者の皆様にも、作品を味わうときの参考にしていただければ幸いです。

恋すれば歌詠み 岡本明香里さん

純朴で生きるのがあまり上手でない大学教員と、彼を慕う女子大学生の、歌を介したピュアな恋物語。心が洗われるなあ。ときどき「リーチ（主人公）、しっかりせい！」と言いたくもなったけれど（笑）。作者の岡本さんが短歌好きということ、かなり早い段階から短歌を活かした作品を書きたいと構想していました。短歌に関する知識もわかりやすくふんだんに盛り込んであって楽しめました。また、作中人物による創作短歌はもちろん岡本さんの手による

ものですが、これがまた楽しい。ヒロインの志保さんの短歌がだんだん凝ったものになっていく様子もよく工夫されていました。リーチ先生が当初憧れるマダム千代子も素敵に描けているのですが、その恋人が嫌味な男性として描かれているので、マダム千代子がちょっと「女を下げた」感じになったのが個人的には惜しかったです。

行きつく先にあるものは 土井利美さん

青葉と浅葱は無二の親友だが、浅葱が同級生女子に片思いをしている様子を見ているうち、青葉はそれを応援しつつも、自分でも説明できないもやもやが胸の中に溜まってくる。かと思えば浅葱が片思いしている彼女が青葉にアプローチして来て……高校生のそんな微妙な感

情と関係を綴った作品。「人が人を想う」ことについては従来考えられていたより遙かに様々な形があることが最近よく知られてきて、それ自体は望ましいことだと思えますが、以前なら「親友に彼女ができたら寂しいよね」と単純に済んでいたことを、この主人公青葉のように「この気持ちは何だろう」と悩んでしまう場合もあるわけで、人生の複雑さが増した気もしますね。でも、「わからないことはわからないままそっとしておく」という作者の姿勢が成功して、清々しい青春小説になりました。

サナギの旅 田端敏之さん

大学生である主人公が、一足先に社会に出ている親友の婚約報告をきっかけに「大人になる」とはどういうことかを真剣に見つめるため、

旅に出る。その旅の様子や親友とのやり取りに挟んで、小説を書き始めた中学時代のこと、当時のほろ苦い恋の思い出なども描かれています。青春の悩みや迷いを繊細に描きつつ、「あー男子ってこういうおバカなことあるよねー」と楽しく笑える場面も随所にあって、楽しい青春小説となりました。小説を書くことを志し、大学で文芸創作を学んでいる主人公の湯川君は、作者の田端君にとってはまさしく等身大で、湯川君が抱いている悩みや迷い（自分はどんなものが書きたいのか、など）は、かなりそのまま田端君も経験のあるものだろうと思います。だからこそリアリティが出て、作者にとっても意義深い作品になったのではないのでしょうか。

それぞれ、大学生生活の集大成として全力を尽くしたものになったことと思います。良き記念になりますように。

そして、皆さんの人生はこれからが本番。「書く」という営みは間違いなく、人生を深く豊かなものしてくれます。これからもぜひ続けて、書くことに取り組んでもらえたらと思います。

